草原

ノモンハン事件全貌記

樋口紅陽著

陸軍省報道部推薦

同文館

915.9-H563-2ウ
1200500758719
.9
63

始

915.9
H563
2

草原の肉弾

ノモンハン事件全貌記

樋口紅陽著

同文館

嚴たり！現地に於ける
日滿共同防衛の監視哨

大草原を敗走する敵をハルハ河に
壓して追擊する我がトラツク隊

ホロンバイルの大草原を
進軍する滿洲國騎兵隊

大草原の草と共に、敵陣を
蹂躙して進む我が〇〇隊

スハ殘敵！と、忽ち攻擊態勢に
移つた我が〇〇部隊の勇士

我が方の武士道的待遇に
感謝しつゝ接待を受くるソ聯捕虜

停戦協定成立＝兩軍使の會見
（前列向つて左が田中中佐）

946
243

はしがき

私がノモンハン事件に從軍して、內地に歸つて見ると、種々のデマが亂れ飛んでゐたのに驚いた。それを耳にするたびに、泣けて泣けてならなかつた。悲憤の咽び だ、慷慨の涙だ。靖國の御社の前に額づいて、幾度涙したか知れなかつた。

「斯かるデマを拂拭しなければならぬ。」と、斯く決意した私は、曩に「ノモンハン實戰記」を、ついで「續ノモハン實戰記」を著はし、茫々千里不毛の砂漠に、あらゆる科學兵器を總動員して迫つた敵に對し、皇軍の將兵が、肉彈また肉彈を以て勇戰奮鬪、此の砂漠に我が大和魂が、如何にして華と咲き、如何にして花と散つたかを物語り、一に尊い英靈にこたへ、一にデマの解消に努めたのである。

ところが、幸ひにも兩書ともに數百版を重ぬるに至り、所期の目的を達することを得たことは、著者として寔に感激に堪へないところであつた。

然しながら、當時は未だ事件の眞相を、公にするを得なかつた事は、遺憾とするところがあつたが、今や同事件勃發後滿三年の歳月を閲するにあたり、玆に一般に悉知されてゐない同事件の全貌眞相を公にすると共に、最も勇敢に、肉彈其ものを以て奮戰激鬪して、敵に殲滅的打擊を與へ、尊い經驗をのこした、我が將兵の勳功を涙でものし、これを「草原の肉彈」と題して上梓し、それ等多くの英靈に捧げ、同時に全國民に、涙の報告をなし、以て精神の作興と、士氣昂揚に資せんと企てたのである。

讀者諸氏、幸ひに一讀を賜はり、事件の眞相を掴み、將來に備へ、將また皇軍將兵の肉彈奮戰に、限りなき感謝と、萬斛の涙をそゝがれんことを……。

昭和十七年五月の末つかた

第一次ノモンハン事件勃發三週年を迎へて

著者識

草原の肉彈

ノモンハン事件全貌記——

樋口紅陽著

草原に繰り展げた一大激戰の繪卷

ゴビの砂漠に連る蒙古の大草原、其處に展開した一大肉彈戰、これを「ノモンハン事件」と呼ぶ、其の呼稱こそ事件ではあるが、實體に至つては古今東西の戰史に、未だ曾て見出すことの出來ない、凄絶と言はうか、慘烈と言はうか、形容の言葉を知らぬ程の激戰、いや激戰以上の激戰だつたのである。

それは、裝備した外蒙、ソ聯軍の優勢なる機甲部隊に對する、我が皇軍の世界に誇る肉彈戰だつたからである。語をかへて言へば、敵の重戰車、火焰放射器をはじめ、あらゆる火器を動員としての逆襲猛攻に對して、我が勇敢なる將兵の體當り戰法、所謂肉彈又肉彈を以て、殲滅的打擊を與へ、不法越境の敵を、國境線外に敗走せしめたからだつた。

時は昭和十四年五月末から、同年九月十五日、停戰協定成立の日まで、熱風吹きまくり、砂は灼け、草は萎え、名もなき草花までもが喘ぐ此の草原では、明けても暮れても、激戰以上の激戰が展開され、死鬪にまさる死鬪が續けられ、我が必中の巨彈が、敵の陣地を破摧すれば、敵も亦、重砲彈を送つて、我が陣地の覆滅を企て、鐵鋼鈑を唸らせて敵の重戰車、火焔放射機が迫れば、我が速射砲彈を以て、或は肉迫攻擊勇士の火焔瓶によつて、これを炎上擱坐せしめ、敵が大部隊の狙擊兵を以て逆襲すれば、我は寡兵の肉彈突擊によつてこれを屠り、大編隊を以て敵機空を侵せば、我が荒鷲これを邀へ擊ち、敵が誇つたE十五、十六型の新鋭機を、片ツ端から擊墜して、其の殘骸を草原にばら撒き、世界の空中戰史上擊墜數の新記錄を作り、全世界に豪語した、ソ聯空軍の脆弱さを、遺憾なく暴露せしめたのだつた。

其の間この大草原には、彼我の銃砲聲天を撼はせ、地を搖がし、空は硝煙に蔽はれ、屍は山を築き、血潮は河と流れ、千古の夢を見つづける花も、綠の草も、地肌の砂も、彼我の鮮血に染め盡され、一大激戰の繪卷さながらを、この大草原に繰り展げたかの觀を呈したのだつた。

滿洲國と外蒙古共和國の國境　此の戰爭以上の事件は何が原因で起り、如何に進展したか、其の全貌眞相は今日に至るも、未だ餘り知られてゐないが、それを知るには、先づ滿洲國と外蒙古共和國との國境を知る必要がある。

言ふ迄もなく、滿洲國も外蒙古共和國も、共に曾ては支那の領土であつたので、ボイル湖附近の境界は、滿蒙の行政區劃に過ぎないものであつたが、滿洲國、外蒙兩國が獨立したので、必然的に國境確定の必要が起つた。

そこで昭和十年(滿洲國の康德二年)、滿蒙兩國政府は、滿洲里に於て國境査定會議を開いたが、外蒙側の不誠意によつて、遺憾ながら何等得るところなく決裂した。それは表面こそ外蒙側の不誠意にあつたが、實際は黑幕的存在のソ聯の橫車的尻押しにあつたのである。

越えて昭和十二年(康德四年)九月、再び同一目的の下に、第二次滿洲里會議を開催したが、此時も亦ソ聯の橫槍によつて、何等外交的解決を見るに至らず、遂に物別れとなつたのである。當時滿洲國側としては、支那領土時代からの各種資料に基づき、哈爾哈河の線を以て國境とすべきことを主張したのであるが、外蒙側はこれを肯ぜず、不法の建前を固執して譲らなかつた。これが二回に及んで開いた滿洲里會議決裂の因を爲したものだつた。事實の上からするも、哈爾哈河以東は、嚴として滿洲國領となつてゐたのである。

然るに外蒙兵は、此の哈爾哈河の國境を侵し、滿洲國領土内に入り、常に不法を繰返し、滿

洲國々境警察隊、警備兵又は協同防衛に任ずる、我が關東軍との間に、絶えず國境紛爭を醸し、それがため我が方も幾多の犠牲者を出したが、侵さず侵されずの鐵則の下に隱忍自重してゐたのだつた。

ソ聯の傀儡となつた外蒙古

滿蒙兩政府が、滿洲里に於て、二回に亙つて開いた國境査定會議に、何がためにソ聯が横車的尻押しをして、これを決裂せしめたかといふに、それは、外蒙共和國とソ聯の關係を暴露すれば立ち所に其の魂膽を知ることが出來るのである。

抑も外蒙古は、東は滿洲國に接し、北はシベリアのバイカル湖を中心に、シベリア鐵道の沿線附近から、南は南蒙古を抱き支那に連る海拔千米から二千米の廣漠たる高原地帶、即ち草原と砂漠の國、それが此の外蒙古の全貌であるが、此のうちシベリア鐵道沿線附近はブリヤート蒙古で、ソ聯邦のうちに包含され、其の北と南の中間、即ち全蒙古の胴中に位してゐる。此の國の地理的存在を忘れてはならぬ。

元來ロシアは、帝政時代から、此の外蒙古に對して大きな關心をもち、種々の調査研究と工作を怠らなかつたのである。それは滿洲、支那への侵略的通路として、將また足場として重要性を有してゐたからだつた。殊にソ聯邦成立後は、益ゝ露骨に野心の牙を現はし、積極的に働

きかけた。それは外蒙古が、東方への作戰補給である、シベリア鐵道を側面から防衛するための前哨地帶であり、また北支方面への進出路として、地理的にも軍事的にも重要な役割を有つからだつた。

ソ聯は其の野望を達するために、極めて巧妙なる赤化工作を開始し、曾て外蒙古民衆が、支那及び白系ロシアの壓迫干渉に不平不滿を抱いてゐるのを見て、好機逸すべからずとなし、外蒙古民衆を煽動して、國民革命黨なるものを組織せしめ、我が大正十年（一九二一年）には、赤軍及び俄仕立の革命軍を以て、外蒙古全領域を平定した後、外蒙古軍隊なるものを組織させ、赤軍自らこれを指揮して、廣漠たる外蒙古を、何時の間にか猫婆を極め込み、表面は外蒙古人民共和國として獨立せしめたが、其の實は欺瞞工作を以て藥籠中のものとなし了つたのである。

外蒙古の政治は、國民革命黨の手にあるが、其の國民革命黨なるものは、悉くソ聯のお手盛りであることは言ふ迄もない。黨員はブリヤート族が最も多くその中心をなし。ハルハ族が其のうちの三割を占めてゐる。而して此の國民革命黨によつて踊つてゐる外蒙政府は、國民大會議及び國民小會議の決定に基づく國務委員會で構成されてゐる。同委員會は、軍務、内務、牧

畜、農務、外務、商工、交通、文教、保健、財務、司法の各省があり、地方の行政は盟（縣の如きもの）箭（村の如きもの）に分れてゐるが、現國務總理は、腸までもソ聯化した勞働者出身のチョイバルサンといふ共産主義者であるのを見ても、國民革命黨なるものも、それに左右さるゝ外蒙政府なるものの本體も、推して知るべきである。

尙ほ外蒙古の經濟組織はと云へば、其の資本の五割をモスクワより出資せる蒙古銀行が中心となり、曾ての支那資本は悉く閉め出しを喰つてしまつたのである。

外蒙古の全人口は、僅かに八、九十萬に過ぎないが、多くの民衆が、ソ聯の傀儡となり了つた現政府に對して、不平不滿を抱くことは、曾ての支那及び白系の壓迫干涉のそれに對するよりも、一層深刻なものがあり、住民の主要食料である羊の如きも、殆んどソ聯に持ち去られ、不滿分子は日を逐ふて增加しつつあるが、外蒙政府はソ聯の指金で、滿洲、支那へ對する國境地帶三〇粁を無住地帶とし、軍隊以外には住むことを許さず、民衆が滿洲へ支那へ遁れ去らうとしても遁れることが出來ないのである。しかし壓迫に堪へない民衆は、其の無住地帶の嚴重なる軍隊の監視の目を遁れ、哈爾哈河を渡り、濕地帶の野池坊主（野池の草の根が、太く丸く石の如く固まつたもの）を飛び越え、或ひは草に伏して、折々滿洲國領に越境する者が絕えな

いのである。例のノモンハン事件で、同族を救ふと叫び、彈幕を潛つて外蒙軍の中に躍り込み、同族の彈丸に殪れた、彼のビンバー大尉の如きも其の一人なのである。

外蒙古共和國の軍隊　前述の如く、ソ聯の屬國化した外蒙古の軍隊なるものはどんなものかと言ふに、悉くが赤軍仕込みで、其の數凡そ二萬五六千から三萬足らずで、ノモンハン事件當時の配備の狀況について見れば、滿洲國興安北省、卽ち事件を醸した方面へ隣接する東部地區に騎兵一軍團、此の一軍團は騎兵三個師團に飛行一旅團から成り、內蒙方面に對する南部地區に三個師團よりなる騎兵一軍團、ウランバートル（外蒙の首都、赤き英雄の都といふ意）を中心とする所謂中心地區に二個師團と飛行機若干より成る騎兵一軍團、西部方面に二個師團より成る一軍團を配備してゐたが、外蒙古の一個師團は其の兵數僅かに一千乃至二千名であるから、數の上からするも、實に貧弱極まるもので、殊に騎兵とは云ふものゝ、馬匹は問題にならぬ矮小なもので、其の戰鬪力もお話にならず、馬に乘つた歩兵といつた方が寧ろ適切なのである。而も外蒙古の人口は、年々歲々減少の一途を辿つてゐるのであるから、到底强力の軍隊を擁するといふことは覺束ないが次第であるが、また外蒙の軍隊を、眞に强化するといふことは、尠くともソ聯自體の脅威でもある。それがためにこの俄仕立ての軍隊を以て、彼等外蒙古

民衆には、押しも押されもせぬ、強力偉大なる軍隊であると思ひ込ましめてゐる。其の證據には、事件前には「外蒙古軍を以てすれば、日滿軍何程のことやあらん。」と煽て上げてゐたのを見ても頷かれるのである。

今其の兵役制度を視るに、規定によつて免除せられたるもの以外の、年齢二十一歳乃至四十歳の者は、悉く服役の義務を有し、其の服役期間は現役は騎兵、砲兵、戰車兵は二ケ年、航空兵、機械化兵、通信兵は三ケ年、豫備役は除隊後二年乃至三年これに服し、未教育者に對する軍事訓練や、補充兵教育なども行はれ、ウランバートルには、陸軍大學校、士官學校、幼年學校等の幹部養成機關も設けられてゐるのであるから、戰時總動員を行ふとすれば、最大十二萬程度のものと推定されるのである。

而して、其の編成裝備は、軍團と稱するものは、師團若干と直轄部隊として、砲兵、航空隊の補給機關を有し、師團は三個聯隊に機關銃隊一隊、七糎半口徑野砲十門から成り、一聯隊は、裝甲戰車聯隊、通信隊、裝甲自動車隊とから成つて居り、更に聯隊には、軍刀二中隊、機關銃二銃から成る一中隊、山砲中隊等がある。中隊はといへば、機關銃一小隊、輕機關銃分隊とを有する、軍刀二小隊とから成つてゐるから、其の編成だけは整つたものではあるが、實際

は烏合にも等しいもので、聯隊以上には、赤軍同樣參謀長、政治部員が配屬されてゐる。

外蒙兵の教育程度はと言へば、曾ての外蒙古人は、家畜を追ふて暮し、時の觀念もなければ、文字の智識なども殊んどなかつたが、ソ聯が赤化工作を行つて以來、小學校を設けレーニンやマルクスの肖像を掲げた教室で、文字を讀むこと書くことを教へられた者であるから、若い兵は以前の蒙古人の樣に低級なものではない。而して軍隊の精神教育の根本は、外蒙古共和國共產政府成立の歷史と、共產主義の徹底にあるが、彼等は一向に興味を有せず、入營中は歸鄕は勿論、家庭との通信も禁じられてゐるが、逃亡兵相つぐ有樣なのである。

現にノモンハン事件の折、或は捕虜のポケットに忍ばせ、或ひは敵陣に遺棄されてゐたパンフレットにも、「我等外蒙古人は、日滿兩國人と提携しなければならぬ。今こそ我等外蒙古國は、日滿兩國と交戰の立場にあるが、それは憎むべきソ聯の强制威嚇によるものであつて、日滿兩國は我等の味方であり、我等の當面の敵はソ聯である。我等は一日も早く此の惡辣なるソ聯の苦繩からのがれ、外蒙古の眞の獨立をはかり、世界の敵であるソ聯を、日滿兩國と共に討たねばならぬ。同志よ、忘れるな、奮ひ立て……。」云々等と反ソ過激の文字が列べられてゐたのを見ても、如何に彼等がソ聯の壓迫に苦しみつゝあるかを知ることが出來る。況んや一般民

衆に於ておやである。

外蒙古に駐屯する赤軍とその配備

外蒙古には、以上述べたやうな外蒙古自體の軍隊がある外に、ソ聯の軍隊が多數駐屯してゐる。當時東部には機械化一旅團及び飛行一旅團、其の他裝甲自動車部隊三旅團、東南部には騎兵一師團、南部には自動車化一師團、此の兵力約四萬、飛行機二百五十乃至三百、戰車裝甲自動車合計約三百位であつたが、事件勃發と同時に、ウランバートル方面より、續々增援軍を送り、不敵の挑戰を敢てしたのだつた。

事件當時の敵の第一線步兵部隊は、ベルム地方六〇三狙擊聯隊を中心として、聯隊二個師團を編成、野砲、重砲はウランバートル三六聯隊を中心として、戰車は六旅團で其の數約二千臺、空軍はタムスク飛行旅團、ダブリヤ飛行聯隊、パーター飛行聯隊より一千機に近いE十五、十六型戰鬪機、SB、TB重爆機など、いづれもソ聯が誇る新鋭機を集中し、步兵部隊はコルホーズから强制的に徵兵されたものが多かつたので、從つて團結力も、戰鬪力もなく、たゞ火焰放射器を以て威嚇する、後方督戰隊に怖れて戰ふに過ぎなかつたのである。

國境侵犯の眞犯人

事件の直接原因は、外蒙古兵が、國境線ハルハ河を渡り、滿洲國領內への不法越境にあるが、何がために外蒙兵が此の不法を敢てしたかといふに、それは勿論ソ

聯の使嗾によるものであることは明白で、其の當初こそ外蒙兵であつたが、日を經るにつれ、回を重ねるに從ひ、堂々とソ聯軍が越境し、而もソ聯軍の越境と共に、漸次惡質となつたのである。

然らば、ソ聯は何の目的を以て、此の使嗾を敢てし、平地に一大波瀾を起さしめたかといふに、

我が國が支那事變處理に邁進しつゝある間隙に乘じ、蔣介石政權に間接的援助の意味を以て、滿蒙國境に兵力を膠着させようと企んだものか……。

或はまた、鼓浪嶼島事件以來、英米佛が我が國に抗議を持ち込んだのを好機に、三國の意を得んがために、此處に一肌脫いで見せたものか……。

或はまた、血で血を洗ふ國內の肅淸工作によつて、對外的信用を失墜した結果、其の信用回復のために、强がりを見せるために計劃されたことか……。

或はまた、國內の不平を轉換して、此の國境に關心を集中せしむるためであつたか……。

或はまた、外蒙古がソ聯の魔手のために、幾多憂國先覺の志士は殺戮され、タムスク、ケルレン、ハルハゴール等の國境守備隊幹部數百名は捕はれ、喇嘛信仰者數百名も亦、反革命分子

として檢擧慘殺され、其の他親子夫婦間に於て、國事を語り不平を洩しても、直ちに捕へられて殺戮されるといふ暴擧に、國内には反ソ思想が充滿し、現政府不信の聲が澎湃として起り、其の儘放置するに於ては、未曾有の混亂を惹起する恐れがあつたゝめに、此の動搖せる民心を、國外問題に外らせ、その動搖を防ぐべく、窮餘の策に出たものか……。

其の何れにするも、ソ聯の行動こそは、實に奇怪至極と斷ずべきである。故に事件の直接原因となつたものは外蒙兵の國境侵犯にあつたが、其の眞の犯人は彼れソ聯だつたのである。

また此の滿蒙國境侵犯は、昭和十二年の乾岔子島事件や、同十三年の張鼓峯事件とも睨み合せて考へなければならぬ。此の兩事件は、公然とソ聯が眞の國境侵犯の眞犯人だつたのであるが、時と所こそ異れ、其の眞意には、一脈相通ずるものがあつた事を記憶すべきである。

ノモンハン一帶の地形　世界の耳目をあつめたノモンハンとは、一體どんな所かといふに、滿洲國興安北省の海拉爾から、南々西に約八十粁、貝爾湖の東方約七十粁、滿洲國と外蒙古共和國との國境線をなす、哈爾哈河の東方十六粁の地點で、地圖の上にも其の名さへ見出せない、蒙古人の固定包一つだにない砂漠地帶である。

今少しく詳しく言へば、滿洲國の西北端に位する興安北省に屬する、呼倫貝爾と呼ぶ、約十

六萬平方粁の廣大な草原の一地點である。此のホロンバイルの地は、元來蒙古在住の特殊地帶で、其の地名は、此の地方にある呼倫湖、貝爾湖に因んで生れたもので、「ノール」といふのは、「湖」といふ意の蒙古語であるが、此の地域は、東北一帶に線の太い大興安嶺を負ひ、西南は高原の一大草原地帶で、而も水流に富み、全蒙古に於ける地理的中心地帶となつてゐるのである。即ち興安嶺山中に源を發する哈爾哈河は、草原を西に流るゝこと延々二百數十粁にして貝爾湖に入り、其の貝爾湖は烏爾順河によつて呼倫湖に連り、外蒙側から東流する克魯河も亦呼倫湖に注ぎ、呼倫湖から東流する河に海拉爾河があり、其の主流は北に岐れて額爾克河となつて、滿洲國領を北に流れ、滿ソ國境をなす黑龍江に合流してゐるのである。

殊に此の水流のうち、滿蒙國境線をなす哈爾哈河は、家畜に必要なアルカリ性を多分に有してゐるばかりか、附近一帶は有名な牧草地帶であるから、水と草を求めて家畜を追ひ、一年中包を擔いで、移動する蒙古人にとつては、哈爾哈河畔は實に天惠の地で、季節的に此處に集ひ家畜と共に其の天惠に浴するのである。

ノモンハンは、此の哈爾哈河に沿ふた、三角の砂丘地帶で、この地名は、「溫和」「穩か」といふ意の蒙古語であるが、此のなどやかを表徵する一地點から、驚天動地の一大激戰が屬開さ

れたことは、思へばまた皮肉でもある。

此の地の南方をホルステン河が西に流れて哈爾哈河に合流してゐる。此の合流地點が。事件では川又と呼ばれた敵の渡河點だつたのである。

哈爾哈河は、水深八〇糎から一米五〇位で、河幅は廣い所で一町足らずではあるが、水流は豐富で絶ゆることなく、河岸は大濕地帶の所が多い。此の哈爾哈河の對岸が卽ち外蒙領で、一帶の臺地を爲し、事件の際は、此の臺地に無數の砲兵陣地を構築して、其處から猛烈に砲彈を浴せたのである。其の臺地の遙かに眼をやれば、褐色の地肌と空とが融け合つてゐる。而も其の臺地こそは、所謂外蒙の無住地帶で、常に監視兵が滿洲國側に對して銃口を向け、不氣味な眼を光らしてゐるのである。

ノモンハン一帶の地は、冬は氷點下三四十度に降り、吹雪けば視野を奪ひ、荒涼其もののの一大氷原を呈するのだが、春から夏ともなれば、五寸餘の綠の草が千里につらなり、其の中を白、黃、紫、赤など、彩とりどりの花が、綠を綴るかに咲き、遠く近く放牧の羊や牛の群が見え、數百萬羽の雲雀が、或は降り或は昇りして囀り、一大樂園を現出するのである。殊に此の地方の夏は、夜の十時に漸く闇が訪れ、午前の三時には早くも夜が明ける。卽ち白夜が續くの

である。

また特異なのは夕立で、蒙古特有の入道雲が、午後三時頃から地平の一角にむく〳〵と現はれ、それが一時間位の後に崩れ、眞黑い雲がのしかゝつて來ると、忽ち大草原は太い銀粒の雨で叩かれる。其の凄じいこと、だがからりと晴れた後は、天空に幾つもの虹の橋を、千里の平原の涯から涯に架け渡す美しさ、太陽が西の砂漠の涯に沒する頃は、大草原の空の半を眞赤に染め、夜は狼の不氣味な遠吠が、草原の靜寂を破り、家畜の群を驚かし、蒙古人の夢を破るのである。

因みに事件で一躍有名になつた、阿穆古朗、甘珠爾廟、哈爾哈廟、將軍廟、バルシヤガル高地、ノロ高地、ツアガンオボなども、悉く此のホロンバイルの地に包含されてゐるのである。

事件勃發までの敵の不法越境　此の草原に風雲急を告げたのは、昭和十四年五月四日後のことであるが、更に其の以前、卽ち昭和十年一月二十四日に勃發した、有名な哈爾哈廟事件の頃に遡つて檢討しなければならない。

哈爾哈廟事件といふのは、呼倫貝爾と貝哈湖との要衝にあたる、貝爾湖の東方の一角、哈爾哈廟附近を、滿洲國軍が偵察中、兼て不法越境の上、何事かを企んでゐた外蒙古兵が、突如不

法射撃をなし、滿洲國軍の瀬尾中尉外滿洲國兵一名を射殺、他の六名を負傷せしめた事に端を發し、遂に兩軍の衝突となつたのである。更に其の後同年六月二十五日、我が關東軍の犬養測量手外一名が、哈爾哈廟に近い、ハイラステンゴール附近を測量中、同じく越境の外蒙兵のために、不法拉致された事件が起つたのである。

其の後も、絶えず此の方面には暗雲低迷、滿洲國側の隙を狙つては、外蒙軍が不法越境を繰返し、ために紛爭を醸してゐたが、越えて昭和十四年五月四日以後は、殆んど毎日の如く、此の不法越境を敢てし、而も其の度毎に惡質となり、眼に餘るものがあつたので、隱忍自重してゐた日滿協同軍も、玆に膺懲の矛を執つて越つに至り、即ち第一次ノモンハン事件が勃發したのだつた。

今試みに、五月四日以降の、外蒙軍及びソ聯軍の不法越境を日誌的に記して見よう。

五月四日　正午頃輕機關銃三銃を有する外蒙兵約五十が、滿蒙國境ボイル湖の東方、ノモンハン南方バルシヤガル附近に越境して、國境巡察中の滿洲國警察官六名ほか十六名よりなる一隊に、不法射撃を加へたので、直ちにこれに應戰、約五時間にしてこれを國境線外に驅逐した。

五月十一日　重機關銃、輕機關銃、擲彈筒を有する約九十の外蒙兵が、午前二時頃ノモンハ

ンの西南約十五粁の地點に越境、同方面警備の滿洲國軍監視兵に發砲挑戰したので、直ちにこれに應戰、激鬪七時間の後、これまた哈爾哈河以南に撃退した。

五月十二日　外蒙兵十一騎が、ノモンハン西南方シリントラガイ附近に、午前十時頃越境してきたので、時を移さず反撃を加へ、これを遁走せしめたが、午後五時頃再び約二百騎を以て。バルシヤガルの西方地區に越境して、何事かを企みつゝあつたのである。

五月十三日　前日越境した外蒙軍は、此の日西南ノロ高地方面に移動したが、敵は重機關銃、輕機關銃の外に、迫撃砲までも有してゐた。尙ほハルハ河對岸のソラトスンガイトには、タムスク方面から、相當部隊の增援を集結して、益々挑戰的態度を示して來た。

此の日滿洲國政府は、今日までの不法越境事件に關し、ウランバートルの外蒙政府首相チョイバルサンに宛て、嚴重抗議を提出、越境外蒙兵の即日撤退を要求した。

五月十五日　不法越境の外蒙軍との間に、展戰鬪を惹起したのみでなく、敵は撤退すべくもないので、玆に日滿共同防衛の建前から、皇軍の一隊は出動、滿洲國軍と連絡を保ち、ノモンハン附近を偵察中、不法にも攻撃を加へて來たので、忽ちこれを反撃、國境線外に走らせた。

五月十八日　午前外蒙の飛行機一機が、滿洲國領ハンダガヤ附近に越境、午後には外蒙騎兵

約百三十騎がアルシヤン方面の國境に侵入した外、一方ノモンハン正面には、自動貨車、戰車等兵力を增强し、ハルハ河對岸には、蒙古包の構築も增加し、挑戰準備をいよ〳〵露骨にして來た。

五月十九日　ノモンハン附近の空に越境して來たソ聯機に對し、我が荒鷲は襲ひかゝり、忽ち其の一機を擊墜した。

五月二十日　外蒙兵約六十が、午後一時頃ノロ高地に越境したのを、これに反擊を加へて擊退したが、更に午後七時頃には、敵の輕爆擊機が、ノモンハン方面の上空に現はれたので、滿洲國々境監視隊は、これを地上より射擊して其の一機を擊墜した。

五月二十一日　此の日午後三時五十分頃、砲二門、戰車六を有する約三百の敵が、ノモンハン西南方、バルシヤガル前方高地に越境侵入して來たのに對し、滿洲國軍はこれに反擊を開始した。

更に午後七時飛來した敵機を、ノモンハン南方二十粁の地點で、其の一機を擊墜した。

五月二十二日　此の日の未明、前日越境した優勢の敵を、滿洲國軍が奮戰の後これを擊退したが、午後一時頃、我が方の〇機編隊の戰鬪機が、ノモンハン西北方に於て、敵のE十五型三

機、E十六型戰鬪機八機よりなる敵編隊群と遭遇、猛烈な空中戰を演じ、其の三機を擊墜、殘餘機を國境線外に敗走せしめた。

五月二十四日　外蒙兵約四百が、加農砲二門と共に、午前八時頃バルシヤガル附近に越境したのを滿洲國軍が交戰二時間餘で擊退した。

五月二十五日　午前二時頃、外蒙兵約三百が、バルシヤガル附近に夜襲を企てゝ來たので、滿洲國軍は直ちに應戰、これを國境線外に驅逐した。

五月二十六日　外蒙、ソ軍聯の不法越境は、日と共に其の數を增し、挑戰的惡質となつたので、國軍に協力する皇軍は、これを擊破するため、いよ〳〵行動を開始したのだつた。

此の日午後五時頃、ボイル湖東方より越境して來た二十一機の敵飛行機を發見した我が齋藤曹長は、單身愛機を操縱して、その大編隊敵機群の中に突入、猛烈な空中戰を演じ、忽ち其の二機を擊墜したので、氣を呑まれた殘餘の敵機は、忽ち潰走した。

更に午後九時頃には、ノモンハン西北方から、三機越境して來たが、我が鈴木中尉に邀擊され、一機は餌食となり、一機は機首を廻らして遁走した。

五月二十七日　午後七時を過ぐる頃、敵大型機四機小型一機の編隊を以て、ノモンハンの北

北西四十粁のシリロオボ附近から越境侵入、他の一隊約十機が、ホルステン河上空から越境挑戰して來たので、我が荒鷲數機は直ちにこれに襲ひかゝり、ホルステン河上空に於て、約十餘分猛烈の空中戰を演じ、敵E十六型九機を擊墜、他を國境線の彼方に潰走せしめた。

本格的ノモンハン事件勃發　二十六日より行動を開始し、ホロンバイル草原に、堂々の軍を進めた日滿軍は、勇躍現地に到着、直ちに飛行部隊支援の下に、ソ聯自動車化歩兵約一千、外蒙騎兵約一千、戰車、裝甲自動車及び、十五榴砲を加へて砲十門を以て越境の優勢の敵に對し、我が山形、東の兩部隊は、滿軍と呼應し、皇軍はバルシヤガル高地より、滿軍はホルステン河南岸地區より、二十八日午後二時三十分を期し、これに猛攻を加へ、殲滅的打擊を與ふるべく行動を開始した。一方我が荒鷲は、午前九時頃〇機編隊を以て、地上敵部隊支援の目的の下に、越境した敵機を悉く擊墜、十時十分再び二十機編隊で襲來した敵機を、見る間に七機を屠り、殘餘機を驅逐したが、間もなく七十餘機の一大編隊を以て殺到した敵機群に對し、我が少數の荒鷲は、これに猛然襲ひかゝり、ホロンバイル草原上空にて、壯烈極まる空中戰を展開、その三十機を擊墜したが、此の日一日のみで敵機擊墜數實に四十二機といふ驚くべき戰果を擧げたのだつた。

地上部隊は、山形部隊の主力はバルシヤガル高地の敵を、側面より衝くべく、同高地側面に迫り、皇軍の一部と日滿協同軍の部隊は、同高地の正面から向ひ、更に他の一隊は、ノロ高地に向つて、包圍態勢を以て總攻擊を開始したのだつた。

一方東部隊は、前面の敵を擊滅して、ハルハ河渡河點の敵退路を遮斷して、敵增援部隊を喰ひ止むべき任務を以て、前面の敵に對峙、激鬪を展開し忽ち敵二百を屠つた。一方ノロ高地に向つた一隊の攻擊猛烈を極め、忽ち其の一角に駈け上り、斬る、突く、毆るの亂鬪を演じ、遂にこれを占領した。

其の敵は、雪崩を打つて敗走したが、退路を遮斷され、止むなくホルステン河を渡り、山形部隊と日滿協同部隊が對峙してゐた敵主力に合流したので、戰ひは愈々熾烈を極め、ハルハ對岸の敵砲兵陣地から浴せる砲彈は、間斷なく落下炸烈する。ソ聯が誇る戰車からは、戰車砲彈、機銃彈を亂射する。正に草原の空は彈道と彈幕だ。灼熱した砲彈の破片は飛び散り、爆煙は空を覆ひ地を這ひ、砂塵は起つて煙となり、雄叫び、叫喚、怒號、一瞬にして草原は一大修羅場と化し、我が勇士喊聲をあげて突つ込めば、敵は奇聲をあげて退却する。退却したかと思へば、新手を加へて逆襲する。敵の戰車に向つては、日滿軍の勇士が、トラックに〇〇砲を載せて迫

り、これを片ツ端から破摧攔坐せしめ、遂に優勢の敵を走らせ、感激の萬歳を叫んだ。

然るに此の敗敵ソ聯兵一千は、渡河點に敗走、東部隊の對峙する敵と合流したために、東部隊は前後左右に優勢の敵を受け、敵砲彈、戰車砲彈を頭上に擊ち込まれ、苦戰から苦戰に陷り、「彈藥缺乏。」。「やられたツ仇を賴む。」「しつかりしろツ。」爆煙の中から叫ぶ聲は、一一として悲痛ならざるものはなかつた。

「東部隊危し、彈藥缺乏、これを補給せよ。」急を聞いて、綠川部隊支隊は、山縣部隊の湯屋少尉以下七名を以て、自動貨車一輛に彈藥を滿載、これが補給を命ぜられたが、敵中突破の彈藥補給だ。忽ち敵戰車群と、有力なる敵騎兵に發見され、奮戰力鬪重大任務の達成に死力を盡したが、次々に敵彈に倒れ、止むなく涙をのんで彈藥を車輛に滿載しながら、遂に東部隊への彈藥補給も中絶したのだつた。

激戰連續のうちに、草原の夜は明けて二十九日の未明、東部隊の腹背の敵は、再び戰車を先頭に、寡兵と侮り一氣に蹂躙すべく迫つた。此の時軍刀の鞘を拂つた東部隊長は、「續けッ。」と叫んで、既に十米にまで迫つた敵に突擊した。生き殘る部下も亦これに續いた。嵐の如き肉彈突擊だ。群る敵中に躍り入つて、斬りまくつてゐた部隊長が、「敵を擊滅……。」と叫んだ瞬

間、敵の一彈は部隊長の右胸部を貫通した。部隊長が倒れたのを見て、部下が駈け寄つた時、部隊長は、

「天皇陛下萬歳。」と、幽かに叫んで壯烈の戰死を遂げた。

部隊長戰死と知つた部下は、男泣きに泣きつゝ、「部隊長殿の弔ひ合戰。」と叫び交し戰つた。此の時右上肘に貫通銃創を受けてゐた、同部隊配屬の池田軍醫中尉は、下半身を朱に染めながら、松口軍醫と共に、部隊長の死骸を守り、敵に一指だに染めさせなかつた悲壯な忠誠には、後に傳へ聞く者一人として泣かないものはなかつた。

また河野大尉は、敵の戰車、裝甲車が、飽まで我方を惱ますのを見て、「敵の裝甲車が何だ。」と叫び、これに肉迫、あわてゝ逃ぐる敵を拳銃を以て斃した瞬間、これまた敵彈のために殪れ、一方青山大尉は、敵の中に飛び込み、斬りまくり、「おい、此の斬れ味を見ろ。」と言ひながら、部下を顧みた時、敵が投げた手榴彈を全身に浴び、「殘念ッ。」の一語を遺して倒れた。

それと見た十四五名の敵は、大尉の側に群り集つた。「畜生、何をしやがるッ。」と叫びざま躍りかゝつた三輪伍長が、忽ちバタ〳〵四五名を斬り倒すと、殘餘の敵は驚いて散開した。

彼は大尉を收容して、手當を施し名を呼んだが、遂に大尉は應へなかつた。

また曩に、東部隊に彈藥補給の任についた湯屋少尉は、其の任務遂行途上敵彈のため重傷を負ひ、友軍の救護自動車に收容されたが、再び起つ能はざるを知つて、車上で天晴れ自決をして果てたのだつた。

この東部隊の急を知つた同部隊の一部と、山形部隊の一部とが、旭日天に昇る頃、空軍掩護の下に救援に到着、部隊長はじめ多くの上官とを失つた、生き殘りの勇士を激勵、弔ひ合戰を展開して、敵に殲滅的打擊を與へた。この總攻擊によつて優勢の敵をハルハ河の渡河點東南方高地に壓迫したが、敵は其處を據點として、尙ほ蠢動を續ける形勢にあつたので、三十日の夜、これに一大夜襲を敢行して、一擧に屠るべく、全軍此處に殺到、激戰數刻の後敵を擊退、翌三十一日曉かけて猛烈なる追擊戰に移つた。敵は算を亂して敗走、渡河點に押し合ひへし合ひ、崩雪れ込み、先を爭ふてハルハ河を渡り、國境線外に遁走したのだつた。

一方我が空軍部隊は、早朝大擧して、我が方を惱ました、ハルハ河對岸の敵砲兵陣地に、果敢な爆擊を敢行して、これを破摧沈默せしめた。

斯くて此の戰鬪に參加した、我が山形部隊、東部隊も、此の日集結を終つたが、我が方の戰死者は部隊長以下十一名、下士官兵百十四名。敵に與へた損害は、遺棄死體四百五十、戰車及

び裝甲自動車二十一、鹵獲せる重機關銃四、輕機關銃八、其の他小銃彈藥、通信器材等多數であつた。

これが第一次ノモンハン事件の全貌であるが、一時修羅の巷と化した草原も、敵の遺棄死體、擊墜大破或は炎上せしめられた敵機の殘骸、破摧された敵戰車の醜さこそあれ、再び平和に還り綠の草も色とり〴〵の花も、ほつと息ついたかに見えたのだつた。

第二次ノモンハン事件に進展　ソ聯が傀儡外蒙を唆かしての、奇怪極る計畫は、日滿軍の反擊によつて叩き潰され、慘敗の苦杯を舐め、ハルハ河以南に總崩れとなつて引き退つたが、それがためソ聯、外蒙共に國內の民心は尠からず動搖した。彼等は此の不始末をひた隱しにしようと努めたが、事實の前には如何ともする事が出來なかつた。

それに反し、日滿軍は不法越境の敵を、國境線外に驅逐し、所期の目的を達したので、一部の警備を殘し、國境附近から撤退したのだつた。然るに敵は此の第一次ノモンハン事件の敗戰の名譽回復を企圖したものか、國境方面に兵力を增强し、我が方の警備の手薄を見て、再び不法越境をなし、益々挑戰的態度を示し、所謂第二次ノモンハン事件惹起の因を重ね、ホロンバイル草原は、再び風雲急を告ぐるに至つたのである。

六月十五日　再び性懲りもなく不法越境した外蒙ソ聯軍は、滿洲國領内の將軍廟及びノムトソーリン附近にまで進出、滿軍の警備隊に向つて戰を挑んだ。

六月十六日　敵はハルハ廟を占領、更に同日戰車五十、砲十數門を有する凡そ一千の兵力を以て、チヤガンオボ附近の滿洲國軍部隊に砲擊を加へたが、此の方面では、九日以來戰鬪を繰返してゐたのだつた。

六月十七日　午前六時頃、ソ聯機十數機は、ハロンアルシヤン方面に越境、盲爆を敢てし、一方アムクロ上空にも飛來したが、其の敵機には、不法にも日の丸の標識を附したものさへあつた。

六月十八日　午前六時頃、敵のE十六型戰鬪機約十六機が、甘珠爾廟、アムクロ附近上空に現はれ、機上掃射、或ひは燒夷彈を投下した。

六月十九日　敵機十二機の編隊群は、午後一時三十分ハルハ廟を空襲、更に四時、五時の二回に亙り、十數の敵機が、チヤガンウルオボに於て、滿軍を空襲し、軍馬等に損害を與へ、一方越境の地上部隊戰車、裝甲自動車等の約一千は、ツアガンオボの滿軍を夜襲したが、滿軍はこれを擊退、敵はボルンデルス附近に退却、滿軍と對峙して何事かを劃策中だつた。

六月二十日　此の日また午前十時頃、ボルンデルス附近で、外蒙ソ聯軍は裝甲自動車十臺を以て、我が斥候隊に不法射擊を加へ、それを包圍したので、我が方は敢然これに應戰、肉彈突擊を以て、彈藥滿載の敵トラック一臺を鹵獲した。

六月二十一日　戰車二十臺、兵力約三百の敵は、午後九時頃再びツアガンオボを夜襲して來たが、我が方の猛反擊一時間の後、算を亂してボルンデルス方面へ退却した。これと時を同うして、九機の敵機が、甘珠爾廟（國境より滿洲國領内へ四十粁）附近に越境盲爆したが、我方には何等損害はなかつた。

六月二十二日　敵のE十五型、同十六型戰鬪機合して六十機を以て、午後四時十五分、同じく百機の大編隊を以て午後五時二十分の二回に亙り、甘珠爾廟上空に越境した。我が方は僅かに十六機の少數機を以て、此の大編隊群を邀擊、壯烈の空中戰を演じ、忽ち其の五十六機を擊墜したが、草原にはそれ等の敵機の殘骸が、彼處に此處に散亂し、或ひは炎上、或ひは破壞して、わが空軍の精悍さと、敵空軍の脆弱さとを、遺憾なく此處に描き分け立證したのだつた。

此の日の空中戰で、我が方の損害は、森本大尉機外三機であつたが、第一次事件で、其の剛膽を謳はれた齋藤曹長は、單機を以て十數機に圍まれ、一方に體當りを以て血路を開き、忽ち

六機を撃墜、不時着してゐた敵三機を撃破し、鈴木中尉は盲貫銃創を負ひながら、敵八機を撃墜するなど、この日の我が荒鷲の奮戰こそは、實に目覺しいものがあつた。

六月二十三日　前日に於て、こつぴどく叩きのめされたにも拘らず、性懲りもなく、敵三機がボイル湖上空に現はれたので、我方は直ちにこれを邀へ撃ち、一機を撃墜、二機を遁走せしめたが、これは偵察のために越境したものだつた。

六月二十四日　此の日の拂曉、新將軍廟附近に外蒙ソ軍機が越境、猛烈な爆撃を加へ、廟を破壞した外、一時性ではあつたが、毒ガスを發射する等の非人道的暴虐をさへ敢てしたのだつた。

それと同時に、戰車五十、砲十數門を有する敵の大部隊は、將軍廟を攻撃したが、日滿軍は直ちにこれを撃退した。然るに午後に至り、再び敵は砲、騎、戰車を以て逆襲を企てゝ來た、其の兵力三百、一時我が方も苦戰に陷つたが、滿洲國軍騎兵の迂囘側面攻撃が效を奏し、敵は混亂して退却した。此の戰鬪約一時間、我が方の損害は輕微だつたが、敵の戰車十臺を鹵獲したのを見ても、敵の損害は推して知るべきである。

一方敵空軍は、六十機の大編隊を以て、午前八時三十分頃、ハルハ河畔上空に現はれたが、

我が荒鷲に邀撃され、忽ち十二機を失ひ、殘餘はタムスク方面に遁走した。

またボイル湖上空を哨戒中の我が機は、午後七時頃、敵E十六型戰鬪機十四機を發見したので、これに猛攻を加へ、うち三機を叩き落したので、他は機首を廻らして潰走した。

六月二十五日　此の日も數十機の敵機が越境して來たが、我が荒鷲の反撃に遭ひ、一堪りもなく敗走した。

斯く敵の空陸相踵いでの不法越境に憤激した滿洲國政府は、二十四日の午後九時聲明を發表して、其の確固たる決意を表明、全國民の覺悟を促したのだつた。

一方ソ聯は、此の相つぐ敗戰、而も世界に誇つてゐた空軍の慘敗については、各新聞とも一言半句もこれを傳へず、政府當局もひた隱しにして、國内的にも、對外的にも、頰冠り主義をとつてゐたが、二十五日はじめてタス通信社を通じて、長文のコンミュニケを發表したが、それによると、事件發生の責任を日滿側に轉嫁して、己の口を拭ひ、日滿側の損害を誇大に宣傳するなど、所謂ソ聯式惡辣振りを發揮したのだつた。

六月二十六日　午後五時頃、ボイル湖畔ツアンガンオボ上空に、敵機四十機が現はれたのを、甘珠爾廟南方二十粁の上空を哨戒中だつた我が三機が認めたので、忽ちこれに襲ひかゝ

り、三十分間餘激烈なる空中戰を演じ、其の十六機を擊墜した。

此の日モスクワのクレムリン宮に於ては、スターリン司令の下に、東方情勢に關し、重大協議を遂げ、對日强硬を主張したことを外電は傳へたが、如何にもソ聯らしい空威張りと血迷ひ振りといふべきである。

六月二十七日　敵E十五型、同十六型戰鬪機約二百の大編隊群は、曉かけてボイル湖方面から越境襲來したので、我が方はこれを邀擊約三十分間一大空中戰を交へ、敵機十九機（不確實のもの六機）を擊墜した。

更に敵空軍基地、タムスク、マダツトのソ聯空軍が、大擧來襲の企圖を探知した我が方は、隱忍自重を棄て、此處に斷乎自衛權を發動、外蒙ソ聯空軍の根據地を空襲擊滅すべく、我が精鋭機は爆擊行を敢行、敵機約三十機を爆破炎上せしめ、敵空軍根據地を徹底的に潰滅したが、此の爆擊行で、我が方の損害は歸還せざるもの三機だつた。

六月二十八日　歩、騎、機械化部隊混成の約一千の外蒙ソ聯軍は、此の早曉から、ハルハ河左岸ノロ高地から、バルシヤガル高地附近に越境して附近に配備し、挑戰準備に狂奔し、隙を狙つては、我が方の警備隊を襲ふのだつた。

六月二十九日　野砲、山砲數門を有する敵の歩、騎約一千は、戰車約二十臺の掩護の下に、ノムトソーリン東南方約十五粁の地點に越境して來たので、我が方も亦山砲、機關銃を出動せしめ、これに反擊を加へ、敵に多大の損害を與へて擊退した。

六月三十日　以上第一次ノモンハン事件以來、性懲りもなく外蒙ソ聯軍は、空陸から不法越境を繰返し、挑戰的態度を改めず、漸次其の數を增し、殊に二十日以來は、特に活潑となり、ハルハ河對岸臺地には、多數の增援部隊が陸續と到着したらしく、多くの戰車、裝甲自動車をはじめ、駱駝、馬匹なども無數に集結してゐた。不法越境した敵は、特にバルシヤガル高地及びノロ高地に塹壕を構築し、附近一帶にも堅固の陣地を構築、二百粁の戰線に亙つて四千の大軍を配備し、ハルハ河對岸には、無數の砲兵陣地を構築するなど、積極的攻勢態度を示して來たのだつた。

外蒙ソ軍は、第一次ノモンハン事件に於て、慘敗した結果、國内の信望さへも失ひ、殊に外蒙國内民心の動搖は甚だしく、「强化された外蒙軍を以てすれば、日滿軍何程の事やあらん。」と、煽動されてゐた外蒙民衆が、其の眼の前に、外蒙軍のみか、常に世界に豪語誇示するソ聯の空軍が徹底的に叩きのめされ、地上部隊も亦到底日滿軍の敵でない事を見せつけられ、反ソ

思想に輪をかけ、油を注いだ事も決して不思議ではなかつた。其の證左として、各地に反革命分子が擡頭蜂起して、叛亂勃發の兆があつた。現にタムスク西南方アルハンガヤ、アイマークノワセラリツク附近に於て、約一千の反革命分子が反亂を起し、同地の黨、政府機關を襲擊したなども、其の片鱗と視るべきである。

斯うした國内民心の動搖を防ぐ上にも、彼等は敗勢を挽回しなければならぬといふ破目に陷り、苦惱にあがいた事は言ふ迄もなかつた。

此の度重なる不法越境侵犯行爲にも、尙ほ隱忍自重してゐた我が關東軍は、堪忍袋の緒を切り、蹶然起つてこれを膺懲すべく決意し、玆に再びホロンバイル大草原に、正義の一大進軍を開始したのだつた。

併して七月三日、我が關東軍司令部からは、次の如き聲明が發表された。

軍は南部ホロンバイルに於ける暗雲を一掃せんが爲め、六月上旬以來、ハルハ河地區に於て越境、積極的行動を反覆し、われを窺窺跳梁せる外蒙軍に對し、これを擊滅すべく、七月二日以來滿洲國軍と協力して、攻擊を開始せり。

更に關東軍司令部加藤報道班長談として、次の如く發表された。

去る五月下旬、軍は滿洲國軍と共同して、ノモンハン附近に於て、越境した外蒙ソ軍を擊破し、一先づこれが膺懲の目的を達したので、國境附近より撤退した。然るに外蒙ソ軍は、驕慢にもこれを自己の勝利となし、軍が撤退するや、再度越境蠢動を開始した。軍は隱忍これを監視してゐたが、彼の驕慢は增長し、漸次國境内深く不法行動を敢てするに至つた。六月十七日以來外蒙ソ軍の飛行機が、滿洲國領内の各所に越境飛來し、わが航空隊が之に對し、大打擊を與へたことは、時々しば〳〵報ぜられたところであるが、地上に於ても、外蒙ソ軍はわが國境警備の部隊に對し、積極的戰鬪行動を繼續してゐた。卽ち外蒙ソ軍はハルハ河右岸地區に逐次兵力を增加して、ノモンハンを占領したのであるが、六月十五日將軍廟及びノモトソーリン地區に進出して滿洲國軍の警備隊と交戰して以來は、其の行動が漸次積極化して六月十六日に至りては、ハルハ廟を占領、更に同日戰車五十、砲十數門を有する凡そ一千の兵力を以て、チヤガンオボ附近の滿洲國軍部隊に向ひ砲擊した。チヤガンオボ附近に於ては、九日から二十一日に亙り戰鬪を惹起し、滿洲國ステンデルス附近に退避して、滿洲國軍と對峙するに至つた。ノモンハン方面に於ては、兵力を引續き增加し、多數の戰車火砲を加へ、全線に亙り陣地を構築してゐるが、二十四日早朝外蒙ソ軍は約五十臺の戰車を以て、將

軍廟に向つて攻撃し來り、日滿軍の反撃に遭ひ、戰車九臺を破壞せられ、更に二十九日再びノモトソーリン近く攻撃し來つた。以上の如く、ハルハ地區各方面に於ける外蒙ソ軍の積極的不法行動は、日滿協同防衛の本義に基く軍の、默視し能はざるは論なき所で、軍今次の攻撃は、これ等跳梁せる敵に對し、これを覆滅して、この執拗な挑戰行動を根絶せしめ、以て速かに國境の平和を招來せんことを期したものである。

再び大草原に捲き起つた一大戰風

時は眞夏だ。ホロンバイル大草原には、强烈な陽の光が火の如く、燦々と降り輝いてゐた。强靱な草も、ぐつたりと萎へてゐた。其の中を綴つた黄色の蒲公英も、紫のねぢあやめをはじめ、名も知れぬ花といふ花が、悉く首垂れてゐた。しかも草原を撫でゝ來る風は、火の室から吹くかのやうに熱してゐた。踏めばさら〳〵と崩れる砂は、焔烙で炒つたやうに灼けてゐた。頭上からはかん〳〵照りつける。地上からは照り返す大陸のこと故、身を寄せる木蔭があつて、太陽の直射から避けることが出來れば、さのみ暑さも感じないのだが、廣茫千里、遮るに一木とてもない大砂漠の暑さは、さながらに苦熱そのものであつた。

此處に大進軍を開始した我が精鋭部隊は、志氣益々昂り、鬪魂いよ〳〵奮ひ起つた。

七月一日には、國境守備の日滿軍は、月光淡く照るホロンバイルの草原に進撃を開始、大草原東北西の三方から、三十餘キロの强行軍を續け、深更には外蒙ソ軍の第一線陣地正面に達したが、東方から進撃した奇襲部隊は、折柄沛然と降りしきる草原の驟雨を衝いて、ハルハ河畔に沿ひ、バルシヤガル高地の敵陣地の左側に迂回、同高地西側のソ軍陣地に肉迫した。

更にまた、將軍廟前面から進撃した日滿鐵騎部隊は、バルシヤガル及びノロ高地の敵陣地に向ひ、玆に殲滅戰の火蓋を切つた。時正に午前三時四十分、我が〇〇砲は忽ち放列を布き、正確の照準を定め、轟然火を吐けば、それを合圖に、稜線の蔭、砂丘の彼方に築かれた數十の敵陣地に對し、我が酒井、山形、濱田、岡本、吉丸、須見、玉田、國崎の各部隊は、恰かも突風の如く突擊、ノモンハンの敵を忽ち擊破して、更に猛進を續行、敵の堅陣バルシヤガルに向つて殺到した。

敵は我が奇襲に周章狼狽、早くも色めき渡つた。一方左右兩翼から、背後に迂回した奇襲部隊は、刻々に敵陣に肉迫したが、敵はそれとも知らず、バルシヤガルの前面に、其の全火力と優勢の機甲部隊とを移動した。

此の時、友軍の迂回作戰の機を窺つてゐた中央突破の精鋭軍は、漸次外蒙ソ軍を壓迫した。

斯くて激戰のうちに明けて三日となつた。

此の日早朝を期し我が全線に亙り、總攻擊の命は下つた。既に敵に殲滅的打擊を與へ、一陣を屠り二陣三陣を突破した我が將兵の志氣は益々揮ひ、其の意氣は天を衝き、曾ては第一次ノモンハン事件以來、此の草原に明け暮れ戰ひ、敵彈に倒れた幾多の戰友を偲び、其の無念を承け繼ぎ、天人共に宥さゞる不法に、憤激の血を沸き立たせ、全軍人間彈丸となり、全線相呼應して敵に殺到したのだつた。

敵は我が猛攻によつて、漸次ハルハ河畔に壓迫され、狼狽其の極に達し、陣容を整へ、敗勢を挽回すべく、午前十時頃に至り、俄に戰車百數十臺を以て反擊を加へて來た。其の戰車砲彈、機銃彈は物凄く、正に彈道を作り、彈幕をひろげ、敵砲彈の爆煙は、彈道を潛り、彈幕を分けて進む、我が將兵を覆ひ、銃彈はだばしる霰の如く、砂を掘り草を薙ぎ、殆んど面を上げる隙だにもないほどだつた。

それと見た、我が砲兵陣地からは、一齊に此の敵戰車に向つて必中彈を浴せた。砲口火を吐くよと見る間に、敵戰車群の中に砂煙があがる。つゞいて黑煙があがる。破摧された敵戰車の破片が天空に舞ひ敵兵が飛ぶ。炎々たる焰をあげて燃えさかる。燃えながら草原を狂ひ廻る狀

までもが、硝煙の彼方に、手にとる如く見えるのだつた。

更に我が荒鷲は、これまた敵戰車群に對して、的確の爆彈を叩きつける。忽ち二十數臺の戰車は煙に包まれてしまつた。此の强襲に怖れた殘餘の戰車は、踊りながら潰走したが、再び十一時頃には、三十數臺の敵戰車が、死物狂ひとなり、鐵鋼鈑を唸らせて迫つて來た。

我が砲兵陣からは、再び砲口に火を吐かせたが、敵は大膽にも、我が砲兵陣地を蹂躙する企圖だつたか、陣地から眞下に見られる地點にまで迫つた。我が巨彈は、一臺、一臺と片ツ端から擱坐させた。併し殘餘の戰車は尙も迫つて來た。「畜生、やるぞ」と、待ち構へてゐた我が○○砲は、俄然一齊に火蓋を切つた。其の距離僅かに二百米、敵も戰車砲彈の猛射を以て、我が○○砲彈下を冒して近迫する。それを次々に擱坐させたが、殘る六臺の戰車は、我が砲彈の爆煙の中を、蕩らに進んで來た。「よし、零距離射擊だ。」と、忽ちこれに零距離の猛射を加へ、遂に三十數臺の敵戰車を、悉く全滅せしめたのだつた。

斯くして、三日開始された我が總攻擊は、到る處敵を擊破、漸次敵を壓迫追擊に移つたが、整備せる機甲を悖み、且つそれを誇る敵は、頑强に抵抗して、退却したかと思へば、新手の兵力を加へて逆襲また逆襲、反擊また反擊を加へたので、我が損害も亦尠からずあつたが、敵の

それに比すれば、實に僅かなものである。尚ほ此の日戰場上空で、我が荒鷲はSB爆擊機及びE十六型、エル・ゼツト等合計七機を擊墜した。

激戰に暮れ、激闘に明くれば四日、此の日も追擊戰は續けられたが、ホルステン河とハルハ河の合流の三角地點に、集結中の敗走の敵機械化部隊を發見したので、我が方は空陸相呼應して猛爆猛攻を加へ、敵戰車、裝甲自動車、トラツク等合計四百臺を鹵獲した。また我空軍は、戰場上空に於て、多數の敵機と渡り合ひ、SB爆擊機、E十六戰闘機合して五十三機を擊墜した。

併して此の日、外蒙ソ軍協同烏合の敵四千は、正に我が包圍下に置かれたのだつた。

不法越境の敵を國境線外に擊退　我が第一次の總攻擊により、到る處の敵陣は、片ツ端から擊滅され、退却敗走の一途を辿るのみだつたが、後方にある慘忍苛酷の督戰隊を怖れ、死物狂ひとなつて抵抗を試みた。殊に八日の夜から翌九日にかけての反擊は實に物凄かつた。敵砲兵陣地からする十五サンチ榴砲彈は、猛烈に我が陣地に、我が進擊部隊に浴せて來た。其の猛砲擊に掩護された敵の一部は、俄かに攻勢に轉じて來たのだつた。

併しながら我が精鋭は、其の降る砲彈、其の注ぐ銃彈の中を潜り、一歩一歩肉彈の進擊血の

突擊を敢行したのだつた。

此の日我が全軍の戰況は、更に有利に進展した。即ち總攻擊以來、ノロ高地に迫つてこれを奪取、東南から敵の側背を衝く岡本部隊の精鋭、それに呼應してホルステン河北岸の精鋭、右翼は梶川、山縣、玉田、左翼は須見、吉丸の各鐵牛部隊、逆襲々々を反覆する優勢の敵を、而も蒙古特有の篠突く如き雷雨の中をひた押しに壓し、ハルハ河とホルステン河の合流點を、指呼の間に望み、北西から殘敵を包圍して、鐵牛部隊の猛攻につゞいて、歩兵部隊は肉彈また肉彈、次々と敵の據點を奪取しながら、午前中早くもハルハ河の合流點一粁の地點にまで敵を壓迫したのだつた。

斯くて此の諸部隊は、ハルハ河畔に於ける最高地を占領、萬歳の歡聲は高らかにあげられたが、此の時雷雨もからりと晴れ、戰野は蒙古の草原ながら「日本晴れ」と叫び交はし、志氣愈愈昂まり、更に鐵牛部隊を先頭に、外蒙ソ軍の敵を、一兵も餘さず擊滅すべく、一氣にハルハ河畔の三角點に向つて、最後の猛攻を加へたのだつた。

晴れた空からは、再び太陽の火の雨だ。灼熱の苦難だ。陣地から見れば、豪雨のために增水したハルハ河を隔てた、敵砲兵陣地は、我が方の巨彈と、空軍の爆擊とによつて徹底的に叩き

つけられ、俄かに陣地を構築してゐる敵の狼狽振りさへもが、手にとるやうに見えた。

この日、二日の〇〇部隊の機動以來、常に最先頭にあつて、部隊の進擊を容易ならしめ、その戰況を有利に導いてゐた川村質郎部隊長（東京府出身）は、バルシヤガル一帶の殘敵に、薄暮總攻擊を開始した際、部下精鋭を率ゐて突進、例の如く部隊の進擊を誘導中、遂に敵彈のために、壯烈の戰死を遂げたので、部下は其の亡骸に縋り、其の在りし日を偲び、泣いて復讐を誓つたのだつた。

翌十日は、未だバルシヤガル高地の一角に據り、ハルハ對岸に殘る敵砲兵陣地よりの掩護の下に、頑强に抵抗を續けつゝある殘敵に對し午前零時を期し、我が第二次總攻擊が開始され。徹底的打擊を與へ、次々に敵の堅陣を突破して、激戰四時間半、即ち午前四時半には、我が岡本部隊はハルハ河渡河點に達し、敵の退路を完全に遮斷した。慘敗の敵は、僅かに血路を開き、ハルハ河右岸に沿ひ、北方に遁走した。その敵は狙擊部隊約一千、戰車四十、裝甲自動車約百餘臺だつたが、それさへもが、我が息をもつかせぬ猛追擊により、刻々に殲滅の土壇場に追ひ込まれたのだつた。

此の日我が空軍は、敵の一大爆擊編隊と、ハルハ河上空で、壯烈な空中戰を演じ、敵六十五

機を屠り、敵空軍の蠢動に、最後のメスを下した。彼の花田准射機が、遁走する敵機に喰ひ下つて追擊するうち、後方から追尾して來た敵機のため空中銃火を浴び、其の一彈のために右大腿部に貫通銃創を受けたが、猛然其の追尾して來た敵機に襲ひかゝり、忽ちこれを叩き落したが、重傷のために精根は弱つてゆく、生命と賴むガソリンは缺乏する、一旦は自爆と決意した戰場へ離脱したも實に此の時だつたのである。

斯くて翌十一日には、我が方は有力なる砲兵の增援を得て、最後の擊滅戰を敢行、遂ひに敵を國境線外に潰走せしめ、敵砲兵陣地も亦制壓沈默せしめ、正午頃には大體に於て殘敵の掃蕩も終つたのだつた。

此の日、關東軍報導班長談として次の如く發表された。

軍は眞に發表した如く、日滿共同防衛の本義に基き、滿洲國軍と協力し、七月二日斷乎攻擊を開始したが、爾後戰況有利に進展し、本十一日遂にバルシヤガル及びノロ高地一帶の地區に蠢動してゐた外蒙ソ軍を擊攘し、目下殘敵を掃蕩中である。此の間日滿軍は炎天の下、曠漠不毛寄るに地物なく、特に至難なる戰場において、旬日に亙りよく困苦缺乏に堪へ、堅

忍持久戰捷の一途に邁進したのである。外蒙ソ軍はもとより我が精鋭なる日滿軍の敵ではない。戰鬪開始以後に於る空地兩部隊の赫々たる戰果に對しては、その都度これを發表したのであるが、第一次ノモンハン事件以來本十一日迄の空中戰鬪に於て、われに擊墜された敵機は、確實なるもの五百二十九機、不確實なるものを加算すれば、その數約五百六十機に及び、敵の機械化四個旅團に潰滅的打擊を與へ、敵戰車裝甲自動車三百を破壞炎上せしめてゐる。また敵の戰場における遺棄死體は少くも千五百、俘虜大隊長以下九十名であつて、鹵獲品中目下判明せるもの、戰車、裝甲自動車約二十輛、火砲は十五、榴彈砲二門ほか砲數十門に達してゐる。軍は今や哈爾哈河右岸滿領内に、不法侵入せる敵を擊攘したけれども、敵飛行機はなほ我が戰線内部上空に屢々飛來し、哈爾哈河對岸の砲兵また射擊を反復してゐるので、兩軍間には今後も暫くの間、小衝突を繰返すものと考へられる。しかしながら、大勢は既に決してゐるのであつて、この方面の國境は漸次平穩に歸するものと思ふ。

敵軍の外に渴と蠅軍と蚊軍の襲來

筆にものし、口にすれば、激戰、突擊、殲滅等々の文字を以て綴り、或は語るのであるが、此の灼熱の草原に、來る日も〳〵戰ひ續けた我が精鋭の勞苦は、到底筆にも、口にもあらはすことが出來ない。今思ひ出づるだに、涙なくしては綴

り得ないのである。

此處に戰ひ續けた將士たちは、熱した鐵鍋の如き鐵帽の下から、疲れも見せず、どす黑く汚れた、逞しい顏を覗かせてゐた。飲んでも喉の渴きは止らない。それでゐて飲まうにも、水がなかつた。給水は眞至難だつた。將士の水筒は悉く空だつた。戰友のため己れのため、末期の水として、僅かに水筒の底に殘しておいた水さへも舐め盡してしまつた。たゞ雷雨が降れば、雨水を天幕を敷いてうけ、それを溜めて飲み、或は水筒に入れ、又は鐵帽にうけて貪り飲むのだつた。しかし、驟雨一過の後は、またかん〳〵と照りつけるので、忽ち喉は干からび、汗は流れる、體内の汗の水源地が涸渴する。脂汗が額から流れる、とふら〳〵と眩暈がする。志氣は正に旺盛だつたが、此の水源地の涸渴には、遏がの勇士も閉口して、敵のマキシム機關銃を鹵獲して、其の水冷式の油臭い水さへも飲んだものもあつた。

いま一つ勇士を困らしたものに、蠅と蚊があつた。それは共に敵彈以上の難物だつた。事件以來此の戰野に動員された全蒙古の蠅は、敵の遺棄死體に群り集り、其の足で、我が勇士の額に、手に、飯盒に集り、殊に戰ひの閑に貪る、勇士の午睡の夢をうるさく破るのだつた。

蚊軍に至つては、更に一層の難物で、眞晝間でも、ワーン〳〵と唸つてたかつて來る、殊に

日沒から夜にかけての猛烈さは、敵のマキシム機銃の亂射彈どころではない。ワーンと顏に體當りを喰はして來るので、平手でパチツと頰を叩くと、二三十匹は死骸となつてばら〳〵落ちる。正に我が荒鷲に擊ち落される敵機其の儘だ、しかもそれが、體當りを喰はしたかと思ふと、すぐに血を吸ふのだ。殊に彼等は、常に家畜の血をのみ吸ひ馴れてゐるので、人間の頭の毛の中にまで潜り込んで血を吸ふ位の事は、實は彼等にとつては、朝飯前のことなのだ。勿論此の蚊軍の襲擊を避けるための防蚊具もあるが、いざといふ時には、そんなものを着けてゐては戰が出來ない。從つて勇士達の顏も手も、蚊に螫された痕でべた一面に腫れ上つてゐた。

更に今一つは、アミバー赤痢だつた。戰場の不衞生は今更言ふ迄もないことだが、このアミバー赤痢の蔓延には勇士達も僻易した。一人罹ると、忽ち壕內に次から次と傳染する。媒介の蠅は總動員と來てゐるので、從つて蔓延も亦迅速だつたのだ。

敵彈雨と降る中で、これに罹つた勇士達が、一日二十回三十回と、下痢を催ほし、敵陣を睨み、用を達しながら力みかへる狀は、可笑しいどころか實に氣の毒に堪へないことだつた。

第二次より第三次事件に進展　七月二日から十一日までの間に敢行された、日滿軍の猛攻によつて、不法越境の外蒙ソ軍は、バルシヤガル高地一帶から國境線外に敗走したが、なほ

殘敵は少數づゝ蟠居して、相變らず蠢動を止めなかつた。而して、此の重なる慘敗に、愈々以て外蒙の反ソ思想は濃厚となり、ソ聯離反の傾向は著しくなり、ソ聯に於ても、對內的にも對外的にも、其の儘引込みがつかなくなつたものか、また〳〵越境を企て、日を追ふに從ひ漸次其兵力を增加し、ハルハ河對岸臺地には、又もや續々と增援部隊の集結を計るなど、曩に關東軍司令部報道班長談に於て、「平穩に歸するものと思ふ。」云々と期待された事は裏切られ、日に挑戰的態勢を整へ、越境部隊は、再び我に向つて挑み、殆んど彼我の間に戰鬪の絕間がなかつた。

外蒙駐屯のソ聯軍は、第一次事件勃發と同時に、ウランバートル駐屯の第三十六師團をはじめ、サバイカル方面より兵力を國境に動員して、從來外蒙古軍第六師團の守備地區に赤軍新鋭部隊を配備し、司令官にジウコフ中將を任命して、全軍の指揮に當らしめたのだつた。

擊退、逆襲、擊退、逆襲を反復するうち、七月十六日、敵機は滿洲領內深く侵入、濱洲線の要衝富拉爾基附近を爆擊、重輕傷者多數を出さしめ、或ひはハロンアルシヤンを襲ひ、同驛附近に爆彈數個を投下して遁走、更にまた、我が野戰病院上空に現はれたソ聯のS・B爆擊機九機は、明かに標識あるにも拘らず、これに爆擊を加へるなどの暴擧を敢てしたのだつた。

十九日我が政府は、五相會議を開き、「此の問題は、乾岔子島及び張鼓峰事件と同樣、近く日ソ間の外交々渉に移し、日滿協同防衛の盟約に從ひ、外蒙軍の背後にあるソ聯に對し、嚴重抗議を提出すると共に、事件は局地解決、事態不擴大の方針を堅持して對處すべし」と申し合せたのであるが、これがソ聯に傳はると、「日本は事件を戰爭にまで擴大する意志はない、それは支那事變で手一ぱいだからである。」と見縊つたか、俄かにまた消耗作戰に出で兵力を增强して、堂々不法越境の部隊を送り、我に挑戰して來たので、我が日滿協同軍は、玆にまた二十三日から、殲滅的攻擊を開始したが、敵は忽ち崩れ立ち、この日の午後から退却を始め、渡河點に殺到して、先を爭つて敗退する、其の敵を狙つて、我が方は砲彈の雨を降らせたので、あわてふためいた敵は、退路を失ひ滿洲國領内を右往左往に逃げ廻つた。我が酒井、長野、井置、山形、須見の各部隊が、一齊に進擊し、一部は早くもハルハ河に殺到、逃げ廻る敵部隊を各所に捕捉殲滅せしめ、同時にわが砲兵陣地は一部を前進せしめてハルハ河畔に迫り、其の猛攻は、敵砲兵陣地を制壓し、一方我が荒鷲も亦、敵機を襲つて擊墜せしめ、これと相呼應して、地上部隊も亦、逃げ惑ふ敵に徹底的打擊を與へたが、死物狂ひの敵の反擊は相當物凄く、到る處に激戰を展開したが、翌二十四日には、空陸ともにより以上の激戰を交へ、これを敗走せしめ、完全に敵を制壓して、總攻擊の目的を達したのだつた。

翌二十五日午前八時三十分、我が空軍部隊は、ノモンハン戰場上空に於て、敵戰鬪機三十九機と遭遇、更に午後十二時三十分四十機の敵と壯烈の空中戰を演じ、E十六型十七機を擊墜した。

斯く戰ひ、斯く擊ち、第二次ノモンハン事件は一應玆に終止符を打つたが、此の激戰で、吉丸清武、大内孜、村田茂助の各部隊長をはじめ、多くの尊い犧牲者を出したのは、返す〳〵も惜みても餘りあることであつた。

併しながら、此の草原には、戰禍未だ全く治まらず、慘敗々々、また慘敗に愈々狂燥した外蒙ソ軍は、敗勢挽回の妄夢を棄てず、七月二十六日以降も、不法越境と挑戰とを繰返し、明けても暮れても、此の草原には砲火の轟音と、硝煙の渦は絶えなかつた。而して八月に入ると、敵の越境挑戰は頓に繁くなり、兵力も漸次增加して活潑となつて來たので、我が日滿軍は、八月初旬からこの南部ホロンバイルに越境の敵に、反擊を加へ、機械化部隊を恃み、MG狙擊部隊を誇りとしてゐた優勢の敵を、我が正確無比の砲擊を掩護に、ハルハ河對岸に擊退して、再び玆にハルハ河を挾み、不氣味な對峙を續けることになつた。

ところが、中旬頃から對岸一帶の高地には、後方から增援した戰車、火砲、裝甲自動車などと共に、大軍を集結しつゝある模樣だつたので、我方は嚴重に監視してゐるうち、果せるかな二十一日、日滿軍の手薄に乘じ、バルシヤガル高地の兩側、ノロ高地の東側を迂回して越境を企圖した外蒙ソ軍は、戰車四百臺を主力として、兵力實に六千に餘る大部隊を以て行動を開始したので、我方も亦時を移さず反擊の準備を整へ、ホロンバイルの戰野は俄然緊迫し、第三次ノモンハン事件の幕は切つて落され、我が日滿軍の總攻擊となり、玆にまた一大激戰が展開され、殊に二十二、三、四日以後は、愈〻戰鬪は熾烈となり、バルシヤガル高地、ノロ高地の空は、またしても彼我砲彈の彈道下に撼ひ、彈幕に閉ざされ、凄絕、慘烈、前の日多くの戰友が、屍をさらした草原の綠は、既に褐一色に色を代へ、曾ての日敵が盲擊した砲彈炸裂のために燒かれた草は、青く芽を伸し、褐色の中に、くつきりと青い圓陣をづくつてゐた。破片は錆び、蝗が戲れてゐたが、今はまた其の褐色の草に蝕り、錆びた破片に、肉塊を叩きつける秋が來たのだ。

來る日も來る夜も、空は高く紺碧の色に澄んでゐた。其の澄む空は、明け暮れ炎上する敵戰車の黑煙と、彼我砲彈の爆煙と、打ち上げる砂煙とによつて塗り潰し、轟音と雄叫びと、叫喚

と歡聲と、勝鬨と奇聲とは、秋訪れた草原に滿ち、灼熱した砲彈の破片は、白晝目を射り、夜空に煙火と散つた。

斯くて九月十五日、停戰協定成立の日まで、こゝに戰ひつゞけ、擊ちつゞけ、勇戰奮鬪、肉彈相搏ち、肉彈散華、我が世界に誇る大和魂は、此の大草原に花と咲き、花と散つたのである。その間、

東宗治部隊長以下、軍人精神の御勅諭を誦和、天皇陛下萬歲を三唱、「東宗治本年四十九歲」と叫び、壕から躍り出した部隊長に續くは、高梨少尉以下生き殘つた部下、全員一丸となり、嵐の如き肉彈突擊を敢行、敵の重機關銃彈雨と降る中を、敵に肉迫また肉迫、遂ひに部隊長以下全員肉彈となつて枕を列べた壯烈あり……。

空軍松村部隊の至寶と謳はれた可兒大尉が、出動以來敵機擊墜數五十六の記錄を最後に、ホロンバイルの空中戰の華と散るあり……。

有力なる敵と白兵戰を演じ、自ら手榴彈を摑んで敵戰車に迫り、これを叩きつけて敵戰車二臺を屠り、遂に敵彈に殘れた藤田干也部隊長あり……。

肉彈相搏つ突擊戰に、部下を激勵して陣頭に立ち、敵に肉迫して壯烈の戰死を遂げた森田徹

部隊長あり……。

苦戰より苦戰に陷り、豫備隊を引提げ自ら手榴彈を敵に叩きつけ、更に軍刀を揮つて敵を薙ぎ倒し、敵の肝を寒からしむるうち、敵彈を受けて殪れた吉田米利部隊長あり……。

敵の包圍下にあつて、砲は半ば破壞され、全彈射ち盡し、多くの部下は失ひ、烈々惻々として人に迫る遺書を認め、砲側觀測所の掩體上に、はるか東方に向つて坐し、日本武士道の最後の途を擇んだ梅田恭三部隊長あり……。

敵が誇る火焔放射器が、彈藥集積所に迫つた時、「陛下の砲を死守するのだ。一發の砲彈たりとも、敵に渡してはならぬ。持てるだけのガソリン鑵を擔いで俺につゞけ、敵戰車上に飛び乘り、砲塔から注ぎ込み火を點けるのだ。敵戰車上で戰死をするのは、光輝あるわが鷹司部隊の榮譽であり、滅私奉公の軍人精神である。敵戰車上に散らんとするものは俺に續け。」と、橫山、河野の兩勇士以下、三十名の部下を率ゐ、各自ガソリン鑵を擔ぎ、敵彈幕を潛つて肉迫、敵戰車上に躍り上り、ガソリン鑵に孔を穿ち、砲塔から注いで火を點じ、炎々と燃え上つた敵戰車上で「日本軍人の最期を見よ。天皇陛下萬歳」と叫び、壯烈鬼神を哭かしむる自決を遂げた、近藤虎之助鬼部隊長あり……。

ノモンハン事件勃發以來、轉戰また轉戰、善戰また善戰、戰鬪正に數十回を重ね、赫々たる武勳を樹てた後、敵の重圍下に陷り、鬼神阿修羅の奮戰の後、遂に壯烈ハルハ河畔に散華した山縣武光部隊長あり……。

此の他我が勇士の、世界特獨の對戰車火器、火焔瓶を引提げて敵戰車への肉迫攻擊あり…。非戰鬪員でありながら、敵彈雨と降り注ぐ中を、或は補線に、或は架線に奮鬪し、敵戰車群の包圍を受くるや、敢然としてこれに肉迫した突擊通信隊の勇士あり……。

敵彈道下に、敵陣突破、決死的糧秣補給、或ひはまた死の銃搬送、彈藥補給の勇士あり…。優勢の敵の重圍下に陷り、部隊本部への死の傳令行あり……。

全員戰死の決死隊の壯擧あり……。

息絶えてなほ、機關銃を猛射して、敵を擊退した勇士あり……。

數へ去り、數へ來れば、忠勇義烈の我が將兵の勳功は、萬卷の書に收むるも尙ほ能はざるものがある。

それは此の草原……常には水草を求め、家畜を追ふて悠々蒙古人が包を擔いで放牧する、曠漠不毛千里の砂漠に、繰りひろげられた此の事件が、如何に激烈であり、如何に壯烈であつた

かを物語るものである。

以下こゝに出動した各部隊勇士の肉彈奮戰の狀を記しながら、七月三日の總攻擊以降の推移を、胸迫る感激を以てつゞり、其の全貌を傳へ、一億國民に共に奮起して貰ひたい。共に泣いて貰ひたい。そして此の肉彈戰に散華した將兵を、共に永久に心に記して貰ひたいのである。この靖國の神々に絶大の感謝を捧げてもらひたいのである。

捨身の精神で猛進猛攻　此日國崎部隊の、乘車先遣隊の尖兵隊長、相田重松中尉（福島縣若松市鸞養町七二出身）は、部下を激勵しながら勇躍前進するうち、「隊長殿、河であります。河が見えます。」と、一人の兵が叫んだ聲に、「何、河だ、うむ、哈爾哈河だ。哈爾哈河だ。」と、思はず聲をはづませて叫んだ。

今前方に流るゝ、砂漠の白銀の帶、それはたしかに哈爾哈河だつたのだ。この尖兵隊は、敵兵を驅逐しながら、進擊また進擊、いつしか白銀査干オボ西側高地に進出してゐた。

「あつ、戰車だ。」といふ叫び聲だ。見れば正しく敵の戰車が、一臺、また一臺と、稜線を踊り、平地を走り、尖兵隊の方に向つて驀進して來る、其の數實に三十臺……。

「全員降車……攻擊準備……。」隊長の命令一下、全員忽ち攻擊態勢を整へた。

敵の戰車砲彈は、早くも貨車の附近に落達し始め、彼處に此處に炸裂して、爆煙は濛々と渦卷き、「一歩も退くな、全員戰死の覺悟でやれ。」と叫ぶ聲が、敵砲彈の炸音の中から、とぎれとぎれに遲しく聞えてゐたが、後には連續する炸音のために徹底しなくなり、戰況は覺悟通り、全員戰死の外はないことになつた。敵戰車は、我方を蹂躪すべく漸次近迫した。

此の時、友軍左第一線の○○砲の射擊が、敵戰車を目がけて開始された。シュウツ……シュウツ……、ダーン……ダーン。

「友軍の○○砲だ……あ、射つた。」「見ろ、見ろ、燃える、敵戰車が燃える。」全員戰死の一歩前に在つた尖兵隊の勇士は、友軍の○○砲の必中彈に、一臺また一臺と、炎上擱坐してゆく敵戰車を見て、歡聲をあげるのだつた。

「わア……逃げる態つたら何だ。」と、子供のやうにはしやぐ兵士もあつた。

斯くして、彼處に三臺、此處に五臺、破摧或は擊退して進擊をつゞくるうち、敵は新に歩、騎、砲、協同の下に、五十臺の戰車を伴ひ、猛烈に逆襲して來た。見れば前方の稜線には、一面に群る敵だ。しかも敵が誇る蒙古騎兵だ。

「攻擊前進の一途あるのみ。斷じて敵を退けろ。」と、中尉は部下を激勵して、忽ちこれに猛攻

を加へた。一彈毎に魂をこめた必中彈だ。敵は機甲を悖み、衆に頼る烏合にも等しい、浮足たつたかと思ふ間に、早くも崩れはじめた。「敵は退却するぞ。いま一息だ、頑張れッ。」中尉が叫ぶ聲に追はれるやうに、逃げる逃げる、馬から落ちる、後から逃げる奴が、其の馬の腹の下にかくれる。匐ふ者、躓く者、先を爭つて潰走した。

一息吐いた時、右側方から轟音が響いて來た。突如敵戰車四臺が、側面からの不意討だ。戰車砲彈と機銃彈の集中を浴びたが、〇〇砲の射擊は停止してしまつた。

「肉迫攻擊だ。」中尉は突嗟に意を決し、自ら肉迫攻擊班を指揮して、猛然と敵戰車に迫り、忽ち其の三臺を炎上擱坐せしめたが、あわてゝ戰車から飛び出さうとする、搭乘のソ聯兵を見るが否や、中尉は敵戰車上に飛び乘り、「逃げるかッ。」と叫んだ次の瞬間、斬り倒された敵兵二人が轉げ落ちた。

殘る一臺は、暫く啞然として、射擊も忘れたのか中止してゐたが、やがて方向轉換、廻れ右の退却だ。しかし、其の後も敵は幾度となく逆襲を企てゝ來たが、其の都度悉く擊退した。

ところが夜に入ると、闇に紛れて敵戰車は迫つて來る。赤青の照明彈は、頭の上をすれ〳〵に飛ぶ。折々射つ敵の鐵甲彈は、ブス〳〵と物凄く砂漠を掘りくり返すのだつた。

「進めッ、俺につゞけ。」中尉は軍刀を翳し、敵陣前五米まで、敢然先頭に立つて突入し、前方に蠢く敵戰車に飛び乘つて擱坐に努め、敵搭乘兵を片ッ端から斬り殺した。其の剛膽さに部下一同も亦勇氣百倍、我れ劣らじとこれまた敵戰車に迫り、破壞炎上に努めた。此の肉彈攻擊に、面喰つた殘餘の敵戰車は、友軍の戰車が炎上する、其の焰の明りをたよりに、稜線の後方に敗走してしまつた。

翌四日の朝、遂に〇隊長は壯烈の戰死を遂げたので、其の後中尉は、〇隊長の代理を補佐して、勇戰奮鬪、赫々の武勳を樹てたが、激戰の連續で、疲勞は其の極に達してゐた。殊に前日の戰鬪で、中尉は右肩に負傷してゐたが、手當も施さず、部下の志氣を慮つて秘してゐたのだつた。

その日の夕刻になると、敵は新手の兵力を增し、前後から猛攻を加へて來た。敵の投げる手榴彈は、我方の陣地前に數限りなく炸裂する。其の炸光は凄絶を極めた。突擊の命は下つた。中尉は「最期だ。」と覺悟を定め、裝具を取つて砂に埋め、書類は悉く火をつけて燒いた。めら〳〵と燃ゆる焰は、悲壯の決意をあらはした、中尉の逞しい面を浮び出させた。

「隊長殿は、最期を決めて居られる。」部下は中尉の引きしまつた口許を見て呟き合つた。同時

に其の部下達も、「最後の御奉公。」と覺悟して、これまた書類を燒き、身の廻り品を整理したが「此の隊長と共に死ぬ。」と思ふと、感激の涙が、瞼を濡すのだつた。

やがて此の隊長、此の部下は、身も魂も一丸となつて、群る敵の中に突入した。其の肉彈の前には、優勢の敵も火砲もなかつた。頑强に抵抗する敵と、入り亂れての混戰を演じ、中尉は軍刀を揮つて敵を薙ぎ倒した。部下も亦突いた。蹴倒した、斬り伏せた。勿論我が方にも死傷者は續出したが、敵のそれに比ぶれば物の數ではなかつた。

「捨身だ、捨身だ。捨身の精神で往けッ。」と、部下を勵してゐた中尉の聲が、ぴたと止んだ。敵が投げた手榴彈のため、中尉は重傷を負ひ「うぬつ……。」と一聲呻つてばつたり倒れたのだつた。「あッ、隊長殿が……。」部下達は、はつと思つた。駈け寄つて手當をしたくとも、それさへ許されない戰況だつた。

「日本軍人が、大和魂を發揮するのは今だぞ。」

また中尉の聲が聞えた。しかも重傷を負ふた中尉の聲とも思はれない、力のこもつた聲だつた。部下は、「あの聲なら大丈夫だ。」と、戰ひながらも安心した。と、やがてまた、「しつかりやれッ。」と叫んだ。近くにゐた部下が、ふと振返つた時、中尉は敵の第二彈で、頭部を貫かれて、再び倒れてゐた。

「隊長殿ッ。」四五名の部下が駈け寄つた時は、既に壯烈の戰死を遂げてゐた。「隊長殿……隊長殿……。」部下達は、交るがはる呼んだが、中尉は遂に應へなかつた。「おうい、敵は隊長殿をやつたぞ」。「隊長殿の仇を討てッ。」と、涙に濡れた眦をあげて叫んだ。砲火の中にこれを聞いた他の部下は、「畜生ッ。」「野郎ッ。」と叫び、隊長の弔ひ合戰とばかり、勇戰また勇戰、遂に敵を走らせてしまつた。

「萬歲……。隊長殿、敵は退却であります。」と、今は亡き隊長の骸に縋つて報告した。その部下の誰れもが殘念がつたことは、「此の隊長と共に、此の萬歲を唱へたかつた。」といふことだつた。

戰車地雷を持つて敵戰車に滑り込む

同じくこの總攻擊の日、敵陣深く突入した、○○部隊○○隊に、戰車地雷の竿を握つて、意氣揚々と進む一人の兵があつた。それは當時初年兵の、鈴木重義一等兵（大分縣國東郡安岐町大字鹽屋出身）だつた。○隊の全員は、昨日の進軍開始から、一睡もしてゐなかつた。飯を食ふ暇もなく、乾パンを嚙りながら進んだ。

と、突如前方の稜線の蔭から現はれた快速敵戰車が、ダダダダッと機關銃彈を浴せて來た。

「それッ。」と忽ち攻撃態勢に移ると、敵戰車は俄かに遁走してしまつた。

「畜生ッ、あの戰車奴、斥候に來やがつたな、いまにきつと仲間をつれてやつて來るにちがひない。よし、來て見やがれ。」と、斯う獨りうなづいた彼は、何か心に期する所があつたものか、戰友が持つてゐる戰車地雷を、竿のまゝ取り上げてしまつた。

それから三十分と經たぬ、午後一時頃のことだつた。果せるかな左方の稜線の向ふから、キヤタピラの轟音が響いて來た。此の時二名の肉迫攻撃班の兵が躍り出した。それと見た鈴木一等兵は、「分隊長殿、鈴木も戰車をやつつけて來ます。」といふなり、戰車地雷を持つて飛び出した。

「待てッ、鈴木、お前は肉迫攻撃班ぢやないぞ、こらッ、待たんか……。」と、分隊長は叱りつけるやうに怒鳴つたが、「初年兵でも、敵の戰車ぐらゐやつつけて見せます。やつて下さい。」と言ひながら、振り返つた彼の面には滿々たる、闘志が閃めいてゐた。

「よし、やれッ。」分隊長の聲は、駈け出した彼の後から追ひかけた。

「鈴木……頑張れッ。」戰友は、彼を激勵した。そして其の眼は、敵戰車に肉迫してゆく、彼の姿に集中された。敵戰車は稜線を乘り越え、小隊の側面から一揉みとばかり驀進して來た。

先に進んだ二名が、其の戰車の側面に出ようとすると、それに氣づいた敵戰車は、機銃の滅多射をしながら、方向轉換をして逃げはじめた。

「畜生ッ、また逃げやがる。」と叫んだ鈴木一等兵は、其の戰車の退路を遮るべく、前方へ駈け拔けようとした。其の頃友軍各分隊の輕機關銃が、敵戰車の銃眼を狙つて、猛射を浴せてゐた時だつたが、危險だ……彼が進んだ位置は、友軍の機關銃彈が、耳元をヒュッ〳〵とかすめる位置だつたからだ。けれ共彼は、一向氣にも止めなかつた。遮二無二敵戰車の前へ出ようとしたが、敵戰車の方がそれより先へ逃げ去らうとする形勢だつた。「駄目だッ。」と見てゐた戰友は叫んだ。間一髪、彼は戰車の前へ出た。そして持つてゐた戰車地雷の竿を突出しながら、戰車の前に滑り込んだ。同時にパッと閃光があがつた。

ダーン……爆音は地軸を搖がした。戰友は我を忘れて萬歳を叫んだ。朦々たる爆煙の中に見事敵戰車は破摧されてゐた。鈴木一等兵はと見れば,破摧した敵戰車に程近い處に倒れてゐた。

「鈴木がッ。」と叫んで、分隊長をはじめ、戰友達が駈け寄つて聲をかけたが、それには耳も藉さず、「畜生ッ、戰車は何處へ行きやがつた……鈴木は眼が見えません……敵戰車は……。」と怒鳴りつゞけた。

彼は敵戰車を破摧した時、自身も兩眼に負傷して、失明してしまつたのだつた。

「鈴木……成功だ。大成功だ。あの音を聞け、そら、判るだらう、あれはお前がやつゝけた、敵戰車の砲彈がはじける音だ。此處にゐては危險なくらゐ景氣よく破裂してゐるぞ。朦々と煙を立てゝ燃えてゐる、敵の戰車をお前に見せてやりたい、大成功だ、大成功だ。」

口々に彼の功を讃えた。彼は兩眼から流るゝ血潮を拭はうともせず、じつと耳を澄してゐたが、やがてにつこり笑つた。それは自分が破摧した敵戰車の砲彈のはじける音を、聞きとつたからだつた。「さうか……やつゝけたのか……。」と嬉し氣に呟いた彼は、ぐつたりと戰友の腕にもたれかゝつた。

彼は兩眼の外に、顏面其の他に無數の傷と、火傷を負ふてはゐたが、意識は極めて明瞭だつた。戰友の手厚い手當を受けた上後送されたが、彼の此の勇敢な行爲は、「敵戰車怖るゝに足らず、鈴木式に一名一臺づゝやつゝけろ。」といふ、必勝の信念が、隊員の間に一層强く湧き起り、其の志氣を益々昂めたのだつた。

敵彈道下に愛國行進曲を歌つて激勵　○○部隊の甲斐萬助大尉（熊本縣新屋敷町出身）の部隊は、午後三時から九時までの間に、數十臺の敵戰車に、五回も逆襲を受け、身の置き所

さへないまで、敵彈の雨を注がれ、全員戰死の覺悟を決してゐた時、射擊指揮をしてゐた大尉は、突然彈藥箱の上に跳び上り、全身を敵に曝し、持つてゐた扇子をパツと開くと、パタ〳〵煽いで凉をとりながら、愛國行進曲を歌ひはじめ、其の間々に射擊號令を下すのだつた。

最初は呆氣にとられてゐた部下も、何時しか硬ばつた緊張から、和やかな氣持に還つた。さうなると命中率が多くなつて、忽ちのうちに十五臺の敵戰車を破壞、或は炎上せしめたが、其の度毎に、「あつはゝゝゝゝ。」と高笑ひしながら、相變らず扇子をパタ〳〵やつてゐるのだつた。

曾ては滿洲事變の際、熱河作戰に參加して、其の豪膽を鳴らした大尉だけに、兵の戰場心裡を巧みに捉へてゐたのだ。

戰ひつゞけて六日、七日は、更に凄絶極まる激戰となり、流石の豪膽大尉も、緊張した面持で、部下を叱咤激勵してゐた。この日の敵砲兵部隊と戰車は我に數倍する優勢だつた。砲兵に對する砲兵の戰ひは、優勢に對しては、これを避けるのが本來の戰法だが、大尉は敢然と戰ひしかも敵砲兵、戰車、歩兵を片ツ端から叩き潰してしまつた。

敵を完全に沈默せしめた時、大尉ははじめて扇子をパチ〳〵やりながら、「敵もなか〳〵やる

喃、あつはゝゝゝゝ。」と笑つた後、例の愛國行進曲を高らかに歌ふのだつた。

其の後二十三日の事だつた。「おい、皆、今日は總攻擊だぞ、いゝか、急襲してあのミツボサと銃眼高地を奪らう。」と、朝から勇み立つてゐた大尉は、果せるかな午前十時頃には、早くもミツボサと銃眼高地を占領した。十二時頃、銃眼高地にやつて來た大尉は、先着して準備をしてゐた香月少尉に向ひ、「ソ軍もなか〳〵やり居る喃。」と言つて、笑ひながら扇子をポケットにをさめ、香月少尉から敵の狀況を聽きはじめた。

「橋はあの方面と思ひますが、よく見えません。あの邊にも相當の敵が居るやうであります……」少尉の說明を聽きながら、眼鏡を眼にあてたまゝ、身動きだにせず、じつと敵陣を見てゐるのだつた。

「あれは敵の砲兵陣地らしいね。」九百米程の前方を見ながら言つたが、眼鏡は離さなかつた。

「よし、あいつをやつゝけよう。」といひながら、はじめて眼鏡を眼から離した。

待ち構へてゐた香月少尉は、「距離八百……方向……。」と、詳細に射擊諸元を報告した。

斯くしてゐる間にも、敵彈は絶えず無氣味な唸りを立てゝ、周圍に落下してゐたが、次第に激しくなり、遂には大切な電話線も切斷され、高地の地形もまつたく改まり、大尉も幾度か、

敵砲彈の爆發で、頭から砂を浴びたか知れなかつた。此の時大尉の射擊命令の聲が響いた。同時に一發必中の巨彈は飛んだ。數分後には、八百米前方の敵砲兵陣地が混亂に陷り、一門の砲が破壞されて散亂したかと思ふと、敵兵が逃げてゆく姿までが、手にとるやうに眼鏡に入つて來た。

「隊長殿、本部から橋梁破壞の命令がまゐりました。」通信手が大聲で報告した。默つてこつくり頷づいた大尉は、また眼鏡いを覗いた。それに映つたのは、今橋梁を雪崩を打つて逃げてゆく敵兵の姿だつた。橋を渡り終らぬうちにと思つた大尉は、直ちに攻擊命令を下した。砲は再び火を吐きはじめた。「いま少し射程をのばして……。」と、射擊指揮をしてゐた時、附近に落下炸裂した敵砲彈の破片を全身に浴びた大尉は、眼鏡を手にしたまゝ倒れた。香月少尉は、「あッ。」と叫んで駈け寄つた。

「隊長殿ッ……隊長殿……。」と呼ぶ、香月少尉の聲に、じつと眼をあけた大尉は、「橋……橋を壞せ……橋を壞せ……。」と、微かになつて行く、苦しい息の下から、最後の命令を下しつつ、壯烈の戰死を遂げた。

大尉は常に、「ホロンバイルは我等の墓場。」と、朗らかな聲で歌つてゐた。部下一同にも亦

此の信念の下に訓示を與へてゐたが、其の言葉の通り、ホロンバイル草原を墓場としたのだつた。

香月少尉をはじめ、生き殘つた部下は、大尉の遺骸を圍み、涙と共に必勝を誓つた。

太陽は高く、まだかん〳〵と照りつけてゐた。砲聲は殷々と轟き渡り、いつ果つべくもなかつたが、部下達は其の轟音の中に、「ホロンバイルは我等の墓場……。」といふ大尉の朗かな聲や、愛國行進曲の歌、はては扇子のパタ〳〵といふ音までが、どこからか聞えて來るやうに思へてならなかつた。——と、信頼しきつてゐた、彼等の豪膽隊長を交々偲ぶのだつたが、今もなほ、當時の生き殘り勇士達の胸に、耳に、大尉ははつきりと生きてゐるのだ。

鮮血に染つた藥嚢を掴んで　記錄は前に戻り、三日の總攻撃の際、國崎部隊の〇〇隊が、部隊の命を受け、白銀査干オボ附近を進撃してゐた時、突如遭遇したのは、敵戰車群だつた。

「敵の戰車であります。」けたゝましい兵の叫び聲だ。其の聲の終るか終らぬうち、我方を發見した敵戰車群からは、戰車砲彈、機關銃彈の亂射を浴せて來た。我方も忽ちこれに應戰、激戰を展開したが、敵の戰車群に較べて、餘りにも寡兵であつた我方は、全く敵砲火の雨の中に曝され、硝煙の渦に包まれてしまつた。

敵彈は所きらはず落達炸裂する。其のたびに草原にはボカン〳〵と大孔が穿たれ、機銃彈がブス〳〵と砂煙を立てる。乾き切つた砂漠に、恰かも雹が降るやうだ。我方を寡兵と侮どつた敵戰車は、速力を落して迫つて來る。狙ひは漸く正確になつて來た。「畜生ッ、やつたあ……。」「殘念だ……。」「仇を賴む……。」さういつた叫び聲が、彼處からも、此處からも聞えて來る。敵彈のために、倒るゝものが續出するのだ。それに對して、生き殘つた上官戰友は、「仇は討つぞ。」「しつかりしろ。」と叫びながら、戰車群の眞只中に突進した。

ところが、近迫するに從つて、敵戰車からは、備へつけた火焔放射機から、火焔を噴き初めた。相踵ぐ傷者の聲をしるべに、收容手當に奮闘してゐたのは、前島健次衛生一等兵だつた。手當中にも、彼の身邊には、機銃彈がブス〳〵飛んで來た。附近で敵砲彈が炸裂した。爆煙に咽び、砂煙を浴びながら、彼は傷者の手當に萬全を盡してゐたのだつた。

我方の此の肉彈突撃によつて、十數臺の敵戰車を、破壞或ひは炎上せしめた。それに怯氣ついた殘餘の敵戰車は、後退をはじめた。それと見た我方は、「それ、敵は逃げ出したぞ、一臺も餘さず叩き潰せ。」と、忽ち生き殘つた寡兵を激勵して、猛烈果敢な追撃戰に移り、遂にハルハ河を距る、僅かに三粁の地點まで敵を驅逐したのだつた。

けれども、一旦敗走した敵は、新たな三十臺の戰車を加へ、歩兵一個大隊を掩護隊として、逆襲を企てゝ來た。曩に十數臺の敵戰車を破壞して、氣負ひ立つてゐた我方は、正に勇氣百倍、これに猛攻を加へ、再び一大激戰が展開された。凄じい敵の戰車砲彈は、文字通り雹の如く飛んで來る。機銃彈は雨の如く降り注いだ。戰車砲と機銃の彈幕だ。其の中を潜つて肉迫する我が勇士は、見る見るうちに傷つき倒れたが、此の〇隊に配屬されてゐた二名の衞生兵のうち、一名は戰鬪開始と共に、右肩に貫通銃創を受けて倒れ、今は前島一等兵のみとなつてゐた。それだけ彼の負擔は倍加されたのに、死傷者は益ゝ殖えるばかりだつた。けれ共彼は、敵彈の中を西に東に駈け廻り、二十餘名の傷者を收容救出したが、傷者は後から後からと續出するので、それを救出すべく進出した折から、前方で呻吟する聲がしたので、駈け寄らうとした時、飛んで來た敵の一彈は、彼の右胸部に命中した。彼はばつたり倒れたが、ただ一人である自分の任務を忘れなかつた彼は、氣息奄々たる中にも、匐ひながら傷者の側へ進み寄つたが、極度の疲勞を感じてゐた處だつたので、多量の出血のため、精も根も盡き、鮮血に染つた藥囊を、しつかと握つたまゝ、傷者に折り重なるやうに倒れてしまつた。

死を以て上官を救ふ

これも衞生上等兵だつたが、三日の總攻擊に際し、國崎部隊の一

隊と、敵との間に於て、白銀査干オボ附近で、壯烈な戰鬪を開始した時の事だつた。戰ひは刻一刻と熾烈を極め、夕陽が地平の彼方に沈む頃になると、愈ゝ酣となつて、其の慘狀は筆舌に盡されなかつた。寡兵の我方は、苦戰から苦戰へ陷つてゐた。そこへまた、敵は新たに戰車を繰出して、一氣に蹂躙しようと企てたのだつた。しかも敵は、我が方の多くの傷者を收容してゐた凹地を目がけて、漸次迫つて來た。この時、「よしッ……。」と叫び、かねて準備していた火焰瓶を引ッ摑むと、今正に我を一躙りと迫つて來た、敵戰車に向つて、猛然肉迫したのは、片桐伍一衞生上等兵（北海道龜田郡龜田村神山村出身）だつた。

敵戰車からの集中射擊彈も、彼の氣魄には尻込みをしたものか、一つとして命中しなかつた。彼は彈丸の如く、一直線に敵戰車に肉迫した。そして、ひつさげて來た火焰瓶に全靈全魂を罩め、敵戰車に叩きつけた。と、忽ち敵戰車は火を發して、炎々と燃えあがつた。濛々たる黑煙は、四邊を覆ふた。

「萬歲……萬歲……。」の聲は、我が方の凹地から起つた。息絶え絶えの傷者までが、此の壯擧に感激して知らず歡聲をあげたのだつた。

斯くして、多くの傷者を、敵戰車の蹂躙から救つたが、其の後も轉戰毎に、彼は常に拔群の

功を樹ててゐた。

戰ひに明け、戰ひに暮れ、八月二十五日となつた。此の日七三一高地を確保した友軍は、長距離砲擁護の下に、敵歩兵約三千、戰車數十臺の一大逆襲を受けたので、これに猛烈な砲火を浴せた。

「一歩たりとも退くな。」「前進だ。」「反擊だ。」と、互ひに勵まし合ひ、優勢の敵に寡兵を以て善戰奮鬪した。

此の戰鬪のうちに、○隊長も遂に殪れ、多數の部下も、次々に倒れる、慘澹たる戰ひの中を彼は相變らず、彼處に此處に飛び廻り、死力を盡して傷者の收容に努めてゐたが、いましも一名の傷者を收容して、更に他の一名を收容すべく駈け出した途端、敵の一彈は彼の大腿部を貫通した。ばつたり倒れた彼は、「畜生ッ。」と言ひながら、むく〳〵と起き上つて、駈け出さうとしたが、ひよろ〳〵と再び倒れた。

「おい、片桐、やられたぢやないか、後退しろ、後退しろ。」と、戰友は勸めたが、彼はまた起き上つた。

「なに、何でもない。」と言ひ捨てゝ歩き出した。戰友は其の姿を見て、「おい片桐、止めろと

いふに……。」と言つて、あわてゝ彼の劍を掴んで引き留めた。

「離して呉れ、俺には俺の任務があるんだ。任務のために殪れるのは本望だ。」と笑ひながら言つて、劍を掴んだ戰友の手を振り拂つた。「でも、其の傷で……。」と、再び戰友が留めようとした時、彼は逸早く、「おい、今呻つたのは何處だ。」と叫びながら、これまでと同じやうに、自分の傷の痛みも忘れ、負傷者をもとめ、收容手當に駈け廻つてゐた。

陽は沈んでも、草原の夜はまだ晝のやうに明るかつた。けれども此のあたり一帶は、硝煙に覆はれて、あだかも夜の帷に包まれたかのやうだつた。

此の時、配備變更に努めてゐた。隊長が、「うむ……。」と呻いて倒れた。それと見て駈けつけた彼は、いきなり隊長を抱き起した。

「隊長殿、傷は淺いであります。確かりして下さい。片桐であります。」といひながら、傷ついた隊長を背負うた。

「隊長殿、斯うして指揮をとつて下さい。」と、彼は背の隊長に向いて言つた。

「忝ない。」隊長の言葉は、ただこの一語に過ぎなかつたが、背負ふた彼の頸筋には、冷たいものがぽた〳〵と落ちた。

隊長は彼の背で指揮をとつてゐたが、如何にも苦痛に堪へぬ風だつたので、

「隊長殿、お手當をいたしませう……。」と言ひながら、歩いては停り、停つては歩き、漸くいま陣地の壕に入らうとした刹那、敵の一彈は、彼の胸部を射貫いた。致命傷だが、彼は倒れなかつた。傷ついた隊長を背負ふてゐるといふ氣魄が、彼をさうさせたのだつた。彼は靜かに隊長を背からおろした。

「隊長殿、どうぞ早く壕にお這入り下さい。片桐はまたやられました。隊長殿、早く、早く、壕にお這入り下さい。」と言ひながら、隊長を助ける樣にして、壕の中に入れた。

「隊長殿、お這入りになりましたか……お這入りになりましたね……。」と、苦しい息も喘ぎ喘ぎ、壕の中を覗き、隊長が壕の中に這入つたのを見屆けると、はろか東の方を伏し拜み、

「天皇陛下……萬歳。」と、はつきり叫んで、鬼神を哭かしむる最期を遂げたのだつた。

上官のために壕を掘つて散る　また上官のために、華と散つた勇士に、岡本部隊○○中隊長の當番兵、宮本治助一等兵（島根縣那賀郡雲城村上來厚出身）があつた。

時は總攻撃の翌四日、岡本部隊が、白銀査干オボ附近を占領した時、○○中隊の陣地には、敵の巨彈が盛に落下して、壕を掘るにも危險極まりなかつた。其の上この砂漠地帶には、珍らしく土が固くて、なか〳〵捗らなかつたが、漸く一つの壕を掘り上げた宮本一等兵は、「中隊長殿、遅くなつて相濟みません。さアどうぞお這入り下さい。と、先づ隊長にすすめた。

「うむ、有り難う、宮本、お前のはどうした。」

「宮本の分は直ぐに掘ります。」

「危險だ。お前はお前の壕をなぜ掘らぬ。自分の壕を掘つてから、俺の事をやれと、あれ程言つておいたではないか。」

「中隊長殿ッ……。」と言ふなり、隊長を不意に壕の中へ突き落すやうに入れ、圓匙を擔いで、逃ぐるやうに、十米程走ると、其處でまた自分の壕を掘りはじめたのだつた。

壕の中に突き落された隊長は伸び上つて、「おうい、宮本、來いよ。お前の言ふ通りにする、二人で此の壕に這入らう。」敵彈が一層烈しく落下しはじめたので、危險だから、隊長は怒鳴つたのだつた。

「なに、直ぐであります。」宮本一等兵は、敵の巨彈が附近に落下爆發しても、他所事のやうな態度で、相變らず壕を掘りつゞけてゐた。

「危險だ、宮本、こつちへ來いといふに……。」隊長は、再び伸びあがつて呼んだが、彼は耳

にもかけず、平氣で掘りつゞけた。勿論隊長と一緒に、這入れぬ事もなかつたが、隊長は地圖をひろげたりなどするために、態々廣く掘つた位だから、其處へ自分が這入れば、隊長が指揮上不便だと思つたので、彼は隊長の言葉に從はなかつた。

と、此の時、彼の附近に落下した敵彈が、轟然と爆發した。同時に彼は圓匙を持つたまま、ばつたり倒れた。

「あツ、宮本ッ。」と叫んだ隊長が、我を忘れて壕から飛び出し、彼の側に駈け寄つた。見れば彼は破片のために、腹部に重傷を負ふてゐた。

「宮本、確かりせ、傷は淺いぞ。」と言ひながら、隊長は彼を抱き起した。隊長の聲に、失ひかけてゐた彼の意識は呼び戻された。

「中隊長殿、危い、早く、早く壕に戻つて下さい。宮本は犬死したくないのであります。」

彼は苦しい息の下から、とぎれとぎれに言つて、隊長の身を庇ふのだつた。

「宮本、有り難う、忘れんぞ。」敵彈亂れ飛ぶ中で、隊長は彼をしつかと抱いて言つたが、彼の面には、隊長の熱涙がはら〳〵と落ちた。

敵陣に突入した決死隊　三日から敢行した我が總攻擊によつて、敵を哈爾哈河畔に壓迫

したとは言へ、敵は堅牢構への陣地を作つてゐたので、退却しては逆襲、逆襲しては退却を繰返した。

越えて五日には、再び我が全線に進擊命令が發せられた。此の時我が〇〇部隊の〇隊は、敵の堅陣に對してゐたが、敵の優勢に比べては、あまりにも少數だつた。其の少數の兵力で、優勢の敵を擊破しなければならなかつたので、苦戰の連續だつた。戰へば戰ふほど、時を經ればを經るほど、戰死傷者の數を增し、それでなくとも寡少の兵力は、殘り少なになるのみだつた。

「よしッ、最後の手段だ。」と、悲壯の決意を固めたのは〇隊長だつた。それは何か、皇軍獨特の決死的肉迫攻擊を以て、敵の第一線陣地を奪取させ、それから進擊のキッカケをつくらうといふのだつた。

仍で〇隊長は、池田秀次上等兵（宮崎縣西諸縣郡野尻村出身）に、其の決死隊長を命じた。彼は教導學校出身の、勇敢な分隊長だつたので、「決死隊長、帝國軍人として、何たる光榮だ。」と、全身に脈打たせた。血を沸らせた。そして彼の持ち前の攻擊精神は彌が上にも昂まり、正に火と燃えた。

「我々は軍人として、輝かしい任務につくのだ。いゝか、全員一意ただ攻擊あるのみだぞ。」

部下を激勵すれば、部下も亦勇み立つた。

「進めッ。」彼は號令一下、眞先かけて進んだ。部下もワーッと喊聲をあげて突進した。

彼方此方に散開してゐた敵戰車は、側方から戰車砲彈、機關銃彈を集中して、此の決死隊員を屠らうと企て、敵陣地からも、機銃彈の猛射だ。あだかも夕立の如く降つて來るが、敵の射擊が烈しくなればなるほど、決死隊員の突擊精神は、反比例して昂まり、早くも敵陣寸前に迫つた。

「俺につゞけッ。」といふ、逞しい聲と共に、彼は敵陣に突入した。部下も續いて突き入つた。正に銃劍の暴風だ。突くわ、斬るわ、蹴るわの大殺陣だ。敵には泣く者もあつた。喚く者もあつた。掌を合せて生命乞ひをする者もあつた。同僚を突きのけて逃げ出す奴、僅かな此の決死隊員の突擊によつて、敵は怯氣つき、浮足立つて敗走した。それと見て友軍は、「萬歳……ウワッ。」と、喊聲をあげてドッと突入した。

「よしッ、成功……。」彼の其の一聲には、部下を劬はり、其の功を讃へる感謝の念がこもつてゐた。

部下を救ふため敵陣に突入

翌六日の戰鬪は、我が全線到る處追擊戰だつたが、〇〇部

隊の〇〇中隊長兒玉政雄中尉（宮崎縣宮崎市吉村町出身）は、部隊の最左翼として、部下と共に猛進猛攻、勇戰奮鬪をつゞけてゐたが、常に部下の身を氣遣ひ、其の戰鬪振を指導しながら進擊してゐた。

前面の敵は、重機關銃や狙擊銃で、頑強に抵抗を續け、猛射を浴せて來る。其の散彈亂れ飛ぶ中を前進また前進、部下は一人殪れ二人倒れ、或は戰死し、或は負傷してゆく。それを見るたびに、上官としての中尉は、腸を抉られる思ひだつた。

けれども、勝たねばならぬ戰ひの事だ。最後の一兵となつても、敵を屠り、敵陣を奪はなければならぬ。——然し此のまゝ前進する時は、徒らに部下を失ふのみだ。敵彈が息をつくのを待つて、突擊を敢行しよう——と考へた中尉は、部下に待機を命じた。と、此の時だつた。直前の壕の中に、敵の狙擊兵が三名、一線に散開してゐて、今まさに眼鏡付の小銃で、愛する部下を狙擊しようとしてゐた。

「危い。」ッと叫んだ中尉は、軍刀を抜き放つが否や、其の壕に躍り入り、驚きあわてる敵を三名とも、眼にも止らぬ早業で斬つてしまつた。

「おや、中隊長殿は……。」と、不思議に思つて部下が見た時は、中尉が既に敵兵三名を薙ぎ

倒した處だつた。やがて中尉は、悠々と軍刀の血糊を拭ひながら、

「實に危險なところだつたよ。彼奴等狙撃銃で、お前達をすんでの處でやつつける積りだつたんだ。」といひながら戻つて來た。――身の危險を省みず、其の部下の危難を救ふ――其の慈父の如き中隊長の溫情に、部下は手放しで泣いた。「俺は此の隊長の下に死ぬ。」部下の心は、此の一つに歸した。それだけ志氣は昂まつた。

やがて此の感激は、敵の堅陣の一を占領、更に其の勢ひで、優勢の敵主力に對し、正面攻撃に移り、敵砲彈は間斷なく落達し、炸音は耳を聾するばかり、灼熱した破片は、ヒューン〳〵と飛び散る。其の中に立つて、部下を激勵してゐる中尉の姿は、まこと鬼神の感があつた。

「やつたな。」中尉の悲痛の聲だ。が、中尉はまだ立つてゐた。敵砲彈の破片が、中尉の兩脚に喰ひ込んで、じり〳〵と肉が灼けてゐたのだ。中尉は、「畜生ッ、倒れるものか。」と頑張つてゐたのだが、遂に堪へられなくなつて、ぱつたり倒れた。

「隊長殿ッ。」二三の部下は、激戰の中にも駈け寄つて、手當を施さうとした。

「こらッ、なぜお前達は俺の方へ來るのか、俺はいゝ、敵だ敵だ。敵を射つんだ。」中尉は部下を叱るやうに言つた。部下も手の下しやうがない。といつて、見す見す重傷の隊長を其儘に

はして置かれなかつた。

「でも、隊長殿、せめては出血だけでも……。」

「まだゐたのか。今が大切な時だといふことが判らんか。いま一息で我が隊は敵陣を占領するところではないか。一兵の力も要する時だ。敵にむかへ、敵をやつゝけろ。」

「はい、隊長殿、敵をやつゝけます。」今は止むなく、重傷の隊長に心を殘しながら、部下は敵にむかつた。

中尉は、必死の力をしぼり、軍刀を杖に起ち上つた。齒はかつきりと喰ひしばつてゐた。其の面こそ蒼白に變つてゐたが、精神のみはしつかりしてゐた。鮮血は傷口から噴き出して流れ長靴を傳はり、足元の草を紅に染めた。

「突つ……突つ込め……。」部下を激勵しながら、一歩進み、二歩前へ、中尉の肉體も、精神も攻撃前進其のものだつた。「隊長をよくもやつたな。」と、心に叫び、突つ込んでゆく部下の奮戰も亦目覺しかつた。

「其の意氣だ……うむ、さうだ、そこだ。」突つ込んでゆく、部下の勇敢な姿を見て、中尉は傷の痛みも忘れて叫んだ。敵は怯んで來た。抵抗から退却へ移つて來た。

「逃げるぞ、突つ込め……さうだ、そこだ。」中尉は、自分も亦突つ込まうとしたが、ぱつたり倒れた。「馬鹿ッ、意氣地なし奴ッ。」と、己を勵まし、再び起ち上つて、よろ〳〵とよろめきながら進んだ。

間もなく、敵は一兵も殘らず退却した。中隊は完全に敵陣を占領した。

「隊長殿、占領であります。萬歳……。」重傷の中尉を圍んで、部下は感激の萬歳を叫んだ。

「うむ、よくやつて呉れた。禮をいふぞ。」中尉は感極まつてか、流るゝ涙を拳で擦つた。部下も亦聲をあげて泣いた。

敵陣占領勇士の眼涙あり

これは著者の駄句だが、正にこれだつた。優勢の敵を擊退して、敵陣を占領した時の感激、それは當の將兵でなくして、誰が味ひ知ることが出來よう……。

中尉は多量の出血のために、身動きも出來なくなつたので、長野少尉を呼び、中隊の指揮を命じ、更に部下一同の身の上のことまでも、仔細に依頼した上後送された。

「隊長殿……。」と、たゞさういつたまゝだつた。それが今後送される、隊長へ對する部下の訣別の言葉だつた。硝煙と砂埃に汚れた部下の面は、涙で洗はれてゐた。

獨特の對戰車火器で肉迫　七日の夜、我が戰野の全線に、一大夜襲の命が下つた。夜とはいへ、白夜のために明るいホロンバイルの大草原、其の中を全線の將士は進擊を開始したのだつた。

〇〇部隊の〇隊も、勇躍第一線に進出したが、午前二時三十分、圖らずも敵の砲兵陣地にぶつゝかつた。其の陣地は、我軍の猛攻に潰走した、敵の第一線の逃げ足が、餘りにも速かつたので、其處に取り殘されてゐたのだつた。

「よしッ、占めた。あの砲兵陣地は此方のものだ。」と思ひながら、白夜の空に透して見ると、其の陣地の後方には、敵の戰車が數臺ゐるのが判つた。——あの戰車をやつゝけてから、砲兵陣地を占領しよう——と考へた隊長は、永野正義軍曹（宮崎縣西諸縣郡高原町出身）を招き、同軍曹を長とする、十名の肉迫攻擊班を編成せしめた。

當時分隊長だつた永野軍曹は——「一度でもいゝ、敵の戰車に肉迫して、火焔瓶を叩きつけてやりたいと思つてゐたが、待てば海路の日和ありだ。」——と、雀躍して喜んだ。

直ちに十名の部下は選ばれた。

「いゝか、皆に皇軍が世界に誇る、對戰車火器の火焔瓶を渡す。仕損じないやうにやつゝける

んだぞ。」と、それ〴〵火焔瓶を渡された。

火焔瓶を受取つた部下も亦、しつかと引つ掴み、前進の命令を待つた。何れも緊張した面……面……面だ。

「匍匐して前進ッ。」軍曹の命令一下、此の勇敢其のものゝ肉迫攻擊班は、地表を匐ひながら前進した。敵戰車へと肉迫した。そして其處で一應軍曹の指揮を待つた。一尺に足らぬ草の上に匐つたまゝ、じつと息を殺した。

「よしッ、やれッ。」といふ、軍曹の聲の下から、一人がさつと躍り出すより早く、火焔瓶を敵戰車に向つて叩きつけた。と、忽ち其の戰車は、黑煙をあげて燃え出した。それを見て、他の戰車群が、此の攻擊班の勇士達を蹂躙すべく近迫して、戰車砲、機關銃を亂射する。

次の一人が飛び出して、これまた他の一臺に叩きつけると、それがまたぱつと火を吐いて燃えあがつた。斯くして一人飛び出せば必ず一臺を屠り、二人躍り出しては二臺を擱坐させた。其のたびに「萬歲……萬歲。」の歡聲だ。

此の肉迫攻擊を知つた敵の砲兵陣地からは、あわてゝ攻擊班に向つて砲口を向け、轟然火蓋を切つたが、零距離射擊だ。砲口前で破裂した砲彈の中から、無數の散彈が飛出して來る。勇

士達は其のバラ彈丸の中に曝されてしまつた。

「やつたな、畜生ッ。」と叫んで倒れたのは、永野軍曹だつた。敵彈のために負傷したのだ。

しかし此の肉迫攻擊班の敢闘によつて、後方の敵戰車の憂がなくなつた○隊は、此の時とばかり敵陣に向つて突擊した。周章狼狽した敵は、砲を棄て、味方を突き倒し、我れ先に逃げ出した。

「萬歲……萬歲。」と叫ぶ歡聲は、逃げ走る敵の後を追うたが、此の時血に染んだ草の上に横はつて――「ばんさ……い。」――と、微かながら叫んだのは、傷ついた永野軍曹だつた。

敵陣前で捨身の猛射　山縣武部隊の得丸隊、間正隊が、敵を哈爾哈河畔に壓迫して、前進中、突如現はれたのは、敵の側防機關銃だつた。しかもそれが尠からず我方を惱ました。

それと見ていきり立つたのは、分隊長の松葉利夫上等兵（宮崎縣東臼杵郡富島町出身）だつた。「よしッ、あの機關銃を叩き潰してやるッ。」と叫ぶが否や、二發の擲彈筒で完全にこれを破壞してしまつた。

「松葉分隊長、凄いぞ。」隊長も斯ういつて舌を卷いた。

其の後彼は、名擲彈筒手の名を以て呼ばれてゐた。七月七日、此の得丸部隊も、同じく――

夜襲を以て敵陣を奪取すべし――といふ命令を受け、部隊の第一線として進撃した。此の時彼の屬する隊は、其の正面に、十五榴砲を据ゑ、十數臺の戰車を移動トーチカとして配して守備する、堅固の敵陣があるのを發見した。

思へば其の重砲のために、幾多の犧牲を拂つたことか。「畜生ッ、あいつだ。」と叫んだ隊長は、怒髮正に天を衝いた。

「あいつだ、あいつを叩き潰せ。」と隊長が命ずると、部下は捨身の意氣で猛攻を加へたが、敵の抵抗はなか〳〵に手强く、必死の防戰も敵ながら目覺しかつた。「奇襲だ。」と叫んだ隊長は、松葉分隊長に、其の部下を率ゐ、正面から猛射をつゞけさせ、其の間隙に乘じて、隊の主力は側面から突入しようといふ、悲壯の決意の下に、これを松葉分隊長に命じた。

優勢の敵陣地正面で、射擊をつゞけることは、正に死を以てする牽制で、全員戰死は火を見るよりも明かだ。隊長は涙を嚥んで此の命令を下したのだつた。

「必ず任務を果します。」命をうけた分隊長の兩眼は輝いた。

時は午前三時、草原の空には、下弦の月が淡く雲間を洩れ、凄慘な地上の修羅場を照してゐた。松葉分隊が散開したのを見ると、敵は一層猛烈に射擊し出した。

「いまに吼面かくな。」と、松葉分隊長は部下を勵まし、十數臺の敵戰車の砲彈、機關銃彈が、夜の雨の如く降つて來る中を、面もふらず猛射を續行するうち、

「うむ……。」と呻つて、分隊長がばつたり倒れた。敵彈に前頭部を射たれ、壯烈の戰死を遂げたのだつた。

これと殆んど時を同うして、敵の虛を衝いて隊の主力が、「ワアッ。」喊聲をあげて突つ込み、肉迫攻擊によつて、敵戰車を燒き、或ひは擱坐させ、其の上に飛び乘つて破壞し、忽ち我方を惱ましてゐた重砲を分捕つた。

「萬歲……。」此の感激の歡聲を、彼は靖國の御社に急ぐ途中で聽いたことであらう……。

斯くして、敵陣占領後、兵の集結の際に、收容されて來た彼の亡骸を抱へた隊長は、

「松葉、やられたか。有り難う、お前のお蔭で、見い、敵の重砲を分捕つたぞ。敵の戰車も片ッ端から滅茶々々にしてしまつたぞ。これを見せたかつた。そして一緒に、萬歲を叫びたかつた……。」と言ひながら、彼の面を染めた血を、ハンカチーフで拭つてやり、熱い涙で洗つてやるのだつた。

剛膽曹長の十三人斬り

同じ夜の夜襲戰で、芦塚部隊の勇士が、ホルステン河川又附近

の敵に、猛然と襲ひかかるべく、息を殺し、身をひそめ、敵陣近く進んだ。

「突込めッ。」中隊長の命令一下、さつと隊長の手があがつた。間髪をいれず、刀を揮ひ、銃剣を擬し、頑強の敵に向つて突撃した。

中にも澤田隊の小隊長、岩越繁一曹長（北海道留萌郡留萌町大字留萌村御料耕地字タルマツプ出身）は、刀を左右に振り廻し、右に敵を斬り、左に薙ぎ拂ひつゝ、敵の壕の中に躍り込んだ。そこには、逃げおくれた敵がゐて、抵抗を試みようとしたが、曹長の勢に怯氣つき、壕から飛び出して逃げようとしたのを、追ひすがつて斬り、死物狂ひで抵抗するのを突き殺しゐる時、側面から不意に突き出した敵の銃剣で、脇腹をグサと刺された。既に此の時までに、全身に數ケ所の銃創を受けてゐた上に、今また脇腹を刺されたので、倒れるかと思へばさにあらず、「うむ……。」と一聲呻つただけで、敵を斬つた時の返り血まで浴び、全身血達摩となり、なほも敵を斬りまくり、遂に十三人の敵を斬り伏せ、ほつと息を吐いた時、敵は總崩れに退却して、完全に陣地を占領してゐた。

「おい岩越曹長、隨分やつたね。だが、大分傷を負ふてゐるやうだ。一應後退したらどうだ。」澤田中隊長は勸めたが、曹長は、「なアに、これしきの傷は何でもありません。」といつて肯

じなかつたのを、中隊長は命を以て後退せしめた。曹長が大刀を鞘に收めようとしたが、流石に斬れ味を誇つてゐた刀も、刃はこぼれ、しかも曲りくねつて、容易に鞘にをさまらなかつた。

後退して、部隊に還つた曹長は、重傷にも拘らず、部隊長に夜襲の狀況を具さに報告した上、泣いて前線復歸を乞うたが、部隊長は涙をのんでそれを斥け、後退を命じたのだつた。

敵戰車群に肉迫攻撃　七日のことだつた。我が〇〇部隊の〇隊は、バルシヤガル高地で、數十倍の敵に對峙してゐた。しかも敵の後方には、重砲、前方には速射砲、迫撃砲、機關銃、陣地の中間には、數十臺の戰車を配し、三段構へ四段備への堅固さだ。敵にして見れば、三日の我が總攻撃以來、漸次ハルハ河畔に壓迫され、必死の防禦陣なのだ。此の堅陣に向つて、攻撃を加へ、これを撃滅しようと企てた我が小隊の數は、あまりにも尠かつた。しかし、其の意氣は正に天を衝くの慨があつた。勿論正面からの攻撃では、損害を多くするのみで、敵の防禦陣を破ることは到底至難だ。

「奇襲だ、夜襲でやつつけるんだ。」隊長は斯く叫び、斯く決意したのだつた。ところが果せるかな、隊長の決意の通り、此の夜我が全線には一樣に夜襲の命令が下つた。敵彈は終日間斷なく飛んで來たが、奇襲を策する我方は、滿を持して動かなかつた。其の日は雲低く垂れ、草

原の空には晴れ間も見えなかつた。「此分で往けば、今夜は絶好の夜襲日和だぞ。」と、勇士たちは腕をさすり、胸を張つて待つた。隊長は夜に入るのが待ち遠しげに、軍刀の柄をぐつと握つてゐた。

やがて日が暮れたが、この頃は草原の夜には、闇がないといつてもよいくらゐ、白夜のために明いのだが、其の夜は星一つだに瞬かず、まつたくの闇だつた。「天祐だ、前進……。」隊長の軍刀の閃めきも見えなかつた。さつと風を切つた音のみを聞いた。晝間猛射を浴せたが、一向相手にならなかつたので、扨ては夜襲かと、夜は不氣味な警戒をしてゐるらしかつた。火力にのみ頼つてゐる敵にとつて、最も怖ろしいものは、我が軍の夜襲の突擊なのだ。早くも敵は夜襲を感づいたのか空には、曳光彈を放ち、其の下に照し出された我方に向つて、十五榴彈をはじめ、あらゆる火砲を集中して、我が前進を阻まうと企てた。待機してゐた數十臺の敵戰車は蠢めき出し、我に向つて前進、戰車砲彈、機銃彈の暴風だ。曳光彈の光が消えても、灼熱して降り注ぐ砲彈の破片のために、四邊が明るくなるかと思はれるほどだつた。

そのうちにも敵戰車の盲彈は、照準も正確になつて、遮二無二進めば、全員戰死の外はない狀況となつた、

「駄目だ、あの邪魔つけの戰車をやつつけないと、敵の陣地占領は出來ん。」と、斯う考へた隊長は、肉迫攻擊を決意し、猪狩功上等兵（宮崎縣延岡市大字岡富甲二九九出身）に、彼の分隊を以て、此の敵戰車群に肉迫攻擊を敢行すべく命じたのだつた。

數十聲の敵戰車群に向つて、僅か一個分隊員を以て、肉迫攻擊これを擊破しようといふのだ。命を受けた猪狩上等兵は、面を輝かし、分隊員を集め、此の重大任務を告げ、攻擊の方法等を打ち合せた。「爆彈を抱いて、敵戰車に打突かるのだ、再び還らない肉彈突入だ。」といふ、悲壯の決意は、各自の面に漲つた。他の戰友は、「うまくやつてらア。」と、羨みの言葉を浴せたが、其の心のどこかでは、「左樣なら、お別れだぞ。」と、互ひに思つてゐたのだつた。

猪狩上等兵を長とする肉迫攻擊の勇士は、戰車地雷を或は火焔瓶を碎けよとばかり握つて號令を待つた。「肉迫攻擊班、前進ッ。」號令の聲と共に、勇士はさつと躍り出した。分隊長猪狩上等兵を先頭に、敵彈雨と降り注ぐ中を、敵戰車群に肉迫、火焔瓶を叩きつけ、或は戰車地雷を軌道下に投げ込み、一臺また一臺、敵戰車を炎上擱坐させていつた。

此の捨身の戰法に、殘る戰車は周章狼狽、炎上擱坐した僚友の戰車を後に、急轉回して退却をはじめた。「おい、逃げるぞ、追ひすがつてやつつけろ。」と、猪狩上等兵が叫んだ時、斷末

魔の敵戰車から射つた機關銃彈のために、彼は壯烈の戰死を遂げたが、此の時友軍は、喊聲をあげて敵陣に殺到、忽ち第一陣を奪ひ第二陣へ突擊を敢行した。

彼の魂は其の喊聲を聞きながら、靖國の御社へかへるのだつた。

頑張り兵二名の死鬪　我が全戰の一大夜襲に七日の夜は明けて八日、七五八高地附近の、〇〇部隊、三浦隊、小銃隊の陣地に向つて、敵が數十臺の戰車を、恰かも步兵の進軍のやうに砲塔を列べ、逆襲を企てゝ來た。

この時、小銃隊の附近に、友軍の速速砲が一門進出して、此の敵戰車群に向つて、猛射を浴せ始めた。かうなると、小銃隊としては、手を束ねる外はない。といつて肉迫攻擊には未だに距離がある。百米位に近づくまで、壕の中で待機することにした。

一門の速射砲は、忽ちのうちに、敵戰車數臺を、片ツ端から叩き壞し、炎上せしめていつた。敵も此の速射砲の位置に氣づいて、殘る數十臺の戰車からは、此の速射砲一門を目がけて、猛射を集中しながら、三回まで迫つたが、三回とも見事に擊退されてしまひ、後には五百米のあたりから、戰車砲彈の亂れ射ちを浴せるばかりだつた。數十臺の戰車と、一門の速射砲の砲擊戰だ。

小銃隊員は、壕の中から、此の壯烈な砲擊戰を見てゐたが、「あつ。」と叫んだのは、龜田友一上等兵（山口縣麻里町桂島出身）だつた。それは速射砲隊附近の情景が、あまりにも悲壯なる有樣で速射砲隊の戰友が、折り重なつて殪れ、たゞ砲手一名で頑張つてゐるのを見たからだつた。

「分隊長殿、速射砲の彈丸がないやうでありますから、加勢に行きます。」と叫ぶが否や、壕から飛び出し、戰車砲彈が降るやうに落下する中を、後方から彈藥箱を引つ擔ぎ、速射砲の側へ駈けつけた。

「おい射つて呉れ、どん〳〵やつてくれ。彈丸はいくらでも持つて來るぞ。」と聲をかけると、最後の一兵となつて、頑張りつゞけてゐた砲手は、「有り難い、賴む……。」と答へ、射ちながら片手で彼を拜んだ。

彼はまた引返し、次ぎの彈藥箱を擔いで來た。「やつてくれ〳〵、そら彈丸だ。」と置いてまた引返した。斯うして彈藥を運ぶこと四回五回、頑張り砲手と、頑張り小銃兵の協力死鬪だ。一時鈍つてゐた速射砲が、再び猛射を開始して、一臺、また一臺と、戰車が破壞されてゆくので、殘餘の敵戰車群も、死物狂ひとなつての亂射だ。彼が六回目の彈藥箱を運んで來て、彈藥

箱をおろした瞬間、敵の砲彈が彼の附近に落下炸裂した。

「畜生ッ。」と叫んで、彼は堂と打ち倒れた。右大腿部を滅茶々々に碎かれてゐた。

「やられたのか。」砲手は射擊しながら訊いた。「なアに大丈夫だ。速射砲、頑張つてくれ、彈丸は此處にある……。」はつきりした言葉で砲手を勵ましたが、後後送され、陸軍病院に收容されたが、十五日午後八時、「速射砲、頑張れ、頑張れ。」と言ひつゞけながら、遂に最期の息を引きとつたのだつた。

重傷の身を起して攻擊前進　十一日に至り、國崎部隊の前面の敵は、我に猛攻を加へて來たので、我も亦これに應戰、彼我の戰鬪は激戰から激戰へと展開した。

此の日〇隊長代理として、〇隊を指揮して勇戰奮鬪してゐた、工藤富夫少尉（北海道松前郡大島村大字江良町出身）は、其の部下を率ゐ、敵陣地の最高地たる要點を奪取せよとの命を受けた。

「全員一丸となつて、敵の要點奪取だ。」少尉が勇み立てば、部下も亦腕を叩いて雀躍した。

折からの夜暗を利し、少尉は部下を激勵しながら、先頭に立つて、猛然敵に攻擊を開始した。敵も亦頑强に抵抗した。一歩も退かじと、亂射を浴せての死物狂ひだ。それに對して、我が

勇士は必勝の信念に燃え、敵彈下を潛り、敵陣へ捨身の突擊を敢行、鬪をつくつて殺到したので、遁がの敵も支へきれず、高地を棄てゝ潰走した。

「萬歲……。」勝鬪の歡聲はあがつた。感激の涙は、どす黑く汚れた勇士の頰に流れた。

「よくやつてくれた。」少尉の双頰にも、涙が流れてゐた。

明れば十二日、黎明から優勢なる敵の逆襲だ。我に奪取された高地を、奪還しようといふ目的の下に、戰車及び裝甲車を伴ふ、約二百の歩兵が、猛然と攻擊して來た。「生意氣に、奪還を企てゝ來たな。」と、少尉は落ちつき拂ひ、自ら陣頭に立つて、部下を指揮激勵に努め、敵に大打擊を與へたので、敵は忽ち混亂に陷づた。

「よし、時機はいゝぞ。」と、指揮班及び第一小隊を自ら指揮して、敵の左側背から、猛然果敢の突擊を決行した。「敵は斯うして斬るものだ。見ておけ。」と言ひながら、刀を揮ひ敵を斬りまくり、群る敵中に躍り込んだ。少尉の刀が一閃すると、敵が朽木倒しに倒れる。

そのたび毎に、部下の士氣は愈々昂まり、これまた銃劍を擬し、突く、斬る、蹴る、怖氣ついた敵は、たわいもなく崩れかけた。「それ、敵は崩れかけたぞ。」と激勵するうち、此の時飛んで來た敵の一彈は、少尉の胸部を傷つけた。「やつたな。」と叫んだが、これまでに變らず敵

を斬りまくつてゐるうち、再び飛んで來た敵彈は、これまた少尉の胸に命中した。「うむ。」と一聲呻つて倒れたが、直ぐさま起ち上り、「いま一息だ、いま一息だ。」と叫び、部下を激勵したが、其の聲は既に最期にしぼる、逞しくも苦しい聲だつた。この時既に堪へられなくなつたか、堂と打ち倒れた。

「少尉殿ッ……。」部下が駈け寄り抱へ起すと、「敵……敵はどうした。」と、苦しい息の下からも、戰況を訊ねるのだつた。部下は其の耳に口をあて、敵は退却をはじめ、戰況は有利に展開してゐる旨を告げると、「さうか、有利か……。」とうなづいて見せた。此の時敵は戰車を先頭に退却をはじめた。

「少尉殿、敵はいよ〳〵退却であります。あれを見て下さい。」部下は、少尉の重傷であることも忘れ、體を搖ぶり、狂氣のやうに叫んだ。「敵が……敵が退却するか。」靜かに眼をあげた少尉は、退却する敵の方を見やつたが、此の時退却の敵に投げかける、我が方の萬歳の嵐が起つた。「少尉殿、勝利であります。勝利であります。皆萬歳を叫んで居ります。」「さうか……萬歳……。」と叫び終ると、さも滿足氣に、部下の腕に抱かれ、兩眼を閉ぢてしまつた。

奇襲を以て敵陣占領

我が猛攻猛擊に堪り兼ねた敵は、哈爾哈河畔の退路、川又（ホルステン河が、哈爾哈河に合流した地點）にまで引き退つたが、其處には督戰隊が火焔放射機に火を噴かせてゐるので、其の線から退却する事は出來ない。從つて死物狂ひになつて逆襲する外はない。ソ聯兵はウラー〳〵（萬歳）と叫び、泣いて逆襲して來るのだつた。

十一日から十三日にかけて、我が軍の全面的進擊に伴ひ、この川又方面に猛攻を加へてゐた○○部隊も、玆に斷然殲滅戰を開始した。此の時○隊は、川又東方の高地を、奇襲を以て占領して、他の各隊の、敵陣奪取の端緒を開くべく任務を與へられた。

しかし、僅かに一個○隊を以て、敵の堅陣に向ふといふ事は、寧ろ無謀に近い作戰だつた。目指す高地を占領するとすれば、勢ひそれに連る隣接陣地からも、猛火を浴せて來るのだ。而も其の陣地々々の間には、移動トーチカの戰車が配備されてゐるのだから、戰車砲彈と機銃彈は、雨のやうに降り注ぐにきまつてゐる。何れにしても、此の奇襲隊は、敵の十字砲火の中に曝されるのだが、全軍の戰況を有利に展開するためには、笑つて飛び込んでゆくのが、尊い皇軍魂なのだ。

「苦境に立つ事は、皆も判つてゐる筈だ。最後の一人となつても、あの高地を占領するのだ。いゝか。」

○隊長は、悲壯の決意の下に、部下一同に訓示を與へた。それが上官、部下の最後の訣別なのだ。隊長のドス黑い顏は緊張してゐた。

やがて、「川又東方高地へ向つて突擊ッ。」と、隊長の裂帛の聲は響いた。ワアッと逞しい喊聲があがつた。正に死の强襲だ。暴風の如き進擊だ。此の突擊を發見した敵は、案の定銃彈の嵐を送つて來た。見る〳〵うちに、彼我の間には屍の山を築いた。

「いま一息だッ。」隊長の聲が、銃砲聲の中にも、勇士の耳に響いた。魂を鞭つた。——ワアッ——歡聲はあがつた。敵の第一線陣地占領だ。息吐く間もなく、更に第二陣へ向つての進擊だ。敵の第二第三線と奥深い陣地からは、いま占領した第一陣地へ砲火の集中だ。彼等の陣地であつたゞけに、實に照準が確實だ。

第二陣へ亂射の中を潛つて進むうち、一人倒れ二人殪れ、今は生き殘るもの、隊長以下僅かに三十八名、それさへも一人として生還を期してゐるものはない。全員戰死の突擊だ。

此の時、西田利美曹長（宮崎縣東諸縣郡出身）は、○隊の指揮班長だつたが、咄嗟の判斷の下に、部下數名を率ゐ、隊の主力から離れ、敵の左翼に猛然たる射擊を開始した。敵は此の奇襲にまんまと乘ぜられ——新手の兵力が現はれた——と思つたか、あわてふためき、陣容を整へる餘裕どころか、砲も棄て、武器も拋ち、たゞ生命のみを護つて逃げ出した。そこへ主力がドッと突入し、完全に第二陣も占領したが、これ西田曹長の奇襲が功を奏したのだつた。

此の大膽不敵の勇猛心と、咄嗟の奇智によつて、この戰果を齎らし、赫々の戰功を樹てた曹長も、越えて同月二十五日、再び總攻擊が敢行された時、敵陣の眞只中に躍り込み、鬼神の如く荒れ廻るうち、敵彈のために壯烈の戰死を遂げたのだつた。

部下の遺骸と共に突入　十三日の夕闇がノロ高地附近一帶に迫つてゐた頃、哈爾哈河右岸、スンプル渡河點附近で、敵の十五榴砲彈が、ダーン、ダーンと落下炸裂して、岡本部隊菅隊の前進を阻んでゐた。敵との距離は僅かに百米、其の百米の草原が、敵の十字火のために進めない。屠るべき敵の姿までも、夕闇の彼方に見えてゐる。それで進めないのは剛腹だ。——全員戰死の突擊あるのみだ。我々が全員戰死をしても、後には豫備隊が來て敵の主陣地を占領して呉れる——隊長は斯く決心した。

勝部康治上等兵（島根縣簸川郡上津村上島出身）は、後方部隊本部への傳令を命ぜられた。

「隊長殿、勝部が戻るまでは……。」彼は共に突擊をしたかつたのだ。

「宜しい、復命せ、お前が復命するまで、突入を待つ。」隊長も彼の心情を察して言つた。彼

は復誦すると同時に、敵彈亂れ飛ぶ中を、脇目も振らず駈け出した。隊長以下、彼が無事任務を果すことを念じながら、夕闇の中に消えてゆく、彼の後姿を見送つてゐた。やがての後、後方の稜線を、駈け下りて來る彼の姿を發見した。「おゝ勝部だ。勝部が還つて來た。」隊長は思はず聲をはづませて言つた。彼れの笑顔までが見え出した。突入に間に合つたことが嬉しかつたのだ。

ところが、いま一息といふところで、彼はばつたり倒れた。「あつ、やられたッ。」と、全員伸び上つて叫んだ時、彼は再び起ち上つて走り出したが、跛足を曳いてゐた。——足をやられたな——中隊長がはら〳〵して見守つてゐるうちに、漸く彼は辿りついた。そして隊長の前に出て、復命をしてゐる時、敵が投げた手榴彈が、足許に轉がつて來た。敵數名が、壕から匐ひ出して來て投げたのだつた。

「危いッ。」と叫んで、復命中だつた彼は、隊長を體當りで突き飛した。瞬間手榴彈は轟然炸裂した。彼は其の破片を一人で浴びて、全身火傷と爆創を受け、一瞬にして血達摩となつた。

「勝部、どうした。」突き飛された中隊長が、刎ね起きざまに彼を抱へ起した時、彼は明瞭な聲で、「報告終りッ……報告終りッ。」と續けて叫び、中隊長の腕の中で息は絶えた。

「勝部、有り難う、仇はきつととるぞ。あんなに突入を樂しみにしてゐたのになア、もう少し生かしておきたかつた。俺の身代りになつて呉れたんだ。俺がやる、お前の分まで俺がやる。」中隊長は、彼をしつかと抱いたまゝ言つた。

「隊長殿、勝部も一緒に連れて突入しませう。」

「うむ、お前が背負つて行つてくれるか。」

「はい、勝部、サア突入だぞ、來い。」一人の戰友は、彼を背中に負ひ、革帶でしつかりと括りつけた。五分の後には、一團の猛火の如き突入だ。眞先かけて進む隊長の後には、勝部を負ふた戰友が、影のやうに續いて進んだ。

敵陣へ殺到した一隊は、狼狽して立ち向つて來る敵を、斬つた、突いた、手當り次第だ。

「勝部、此奴はお前の分だぞ、そら、斬つたぞ。」と敵を斬る毎に、隊長は勝部の名を呼んだ。敵は其の勢に怖れ、陣地を棄てゝ潰走した。

「勝部……敵は逃げたぞ。敵陣は占領したぞ、サア、萬歳だ。おい、御苦勞だつた。勝部をおろせ。」

「はい、勝部、よく戰つたのう。」戰友はさう言ひながら、彼の遺骸をおろさうとすると、隊

長はそれを自ら抱きおろした。

「勝部……仇は討つたぞ。」さう言つた隊長の頰には、涙が、涙が……光つて流れた。

苦鬪六時間血にまみれて軍橋占領　この日から開始された、ノロ高地一帶の敵陣地に對する總攻撃は、翌十四日未明に至つて酣となり、激戰の最頂點に達したが、我が將士が、必勝の信念を以て、戰ひに戰ひ拔いた結果、正午頃になると、我が戰線の到る處に、萬歳の歡聲があがつた。

白濱部隊林隊の、重機關銃〇隊長田中秀人曹長（福岡縣宗像郡田島村多禮出身）は、部下と共に一息吐いてゐた處へ――「田中小隊は、三木隊に配屬、三木隊の哈爾哈河敵軍橋確保を掩護すべし。」――との、本部命令の傳令が飛んで來た。此の命令受領と同時に進發したが、敵の渡河軍橋までは、距離にして三千米、其の間一の低地もなければ、一の丘陵もない、僅か一尺足らずの砂漠特有の短かい草が生へてゐるのみだ。其の行先には、我が猛攻に總崩れとなつて退却したとは言へ、軍橋を最後の據點として、頑强に抵抗を續けてゐる敵が雲集してゐて、幾度となく逆襲を企てゝ來る。哈爾哈河對岸の敵砲兵陣地からは、物凄いほど十五榴砲彈の雨を降らせて來る。三木小隊員は、次々に殪れてゆく。田中小隊員も亦、一人減り二人倒れ、時

と共に、進むにつれて、兵力は減つてゆくばかりだつた。

「見えたッ、軍橋が見えた。」田中隊長が叫んだ。目指す軍橋八十米にまで進出してゐた。敵の動脈ともいふべき、軍橋が眼の前に見えると、勇士の志氣はいよ／＼昂まつた。

この時敵は、我方を寡兵と侮つて、猛然奇聲をあげて突擊して來た。督戰隊に追はれ、絶體絶命の死物狂ひの逆襲なのだ。田中隊長は、左右の機關銃を激勵して、果敢な射擊を加へたが、敵は優勢を恃み、マキシム機關銃に火を吐かせ、掃射を浴せて近迫した。

三木隊の勇士は、敵の彈道の中を進んだ。敵の此の掃射を受け、全員戰死を遂げた分隊もあつた。中には五人、三人一團となつて、「突擊なら此方が本家だ。」と、彈丸の如く敵の中へ躍り込んだまゝ、遂に再び姿を見せなかつた者もあつた。言ふ迄もなく、敵中で壯烈の戰死を遂げたのだ。

田中隊長は、部下を激勵して、惡戰苦鬪正に五時間餘、其の間分隊長二名をはじめとして、隊員の多くは殪れ、殘るは隊長共に僅かに十の指を以て數へるに過ぎなかつた。砂漠の草は血に染んだまゝ、乾きもやらぬ間に日は暮れかゝつた。

「見ろ、夜になつたら、夜襲で一擧に片づけてやるぞ。」と、田中隊長は、眦をあげ、悲憤の

涙を呑むうちに、またしても六回目の敵の逆襲だ。

「野郎ッ、また來やがつたか。」と叫ぶなり、隊長は機關銃に飛びついた。射手は既に殪れてゐたので、隊長自ら必死の猛射を加へた。あざやかな射手振りだ。敵は怯みかけた。

「おうい、小隊長殿が、一人で射つて居られるぞ。」あたりに倒れてゐた、傷ついた部下たちは、申譯ないと思つてか、或ひは甸ひ、或ひは居坐り、或ひは手さぐりで、彈丸を運び、彈丸を渡すなどして、血みどろの戰鬪をつゞけた。其の魂をこめた猛射彈によつて、逆襲の敵はさつと退いた。

「皆、有り難う、よくやつてくれた。」隊長は、傷者たちを劬はりながら言つた。

と、また、突如敵はバリ／／と射ち出した。しかも田中隊長を狙つての集中彈だ。此の時、

「うむ……。」と叫んだまゝ、隊長は機關銃の上に突伏した。敵彈が頭部を貫いたのだつた。

「隊長殿、しつかりして下さい。」傷ついた部下たちは、己れの苦痛も忘れ、隊長の側へ寄つたが、もう隊長は絶命してゐた。

「隊長殿、仇をとります。」部下は泣いて叫んだ。機關銃は再び火を吐き出した。それは泣いて誓つた傷ついた部下が、機關銃にしがみつき、眞死の猛射を開始したのだつた。

それから一時間と經たぬうちに、三木隊の生き殘り勇士によつて決行された、死の突擊が功を奏し、敵が最後の據點として、頑强に抵抗をつゞけた軍橋を、遂に完全に占領したのだつた。

「隊長殿、軍橋占領であります。」それは傷ついた部下たちが、息絶え／／の斷末魔に、今は亡き隊長への報告の言葉だつたのだ。

運命を共にと誓つた輕機を抱いて　ホロンバイル草原

さだ。草を、砂を、眼を、太陽は射るやうだ。此處に戰ひ續ける將士は、喉を霑ほすに一滴の水もなかつた。

「おい、今日も水にありつけないのか。」誰かゞ彼方の壕から叫んだ。かさ／／に干からびたやうな聲だ。流石にその日は敵の逆襲もなかつた。敵も暑さに萎えてしまつたのだらう。

とある壕の中で、日覆用の天幕を敷いて、輕機關銃の手入をしてゐたのは、森田部隊河添隊今田隊の篠原正熙一等兵（島根縣那賀郡石見村淺井出身）だつた。鬚は蓬々と伸び、眼はぐつと落ち窪み、頰はげつそりと落ち、蒼い顏をしてゐた。

彼は數日前から、激しい下痢に罹つて、飲まず喰はずでゐながら、幾度後退を勸められても、

頑として肯かなかつた。

「篠原、またやつてるのか、そんな事をしたら、ひどくなりはしないか、それが心配だ。」聲をかけたのは分隊長だつた。

「はい、御心配かけて濟みません。篠原はもう治つたんであります。」彼は手入の手を休め、分隊長の顏を見上げて言つた。

「嘘をつけ、お前は毎日々々、治つた〳〵といふが、ちつとも治つてゐないぞ。治るどころか、一日々々悪くなつてゆくやうだ。なア篠原、お前の其の氣持は、俺ばかりぢやない、中隊長殿にもよく判つてゐるが、身體が悪くちや仕樣がないから一週間でいゝ、野戰病院に後退して、治療をして貰つて、すつかり治つてからまた來たらどうだ。なアに戰鬪はこれからだからな。」

分隊長の、情をこめた言葉に、彼は俯向いた儘返辭をしなかつた。それは、獨り分隊長ばかりではない、戰友達からも、毎日々々聽かされる言葉だつた。彼はさうした言葉を聽くたびに、犇々と胸をしめつけられる思ひだつた。彼は默つてまた輕機の手入れをはじめた。

「篠原、何故返辭をせんか。」分隊長は叱るやうに言つた。

「はい……。」と言つて、つと起ち上つた彼は、姿勢を正して、「分隊長殿、篠原は下痢をしてゐますが、此の輕機は此の通り元氣であります。まだ一度も故障も起して居りません。分隊長殿、篠原は此奴と……此奴と……。」絶句したまゝ、彼は輕機を抱き上げ、ほろ〳〵と涙をこぼして、「運命を共にする約束で出動したんであります。」と言つた。

「誰と約束したんだ。」

「はい、こいつであります。此の輕機と約束したんであります。」

今度は分隊長が、默つて面を背け、涙を指の先で擦つた。

それから數日後の十八日、ノロ高地の西方四粁の地點で、激戰が展開された。其の日敵は十數臺の戰車と、裝甲車を伴ひ、一大逆襲を企てゝ來たのだつた。それを擊退すべく、今田隊はとある稜線を占領して、猛然火蓋を切つたが、此の時彼の輕機關銃は、左翼から押し寄せて來る、敵裝甲車の一群に向つて、銃身も灼けよとばかり火を吐いた。其の必中彈のために、タイヤを打ち貫かれ、行動不能に陷るものが、一輛、また一輛、いま三輛目に向つて、猛射を浴せはじめた時、敵戰車から集中した機銃彈のために、傍にゐた戰友が、次々に殪れていつた。

「口惜しいな……野郎ッ。」悲憤の涙を流しながら、猛射をつゞけるうち、「占めたッ。」と叫んだ。三輛目の敵裝甲車をやつゝけたのだ。「今度はお次だ。」と、更に四輛目に向つて、射擊を

始めようとした時、敵の一弾は彼の頭部を貫いた。

「残念ッ……。」此の一語が、頑張り通した彼の最後の言葉だつた。運命を共にと誓つた輕機は、しつかと胸に抱いたまゝだつた。

敵戰車生捕り男　七月十九日のことだつたが、森田部隊岩男隊の高橋准尉の指揮する、ホルステン河右岸イリンギン臺附近に位置する機關銃小隊の陣地を目がけて、敵の戰車五臺が戰車砲彈を亂射しながら突進して來た。其のうちでも一臺のみは、群を拔いてぐん〳〵迫つて來た。百米……五十米、「射擊ッ。」の號令と共に、三挺の機關銃は忽ち火を吐いた。しかし厚い鋼鐵鈑には、何の效果もなかつた。敵戰車は我方の陣地を蹂躙すべく迫つたが、陣地は高さ約二間の砂丘のため、其の方からは駄目と觀念したものか、急回轉して後方へ廻りはじめた。後方へ出られては危險だ。此の時、「畜生ッ、俺が歸つた以上は、敵の戰車も何もあつたものか生捕にしてやる。」と叫んで、飛び出した兵があつた。それは、今傳令から還つたばかりの、小林貝治上等兵（山口縣宇部市上宇部一四九六出身）だつた。

「小林、危いッ。」上官も戰友も、異口同音に叫んだが、彼は後をも見ず、兩手には三個の手榴彈を掴んだまゝ飛んで行つた。彼は敵戰車の機銃彈を潛り、五米にまで肉迫、持つてゐた手

榴彈を叩き合せて發火させ、同時に敵戰車の行先に投げた。殘りの一個は、短劍の柄に打ちあてゝ發火させ、今目の前を通り過ぎる戰車のキヤタピラーの間に嚙み込ませた。「成功」と見た彼は、横ざまに飛びのき、ごろ〳〵轉がつて後退した。

と次の瞬間、ボツ……パーンと炸裂した手榴彈、敵戰車はキヤタピラーを打ち碎かれ、忽ち擱坐してしまつた。「態見やがれ。」と言ひながら、擱坐した敵戰車を尻目に、悠々と引きあげた彼の剛勇に、隊員一同「萬歲」の歡聲を浴せた。

其の後彼を、「戰車生捕り男」と綽名したが、彼が生捕つた戰車は、僅かに一臺ではあつたが、「戰車が何だ。」といふ勇猛心を、隊員一般に奮ひ起たしめた勳は蓋し大きなものだつた。

この勇敢な「戰車生捕り男」も、八月三十日ホルステン河右岸イリンギン臺附近の戰鬪で、遂に壯烈の戰死を遂げたのだつた。

戰友を葬つた丘に己れも散る　戰ひ續けて七月二十三日、同じ白濱部隊の高田小銃中隊が、敵陣地から浴せて來る十字火のため、前進が頗る困難になつた時だつた。

全滅か、突入成功か、それを描き分けるのは、一に我が方の機關銃小隊の奮戰にかゝつてゐた。此の機關銃小隊が、其の重大任務を達成するためには、現在の位置から、更に五百米の前

進を必要とした。其處には高地があつた。其の高地まで進出して、敵の機關銃を叩き壞さうと決意したが、其處まで進むには、勿論敵の側射は覺悟しなければならなかつた。喰ふか喰はれるかだ。敢然喰ふべく前進を開始した。

果せるかな、前進後間もなく、隊員は次々に殪れていつた。森田正文上等兵（島根縣邑智郡川本町川本出身）の分隊でも、飯田分隊長も傷つき倒れた。

此の時、先行した小隊長は、早くも彼方の砂丘に立つて、頻りと手をあげて招いてゐた。

「おうい、小隊長殿の招致だぞ、最後の一兵となつても前進だ。」と、戰友を勵ましながら、上等兵は一人でぐつと、射身を擔ぐと、敵彈霰とたばしる中を、一直線に駈け出した。

百米、二百米……此の時飛んで來た一彈は、同上等兵の腹部を貫通した。同時によろめいて、倒れさうになつたが、彼はじつと踏み堪へた。「倒れるものか、倒れんぞ。」彼は齒を喰ひしばり、射身を擔いだまゝ、一歩一歩前進をつゞけた。そして、漸く小隊長のゐる砂丘に辿り着いた。

「銃……到着ッ。」と言つたまゝ、彼はばつたり倒れた。

其の時、飯田分隊長に代つた、飯島正市上等兵（島根縣簸川郡稗川村野尻出身）が負傷したのを、自分で假繃帶を施し、彈藥箱を擔いで、辿り込むやうに到着した。

「森田、森田……。」と呼んだが、彼はもう、返辭をしなかつた。

「仇は討つぞ……小隊長殿、飯島分隊到着。」と報告すると、小隊長は直ちに、

「射てッ。」と命じた。

飯島分隊長は、忽ち射擊を開始した。其の猛射に、間もなく敵は沈默した。

「射ち方止めッ。」小隊長の命令で、射ち方を止めて、ほつと息をついた飯島分隊長は、小隊長の顏を見てにつと笑つた。それに應へて小隊長も笑つた。たわいもなく敵を制壓することが出來たからなのだ。

そこへ、遲れてゐた分隊員が、何れも假繃帶をして追及して來たので、飯島分隊長は、其の部下に機關銃を渡し、森田上等兵の、遺骸の側へ歩みよつた。

「森田、敵はやつゝけたぞ。君の仇は討つたぞ。」斯う獨語を言つた彼は、彼を假に葬むるべく砂地を掘つた。

「森田、お互ひに戰死は覺悟してゐたが、死ぬ時は一緒だと思つてゐた。此處で君を僕の手で葬むらうとは夢にも思はなかつたよ。水も飲まずに……飯も食はずに……なア森田、水も飲み

たかつたらう、腹も空いてゐたらう、其の代り、今米と水を一緒に入れてやるから、これで我慢して呉れ。君と一緒に、哈爾哈河の水を、腹一ぱい飲みたかつた。哈爾哈河の水で炊いた飯を鱈腹喰ひたかつた……。」生きた戰友に語るが如く、その亡骸を葬むる砂を、涙で濡しながら獨語ちた。

やがてまた、敵は新手を加へて逆襲して來た。飯島分隊長は、部下を激勵して、これに猛射を浴せてゐたが、敵彈のために腹から背にかけて貫かれ、銃把を肩にあてたまゝ倒れた。

「森田……森田、僕も往くぞ……小隊長殿、先へ往つて申譯ありません。おい、誰か、早く、銃を……銃を……。」と叫びつゞけてゐたが、其のうちに昏睡狀態に陷り、收容された後も、折々意識をとり戻しては、「銃を……銃を……。」と言ひながら、部下の名を呼んでゐたが、呼ばれた部下も、敵彈のために殪れてゐたのだつた。

斯くて二十四日の未明、彼は戰友森田上等兵を葬むつた、ノロ高地キの丘の華と散つたのだつた。

「攻擊精神の旺盛な男だつたのに、惜しい事をした……。」と、森山准尉も、彼の冷たくなつた手を握り、暗涙に咽ぶのだつた。

右眼を奪はれながら照準射擊　明けて二十五日、朝靄立ちこめた草原の彼方から、數臺の敵戰車が、我が〇〇部隊の陣地を目がけて、盛んに猛射を浴せながら迫つて來た。

それを中野速射砲隊の陣地で發見したのは、須見部隊伊加賀隊の橋忠夫一等兵（北海道爾志郡熊石村字岡下出身）だつた。

「よし、見て居れッ。」と呟やき、敵砲彈が雨と降つて來る中で、確實の目標を捉へて射ち出した。と間もなく、先頭に進んで來た敵戰車の一臺に命中して、忽ちこれを破壞した。我が陣地では、ワアッと歡聲をあげた。

此の必中彈に狼狽した敵戰車は、亂射を浴せながら近迫した。わが陣地からは、相變らず猛射を加へた。敵戰車對我が速射砲との大砲擊戰が展開された。彼我の銃砲聲は、殷々轟々朝靄の空に響き渡り、露に濡れた草原の地軸をゆるがし、砂丘は崩れて砂は流れた。

「そら次の番だ。」と叫んだ彼が放つた彈丸は、二臺目の敵戰車に見事命中して擱坐させた。

「橋名射手、巧いぞ。」戰友達はかういつて讃へた。彼は更に三臺目に照準中、敵の砲彈は速射砲の附近に落下炸裂した。瞬間「あつ。」と叫んだ彼は、右の眼を片手で押へた。砲彈の破片は、彼の右眼を奪つたのだつた。

砲手にとつては、生命とも頼む右の眼を奪はれながら、剛膽な彼は少しも驚かなかつた。

「畜生ッ、右の眼がなくつたつて、俺にはまだ左の眼があるぞ。」呟きながら、流るゝ血潮を掌で拂ふと、左一眼で照準を定め、「野郎ッ。」と叫んで放つた彈丸は、これまた狙ひたがはず三臺目の敵戰車を破壞した。

更に四臺目を狙ひ、今まさに放たうとした時、敵の第二彈は、彼の胸部を貫通した。

「殘念だッ。」と叫んで、彼は砲側にばつたり倒れた。

「橘、やられたか、しかし敵の戰車を三臺までもやつゝけたのは殊勳だぞ。後退して手當を受けろ。」分隊長は、彼を讃へ、彼を劬はりながら後退をすゝめ、砲手の交代を命じた。

「大丈夫であります。敵戰車はもう逃げ腰になつてゐますから、此の機を逸してはなりません。」と言つて後退しようとせず、彼は手探りで砲に匐ひ寄り、照準把に手をかけて起ち上つたが、何を言ふにも重傷の身だ。責任觀念のみは旺盛だが、多量の出血のために弱つてゆくのは、どうすることも出來なかつた。

「あゝ、もう射てないのか……殘念だなア……。」と言ひながら、照準把を握つたまゝ壯烈の戰死を遂げたのだつた。

敵中に求むる上官の遺骸　此の日一方〇〇部隊の〇〇隊は、激戰の連續に引きつゞく夜襲戰だ。

「全員一人も還らぬ覺悟で往け。」聲を落して激勵する隊長の顏は、闇の中にさだかには判らないが、出動以來生死の境を共にし、しかも其の指揮の下に、其の愛撫のうちに、一心同體となつて來た多くの部下達には、逞しく緊張した、隊長の顏をはつきりと見ることが出來るのだつた。

砂漠の草は、しつとりと露に濡れてゐた。其の草を踏むにさへ跫音を忍ばせ、じり〳〵と敵に近づいたのだつた。

「皆、此處を最後の御奉公と思へ、いゝか。」また闇の中から隊長は言つた。其の聲は低かつたが、愛と力がこもつてゐた。この〇隊長は、いま愛する部下に、此の突擊を命じようとする直前だつたのだ。隊長は更にまた言つた。「俺も死ぬ、お前達も死んで呉れ。お互ひに、君國の御爲に笑つて死なう。」

部下は默つてゐたが、心のうちでは、――「此の隊長と共に死ぬ」――と決意してゐるのだつた。

時は來た。隊長の持つた軍刀が、ぴかりと闇の中に一閃した。同時に喊聲を上げ、隊長を眞先に、疾風の如く敵陣に向つて突つ込んだ。不意をうたれた敵は狼狽した。喚く敵兵を、片ッ端から斬りまくり、突きまくつた。

「萬歳……。」歡聲をあげた時、盲目射ちに射つた敵の一彈が、隊長に命中して、「うむ」といつたまゝ倒れた。それと見た須田溫上等兵（宮崎縣南那河郡飫肥町出身）は怒髮天を衝いた。

「おのれ、隊長殿をやつたな。」と叫びさま、右に左に當るを幸ひ突きまくつてゐるうち、これまた大腿部に敵彈を受けて倒れた。起ち上らうとしたが起てない。敵陣は深い、まだまだ突入しなければならぬ。こゝで倒れてなるものかと、我と我が心を叱つても、鞭つても、大腿部の重傷では、身體の自由がきかない。「前進は駄目だ。よし、體の動く間は、隊長殿の遺骸を護らう。」と決心した彼は、血に染みながら、暗い中を匐ひ廻り、隊長の死體をもとめた。

「あつ、此處だ、こゝだ。隊長殿、隊長殿……。」と言ひつゝ、隊長の遺骸に縋りついた彼は、男泣きに泣いた。そして「隊長殿御安心下さい。須田の身體が少しでも動く間は、隊長殿に指一本だつてささせはいたしません。」と言ひながら、重傷の身も顧みず、匐ひながら、隊長の遺骸をとある凹地まで運んだ。もう息絶え絶えだつた。しかし、まだ其處は安全な場所とは言

へなかつた。當然他に移さなければならないと思つたが、それは到底今の彼には覺束なかつた。彼は聲を張り上げ、友軍の援けを求めたが、誰も應へるものはなかつた。

猛襲の夜はほのぼのと明けた。朝の陽が夜來の修羅場の上に照り出した。眼を覆はしむる狀景だ。慘、また慘……。其の頃〇隊は、ある地點に占領後の集結を終つたところだつた。この時、第二分隊長の清水小太郎上等兵（靜岡縣庵原郡河内村出身）は、はじめて隊長の戰死を知つた。「隊長殿の死體は……。」と訊いて見ても、混戰中だつたので、誰も知つてゐる者がなかつた。

「隊長殿の死體を收容に往かねばならぬ。」斯う考へた彼は、其の事を小隊長に願ひ出た。この時、菊田富貴男一等兵（宮崎縣東臼杵郡西郷村出身）も、同樣志願して出た。

けれども、隊長が斬り込んで行つた線は、あまりに深く、敗走した敵が、口惜し紛れに亂射亂擊を浴せてゐる地點だから、其處に兩名を赴かしむることは、死に往かしむるやうなものだつたので躊躇した。

「待て、敵の射擊は、きつと今に息をつく、其の間隙を見計つて往け。」と、逸る兩名を一時間餘も抑へてゐた。

其のうちに、果せるかな敵の砲擊は小止みとなつた。待ち構へてゐた兩名は、小隊長の許を得て飛出した。兩名の姿を發見した敵は、忽ち機關銃の猛射と、狙擊小銃彈を、雨の如く降らせて來た。其の中を、兩名は僅かな凹地凹地を拾ひ、短かい草の茂みを利用しながら、彼方此方と、隊長の死體をもとめて廻つたが、其の心情は悲壯其のものだつた。

と、とある凹地に、横はつてゐる友軍の兵があつた。戰友の死體かと思ひながら、近づいて見ると、意外にもそれは、大腿部に重傷を負うた戰友の須田上等兵だつたが、まだ生きてゐた。

「あツ、須田かツ。」と聲をかけると、「おう、清水……清水……。」と言つたが、後の言葉が出なかつた。ただ出るものは、止め度もなく流るゝ涙だけで、正に戰野に於ける劇的邂逅だつた。

「隊長殿の死體は知らんか。」「おれがまもつてゐた。此處だ、此處だ。」

見ると、あたりの草をむしりとつて、隊長の死體を覆うてゐた。「あつ、隊長殿……隊長殿、お迎へにまゐりました。」須田、清水の兩名は、隊長の死體に縋りついて泣き出した。

やがて清水上等兵は隊長の死體を背負ひ、須田上等兵を扶けながら、再び彈雨の中を潜り、漸く敵砲火から離脱したのだつた。間もなく菊田一等兵も來たが、隊長の死體は、既に清水上等兵が收容した後だつたので、あたりに倒れてゐた、戰友の死體を一人づつ背負うて、次々と

運ぶ樣は、涙ぐましいものだつた。

一方收容された須田上等兵は、いつまでも隊長の軍刀を抱いて放さなかつた。そして、「隊長殿の死體は……。」と、已れの傷の苦痛も忘れ、只管に隊長の死體のことを案ずるのだつた。

「心配するなよ、隊長殿の死體は、先刻收容したぢやないか。」と、清水上等兵が言ひ聞かせると、「さうか、さうだつたか。」と、如何にも安心したらしく言つて、ほろ〳〵と涙を流した。

敵のピアノ線を逆用奮戰　七月三日總攻擊開始以來、來る日も來る日も戰ひ續け、空中では我が陸鷲が、越境敵機の大編隊群を邀擊して屠り、地上では全線到る處で敵を猛攻、遂に優勢の敵を、哈爾哈河對岸、國境線外に驅逐したが、性懲りもない敵は、二十六日の拂曉から射程の長い重砲の掩護を悖み、數百臺の戰車を先頭に、またしても一大逆襲に轉じて來た。

中にも我が齋藤部隊の、左翼隊本部陣地の奪取を企んでか、數十臺の戰車と、約一個聯隊の狙擊兵が、猛烈な攻擊を加へて來た。

此の時〇隊の德留克夫軍曹（鹿兒島縣川內町出身）は、分隊長として、此の高地の西北の一角を占めてゐたが、早くも敵の意圖を看取したので、兼ねて敵が放置して退却したピアノ鋼線を、陣地の前に列べさせた。これはノモンハン戰で、敵がはじめて用ひた障害兵器で、細い鋼

鐵線を無暗に組み合せたもので、戰車も人もこれにかゝると、藻掻けば藻掻くほど絡り、遂には動けなくなる、其處を狙つて射擊をしようといふ寸法なのだ。軍曹は何かの時の役に立つべく、分捕つておいたものを、いまこゝで逆用して、陣前に列べて敵に備へたのだつた。

敵戰車は、無限軌道の轟音物凄く、この陣前に迫つたが、ビアノ鋼線の直前で發見したか、再び五百米ほどの位置に戻り、其處から戰車砲彈を亂射して、ビアノ鋼線の破壞を開始した。

シユツ、トン、シユツ、トンと射ちかけて來る敵彈は、ビアノ線を越えて、陣地の前後左右にも無數に落下した。一時間、二時間、引つきりなしに射ちつゞけ、殆んど一日中射ちつゞけてゐた。軍曹は部下を掌握しながら、時機の來るのを待ち受けた。

夕暮になると、敵は戰車の蔭に、狙擊兵を忍ばせながら、再びじり〳〵と迫つて來た。狙擊兵にビアノ線を除去せしめようといふ考へなのだ。果せるかな、戰車砲の掩護射擊の下に、狙擊兵はビアノ線の取り除けを開始した。

「よし、射擊ッ。」軍曹の命令一下、部下は直ちに敵狙擊兵を狙ひ射つた。敵はバタ〳〵と倒れた。しかし、まだ若干の兵は、ビアノ線を破壞すべく努めてゐた。それと見た軍曹は、軍刀の鞘を拂ふが否や、單身壕から躍り出し敵狙擊兵の中に飛び込みざま、片ッ端から斬り伏せた。

殘餘の敵は、軍曹の勢ひに怯氣つき、先を爭うて逃げ去つた。

敵はまだそれでも諦めなかつた。日がまつたく落ちて、人顏の見分けもつかぬ薄闇の頃になると、マキシム機關銃二銃と、狙擊兵とを伴つた、約六十名の敵が、散開して前進した。

「畜生ッ、また來やがつたか。」と見てゐるうちに、南側の凹地に入つて見えなくなつた。

「貴樣達に謀られて堪るかい。」と叫んだ軍曹は、手榴彈三個を引つ掴むが否や、只だ一人壕から飛び出し、敵の側方へ迂回した。

彼が身を伏せながら、敵の樣子を窺ふと、敵は凹地に集り、何等かの奇襲作戰に出ようといふ計畫らしかつた。其の虛を衝いて近づいた彼は、掴んで來た手榴彈三個を、續けざまに投げ込んだ。それが次々に炸裂して、忽ち數十名の敵が、殆んど將棋倒しにバタ〳〵倒れた。敵は此の不意討に氣を呑まれ、あわてゝ遁走した。

越えて二十七、八日、敵は前日來の逆襲より物凄く、新手の兵を加へ、我を二重三重に包圍して、漸次包圍圈を縮少して來た。彼我の銃砲聲は間斷なく、陣地は共に硝煙と砂塵に遮られ、其の判別さへもつかなくなつた。

斯くして激戰はつゞけられたが、彈藥、糧食の補給も絶えてしまつた。それは、敵の重圍下

に陷り、其の途を斷たれたからだつた。

「斯うなれば、一本の銃劍と、互ひの肉彈あるのみだ。日本軍人としての、最後を飾るんだぞ。いゝか。」斯う言ひ終つた軍曹は、分隊員に突擊の號令をかけ、先頭に立ち、刀を揮つて突き進んだ。と此の時、敵の機銃彈が、軍曹の胸部に命中して、堂と打ち倒れた。

「殘念ッ……進め……進め。」と、最期まで叫びつゞけ、壯烈の戰死を遂げたのだつた。

一聲で十倍の敵を走らす

七月二十七日夜の二時、我が三浦部隊は、フイ高地の敵に向つて、猛攻擊を開始したが、草原の夜は、白夜のために、既に東が白んだのかと思はれる明るさだつた。時の經つにつれ、戰は激烈となり、夜明け頃になると、彼處でも此處でも、猛烈な手榴彈戰が演ぜられた。

此の時加藤德三一等兵（秋田縣秋田郡脇本村脇本出身）は、分隊長の突擊命令を耳にするが否や、眞先に敵陣に躍り入り、敵を突き伏せてゐる時、敵の一彈が、冠つてゐた鐵帽をグワンと敲いたかと思ふと、半分持つて行かれた樣な氣がした。

「やりやがつたな。」と言ひながら、頭に手をやつて見たが、擦過傷一つ受けてはゐなかつた。

「おやつ、變だぞ。俺の頭は石頭かな。」と、敵彈降る中で獨り笑ひながら、今突き殺した敵

の鐵帽をとつて冠ると、直ちに第二線に前進した。

敵も頑强に抵抗を試みたが、約二時間の後、遂に分隊は、敵の第二線の一角に突入して、陣地を確保することが出來た。見れば分隊長以下僅かに四名、勿論其の中に、敵の鐵帽を冠つた、加藤一等兵も交つてゐた。

「なんだ、たつた四名きりか。」分隊長は呆れて言つた。

「分隊長殿、敵はたしかに四五十名は居りましたが、突込んだ時、いきなり一人を突き殺して、二人目を探した時は、もう逃げてしまつて、一人もゐなかつたんであります。あつはゝゝゝゝは。」加藤一等兵は、敵の鐵帽の下から、大口あけて笑つた。

此の時、一旦退却した敵が、寡兵と氣づいたか、俄かに盛返して逆襲して來た。

「友軍の後續隊が到着するまでは、どんな事があつても此處を守るんだぞ。」と、分隊長は部下を激勵しながら、壕の中に這入り、四名が適當の間隔をとり、一發々々、沈着に射擊を加へた。敵は少數と侮つてゐるため、奇聲をあげて迫つて來る。百米……五十米……三十米……全員戰死と觀念してゐた時、友軍の前進だ。敵も近づく、友軍も近づく。

「敵三十名、陣前三十米……。」壕の中から突如立ち上つた加藤一等兵は、近づいた友軍に向

つて大聲で叫んだ。其の聲を聞いた友軍は、ドッと喊聲をあげた。敵は友軍の喊聲を聞くと、急に足並が崩れ、退却をはじめた。すかさず分隊長の突擊命令に、加藤一等兵を先頭に、四名は壕から躍り出し、十倍に近い敵に向つて追擊した。

いま一足で、敵の中へ突つ込まうとした瞬間、先頭きつてゐた加藤一等兵が、ばつたり倒れた。他の三名は「あつ。」と叫んだが、手當をしてゐる餘裕が許されない。片手拜みに追擊をつゞけた。

敵を追ひ散した後、三名がとつて返して見ると、彼は眞正面から鐵帽を射貫かれたが、其の彈丸が鐵帽の中をグル〳〵廻つたものか、耳の上を貫通したのみでなく、頭中傷だらけだつたが、それを手拭でしつかと縛つて戰死をしてゐた。それは追擊のときに射たれたのでなく、以前の突擊の時に射たれたのを、人知れず手拭で縛つて假手當をして、其の上に鐵帽を冠つて、突擊にも追擊にも參加したのだが、追擊に移つた時、精根も盡きて、途中で倒れたのだつた。

「加藤、よく頑張つたなア、お前があの時怒鳴らなかつたら、我々四名は全滅して、陣地は敵に奪はれてゐたかも知れなかつたぞ。」と、分隊長は、彼が受けた數知れぬ傷に、涙を注ぎながら言つた。

分隊長の氣魄肉彈となる

明けて二十八日の夜、〇〇部隊〇隊の陣地に、敵が柄にもない夜襲を企てゝ來たので、忽ちこれを擊退したが、夜明と共に、左右から機關銃を猛射しながら、再び逆襲して來た。勿論側射を浴せておいて、我方が氣をとられてゐる際に、正面からドッと襲ひかゝらうといふ、手の見えた戰法なのだ。果せるかな、正面から新手の部隊が現はれた。

「あつはゝゝゝゝ。そら見ろ、來だバイ〳〵。」

大口開いて、笑ひながらお國言葉で言つたのは、江藤德二上等兵（福岡縣浮羽郡御幸村朝田出身）だつた。彼は一睡もしてゐなかつたが、至つて元氣だつた。

「ヨカ〳〵、いくらでもやつて來るがヨカ、片ッ端からやつつけるケン。」口でこそ何氣なく言つても、心の裡には早くも期するところがあつた。

「中本、俺がやられたら、お前が指揮をとれ、かうなつたら、分隊長ががつしり分隊を掌握しとらんといかん。此の分隊から、味方の陣が破れたなんてことになつたら、死んだ戰友にすまんケンノウ。」傍にゐた、戰友中本初雄上等兵を顧みて言つた。

「よし、お互ひにしつかりやらう。」と答へ中本上等兵は持場についた。と直ぐに、「分隊長殿しつかりして下さい。」といふ聲が、銃砲聲の中から聞えて來た。「おやッ。」と思つた中本上等

兵が、壕を傳はり、聲のした方へ來て見ると、何といふことだ。たつた今誓ひ合つて別れたばかりの江藤分隊長が、下腹部に三發の敵彈貫通銃創を受け、血潮にまみれてゐたではないか。

「江藤、やられたのか。」と、聲をかけると、彼は平常と少しも變らぬ聲で、

「大した事ぢやナカ、心配するな。持場について呉れ、離れたらやられるぞ。持場にさへついて居れば、一人になつても陣地は頑張り通せる。早く持場にかへれ。」聲もたしかだ。意識も明瞭だが、眼は閉ぢたまゝだつた。

「江藤、しつかりせんか、傷は大した事ぢやないぞ。」と言ひながら、彼の肩に手をかけて勵ました。しかし、それは所詮慰めの言葉に過ぎなかつた。致命傷だといふことは、誰の眼にも一眼で判る重傷だつたのだ。

「中本、もうそんな慰めを言つて呉れるな。賴むぞ、先刻言つたやうに、いゝか、後はたのむぞ。九州男子の面目にかけて、ウンと頑張つて呉れ……中本、まだ其處にゐるのか、早く持場にかへつて、分隊の指揮をとつてくれ。」

「よし、判つた俺が代つて仇は討つぞ」

さうしてゐる間にも、敵は漸次迫つて來た中本上等兵は、彼に末期の水を飲ましてやりたい

と思つたが、もうさうしてゐる餘裕がない。

「江藤、水を飲ましてやりたいが、もう其の暇がないから許して呉れ。」言葉を殘して、中本上等兵は持場に還り、分隊員を指揮して、迫つて來る敵に猛攻を加へた。

「お……い、江藤分隊、頑張れよ……一歩でも持場から離れるな。」斷末魔ではあるが、まだはつきりとした、力のこもつた江藤分隊長の聲だ。

「おう、頑張つチョル、頑張つチョル。」戰友は、彼のお國言葉で答へた。

「有り難いぞう……江藤分隊、頑張れ。」「頑張つチョル、頑張つチョル。」

互ひに呼び交してゐた。

「おい、あの江藤分隊長の氣魄をうけついで、しつかりやれ。」と、分隊員を勵ますのは、中本上等兵だつた。「江藤分隊……頑張つてくれ。」まだ銃砲聲の間々に、彼の聲が聞えてゐた。

其の聲に、分隊員の志氣は昂まつた。勇氣は正に百倍した。擊退したかと思へば、また盛り返して逆襲する。手榴彈を投げて擊退する。斯うした激闘が、數十分間つゞけられたが、其の間後方から、江藤分隊長の、「江藤分隊頑張れ。」の聲が絶えず聞えてゐたが、聲は次第に細つていつた。

「大分弱つたらしい。水を飲ましてやりたいが、今はそれが出來ないから、切めては末期の水の代りに、我々が敵の中に突込んでゆく、喊聲を聞かしてやりたい……江藤、それで勘辨して呉れ。」と言ひながら、此の時既に半數になつてゐた分隊員を引つさげて、敵に突入する機を待つた。

敵はまた攻擊態勢をとつて、正に迫らうとした。「今だツ、愚圖々々してゐると、手榴彈がなくなつてしまふ。」と考へた中本上等兵が、心に決めて距離をはかると、彼我の間は僅かに三十米だ。此の時後方から、

「天皇陛下萬歳……天皇陛下萬歳。」

と叫ぶ、江藤上等兵の聲が聞えて來た。同時に、「江藤分隊……突擊ツ。」逞しい中本上等兵の號令に、生き殘る分隊員は、喊聲と共に壕から躍り出した。この時三回目の「天皇陛下萬歳」と叫ぶ、江藤分隊長の聲が、此の突擊分隊と共に進むやうに追ひかけた。

中本上等兵以下、敵の中に突入して、凄じい白兵戰を演じ、遂に敵を退却せしめた。

「おい、突き殺したゞけの敵の鐵帽を持つて往け。」と、中本上等兵は隊員に命じ、敵の鐵帽を持つて、陣地に凱歌をあげた時は、既に江藤分隊長は息を引き取らうとしてゐたが、正しく

東の方に向いてゐた。

「江藤、やつたぞ。君に誓つた通りやつたぞ。俺たちが、敵の中へ突つ込んでゆく時の喊聲を聞いたか、君が最後まで勵まして呉れたお蔭だ。江藤、これは君の分隊が、敵の中へ躍り込んで、突き殺した敵の鐵帽だ。他の分隊員も見て呉れ。」と言ひながら、持つて來た敵の鐵帽を江藤分隊長をはじめ、戰死した分隊員の遺骸の前にずらりと列べ、生き殘つた分隊員一同の手から、殘つた水筒の水を一滴づゝ、其の唇を霑してやつた。

敵戰車に體當り　ホロンバイルの大草原が、哈爾哈河に阻まれて丘陵をなしてゐる。そこがバルシヤガル高地なのだ。此の方面に陣地を占領してゐた〇〇部隊に向つて、敵は七月三十日の午後から、重砲、曲射砲、迫擊砲などの火砲掩護の下に、猛然逆襲を企てゝ來た。其の兵力は正に我に數倍する優勢、殊に火砲を主力とする機械化部隊なのだ。火焔放射器を備へた戰車群、間斷なく射擊する戰車砲彈、それ等を恃み、地理に明るい敵歩兵が、匍匐しながら進んで來る。火器の上からするも、兵力の上からするも、我は彼に比べて物の數ではなかつたが、戰ひは單に兵器の數のみではない。また兵の數によつてのみ決せられるものではない。意氣だ精神だ、正に戰へば必ず勝つところの皇軍魂だ。

敵彈は草原の形を改めた。聽覺は痲痺してしまひ、たゞガー〳〵と耳が激しく鳴るばかりで、爆煙と砂煙のために、視界も遮られ、眞赤に灼熱した砲彈の破片が、ヒユン〳〵と飛び散るのが、あだかも夜空に揚がる煙火のやうだつた。

此の凄絶極りない激戰の中にあつて、〇〇部隊長は、次々に適確な命令を下し、敵に攻擊を與へてゐたが、これまでは約五百米乃至千米の距離にあつて、猛射を浴せてゐた敵戰車が、突如鋼鈑を唸らせながら、我が陣地に向つて進擊を開始した。我を寡兵と侮り、一揉みにしようといふ、猪口才な作戰なのだ。

其の戰車の蔭から、敵の步兵部隊が、小銃を射つて迫つて來る。四十米、三十米……戰友は相踵いで倒れていつた。

「內田分隊は、敵戰車を肉迫攻擊すべし。」

命は下つた。肉迫攻擊、それは肉彈を以て敵戰車への體當りなのだ。

「內田分隊前進ッ。」と、逞しい號令をかけたのは、內田正之伍長（福島縣西白河郡矢吹町出身）だつた。聲の下から躍り出したのは、大君の御ために、捨つる生命がなに惜しからうと、張りきつてゐた隊員、何れも手には戰車地雷を引つ掴んでゐた。

この肉迫攻擊班の勇士を發見した敵は、これに集中火を浴せた。分隊員は彈幕を潛り、敵戰車へ肉迫して、草原の草に身を伏せた。

「名塚、あの戰車をやつゝけろ。」內田分隊長が、名塚上等兵に指示した。

「よしッ。」と答へた、同上等兵は、ガバと起ち上つて手をさつとあげた。敵戰車の一臺に向つて、彈丸の如く肉迫して、拜むやうな姿勢で、持つてゐた戰車地雷を、履帶の下に挿し込んだ。瞬間見事に爆發して、履帶は飛び、敵戰車は砂を噛んで右に傾むき、擱坐してしまつた。

名塚上等兵はと見れば、爆破の衝動と爆風のために、右側腹に喰ひ込んだ破片のために、夥しい出血に、軍衣を眞紅に染めて倒れてゐた。

この時、第二の敵戰車が猛進して來た。それと見た彼は、「此の野郎ッ。」と叫び、再び身を起して五六步前進した刹那、戰車よりする十字火のために、腹部を射貫かれ堂と打ち倒れた。

「名塚、よくやつた。しつかりしろ、後は俺がやつゝけるから見て居れ。」と、聲をかけたのは內田分隊長だつた。

分隊長は、敵の猛射の中にあつて、機敏に攻擊指示をしながら、自分も敵戰車に挑みかゝり、

次々に殘る二臺の戰車も擱坐させてしまつた。それを見てゐた名塚上等兵は、苦痛の中にも、「ばんざアい。」と叫んだが、其のまゝ意識が朧朦となつていつた。やゝあつて、彼は失ひかけた意識を取り戻し、頭を擡げて四邊を見廻してゐたが、直ぐ附近に、二人の戰友と、最も信賴してゐた內田分隊長とが、周圍の草を血に染めて倒れてゐるのを發見した。

「あつ、分隊長殿ッ。」と、彼は己れの重傷も打ち忘れ、砂漠の草に縋り、砂を摑んで這ひ寄り、にじり寄り、分隊長の死體に兩手をかけた。分隊長は、戰車砲彈の破片を頭部に受け、壯烈の戰死を遂げてゐたのだつた。

「分隊長殿……名塚であります……分隊長殿……敵戰車はみんをやつゝけました。しつかりして下さい。」と、勵ます彼が、既に氣息奄々たるものだつた。

「分隊長殿、駄目でありますか。一緒に靖國神社へ行きませう。」

彼は分隊長の兩手を、しつかと握つたまゝ、戰死した分隊長を庇ふやうに、折り重なつて、バルシヤガル高地の華と散つたのだつた。

三名の剛勇四十の敵を走らす　越えて八日、ミツボサ高地に據つて、頑强に抵抗してゐた敵に猛攻を加へ、これを奪取した山形部隊後藤隊の正面に、敵は黎明を期し、猛烈な砲擊

を開始し、中にも迫擊砲彈は、彼處に此處に落下、これに掩護された敵步兵は、猛然と前進して來た。

此の時南等上等兵（鹿兒島縣伊佐郡本城村出身）は、傍にゐた戰友二名に向ひ、「おい、手榴彈を叩きつけよう。」と合圖を交し、矢庭に前進して、進んで來る敵に手榴彈を叩きつけた。それが爆發したのを見て、三名はまた前進して伏せ、次の手榴彈を投げつけた。

敵は僅かに三名と侮つて、いよ〳〵迫つて來た。三名は手榴彈を投げては進み、進んでは叩きつけ、敵との距離僅かに十二三米にまで近づいた。其の時敵は壕の中にゐて射擊してゐた。

「おい、今度投げたら、同時に敵のあの壕の中に飛び込むんだぞ。」といふ、南上等兵の言葉に、他の二名もうなづいた。次の瞬間、手榴彈は飛んだ。同時にそれが敵の壕の中で爆發した。その爆音を合圖に、三名は直前敵の壕の中に、「ワアッ。」と叫んで躍り込んだ。

驚きあわてた敵が、逃げようとするのを、背後から一名をグザと刺し殺した。そいつを踏みつけ、他の一名を追はうとした時、七米ほど右の方から、友軍の指揮班に向つて、今正に手榴彈を投げようとしてゐる敵を發見した。

「この野郎ッ。」と叫びざま、壕からとび出した南上等兵は、躍りかゝつて銃劍を突き出した。

この時敵は體をかはし、反對側の壕の中へ轉がるやうに飛び込み、身を屈めて逃げようとした。

三名は淺い壕から、半身を曝しながら、其の敵を追ひ廻し、遂に銃劍で背中からグザと砂地に縫ひつけてしまつた。更に他の一名が飛び出して、逃げようとして、躓いて倒れた處を南上等兵が突き刺した。

側方から攻撃してゐた〇〇隊からは、南上等兵のこの働きが、手にとるやうに見えたので、この時ドツと歡聲があがつた。反撃を企てゝゐた敵も、この三名の剛膽無比の振舞に怯氣づき悉く逃げ出してしまつた。

南上等兵は、戰友三名を促し、鹵獲した二挺の小銃を擔ぎ、壕から出ると、友軍からは萬歳の嵐を送つて迎へた。それに應へて、同上等兵も、「萬歳。」と叫びながら、鹵獲した銃を高く上げた。この時、逃げながら射つた敵の一彈は、南上等兵の頭部を貫き、彼は銃を持つたまゝばつたり倒れた。

「どうした……しつかりしろ。」戰友が駈け寄つた時、彼は倒れたまゝ、鹵獲した銃をさし上げ、「萬歳。」と微かに唱へ、壯烈の戰死を遂げたのだつた。

小隊長の報告によつて、後藤隊長が駈けつけた時は、既に絶命してゐたが、其の面には、さ

も滿足氣に湛へた、微笑さへもが見えた。

「南、よくやつてくれた。」後藤隊長は、冷たくなつてゆく、彼を抱き起し、靖國の社への餞の言葉を與へ、面に熱い涙をそゝぐのだつた。

因みに同上等兵（後伍長）は、出動にあたり、故國の兩親、姉妹にあて、書簡箋に墨跟あざやかに認めた、遺言狀を送つてゐたが、それを見ても、其の覺悟の程が窺はれる。遺族より著者に示された、同上等兵の遺書には、

「七度起キテ國ノタメ報ジマス　御兩親樣此ノ私ノ出征ヲ欣ンデ下サイマスデセウ　再ビ國境警備ノ重大使命ニ基キ某處ニ出動致シマス　私ガ若シ戰死シタラ立派ナル名譽アル軍人ノ本分ヲ充分盡シマシタ事トホメテ下サイ

御兩親御身大切ニ

永ク靖國ノ社デ面會出來ル如ク長生ヲ願ヒマス

御兩親樣

更に白の角封筒の表に、「姉上へ、妹へ」と認めた一通には、

「昭和ノ女性トシテ强ク生キナサイ　兄ハ護國ノ鬼トナリマス　銃後ノ女性ノ本分　護國ノ

勇士ノ妹　目而ヲ全シテ下サイ

とあつたが、著者も其の遺書を見て、今更の如く當時が偲ばれ、思はず合掌したのだつた。

敵戰車群を粉碎した人間彈丸

ガア……ガア……鐵鋼鈑を唸らせて迫つて來た、數十臺の敵戰車群は、我方の陣地の到るところに、蹂躙を企てたのだ。それと見て我が〇〇砲は、猛烈に火蓋を切つた。彼我の銃砲聲は、草原の空を壓し、敵戰車の迫る轟音は、千里の砂漠を震撼した。

敵は我が〇〇砲の猛射手强しと思つたか二手に別れ、一群は〇〇砲の陣地へ、他の一群は國崎部隊萬隊の正面に向つて驀進して來た。〇〇砲の陣地に向つた一群は、一發必中の〇〇砲の巨彈を浴びて、片ツ端から黑煙をあげて炎燒或は擱坐、其の大部分が擊滅されてしまつた。と間もなく、〇〇砲の射擊がぴたと止んだ。萬隊の正面に向つた一群は、刻一刻と近迫した。

「友軍の〇〇砲陣地へ傳令ッ。」萬隊長は、直ちに傳令を走らせ、正面から〇〇砲の攻擊を求めたが、やがで傳令が齎した報告は、「〇〇砲は既に全彈射ち盡し、殘彈なし。」といふのだつた。

〇〇砲が沈默したのは、砲彈を射ち盡したがためだつたのだ。敵は萬隊の防禦手薄しと見縊つて、速力を落しながら、猛射を浴せて來た。全速力を以て走つてゐる戰車からの射擊は、戰車自體の動搖のために、命中率は不確實だが、停止するか、或は速力をぐつと落すかしての射擊は、猛烈な威力を發揮するものである。そのため敵戰車からの射擊は、彈着が正確になつて、我が萬隊の陣地を脅かしたのだつた。

百五十米……百三十米……じり〳〵と迫つて來た敵の戰車群、我が方の陣地では、敵彈のために、傷つき倒れるもの相踵ぎ、文字通りの苦戰に陷つた。

「肉迫攻擊だ。」と、下唇を嚙み、悲壯の決意をしたのは、第一小隊長村川中尉だつた。「肉迫攻擊班待機……。」轟く砲聲の中に、中尉の聲は凛として響いた。聲の下から進み出たのは、かねて準備しておいた肉迫攻擊班員、即ち原田敏雄軍曹（北海道旭川市三條二十三丁目出身）を長として、第一組長平田正禮軍曹（樺太名好郡北小澤出身）第二組長中村弘上等兵（北海道上川郡名寄町字名寄太九線東六七出身）相馬光榮上等兵（北海道天鹽郡幌莚村大字沙流村出身）吉田茂一郎上等兵（秋田縣南秋田郡脇本村字脇本出身）菊池勝次郎上等兵（北海道上川郡和寒村字日ノ出二七〇出身）の六名だつた。

「機甲か肉彈か、しつかりやるんだぞ。」と、原田軍曹が叫んだ。待機した攻擊班員は、息を

殺して前方の敵戰車を凝視た。各自の手には、碎けよとばかり、火焔瓶が握られてゐた。其の肩にも、腕にも、いや全身に逞しい躍動が見える。

「前方より迫る敵戰車に對し、攻擊前進。」號令の下に、勇士はぱつと躍り出した。敵戰車からする彈雨の中を潜つて……と、此の時、第一小隊の後方に待機してゐた〇隊の指揮班から、いきなり躍り出して、此の攻擊班に加はつた勇士があつた。それは、勇壯そのものゝ如き、此の肉迫攻擊班の突進に、全身の血潮を沸らせ、躍動する魂を抑へ切れなくなつて、獨斷で飛出した宮野上等兵（北海道旭川市三條通十八丁目出身）だつた。

敵戰車は、此の攻擊班に向つて、集中彈を浴せたが、一同は身を伏せ、匍匐しながら敵戰車に肉迫した。「おい、お互ひにぬかるな。」と勵まし合ふ。敵戰車は一同を粉碎すべく、不氣味な無限軌道の響きを立てゝ迫つて來る。先頭は宮野上等兵だ。敵戰車との距離僅かに五六十米となつた。此の時同上等兵はとある凹地を利用して、ぴつたり伏せた。火焔瓶を持つた右手には、全身の力がこめられた。敵戰車は四十米……三十米……二十米にまで近づいて、同上等兵が伏せてゐる、凹地に近く十五六米にまで迫つたが、同上兵等が凹地に伏せてゐるのを發見したか、急回轉をしようとした。「野郎ッ。」と叫んだ同上等兵は、タタタタッと駈け出したと見

るや、力まかせに敵戰車に叩きつけた。失敗、殘念にも發火しなかつた。「しまつたつ。」と叫んだ彼は、腰にさげてゐた戰車地雷をとるより早く、その戰車の軌道の下に投げ込んだ。ダーン……轟然たる響と共に、敵戰車はグラ〳〵と傾いた。

「占めた。」といふなり、敵戰車に飛乘らうとしたが、敵戰車は彼が投げた戰車地雷のために、一方の軌道を失つたが、殘つた一方の軌道だけで、クル〳〵廻りながら、砲塔からは彼を目蒐けて、手榴彈を投げる、拳銃を亂射するして、彼を近づけまいとした。彼は其の集中火の隙を覘ひ、ぱつと身を伏せた。

續く勇士も、それぞれ敵戰車に迫つた。それを發見した敵戰車は、陣地攻擊を中止して、專ら攻擊班に向つて、戰車砲彈を集中した。吉田上等兵は、砲彈の破片で頤に重傷を負ひ、相馬上等兵は、左腕に擦過傷を受けた。かうして戰友が傷つけば傷つくほど、肉迫攻擊班の攻擊精神は、ます〳〵昂まるのだつた。中にも吉田上等兵は、頤から流れる血のために、上半身は眞赤に染められたが、それにも屈せず、右から二臺目の敵戰車に迫つた。他の戰友が、「危いッ。」と思つた瞬間、彼の手から火焔瓶が飛んだ。火焔瓶は敵戰車にあたり、碎けて四散したのみで發火しなかつた。

「駄目だつたか。」と叫び、今度は戰車地雷を、其の戰車の右側の軌道の下に敷かうとした。敵戰車は危險と見たか、急に右に蛇行して逃げた。「逃がすものか。」と、追ひかけて行つた吉田上等兵は、右の軌道下に投げ込んだ。ダーン……敵戰車は一踊り踊つて傾いた。「萬歳……。」上田上等兵は歡聲をあげた。

敵戰車からは、手榴彈や拳銃を以て、一歩だに寄せつけまいとする、上田上等兵は死角を利用して身を伏せて待つた。あたりは一面短かい草に蔽はれた砂地だ。其の砂地にもぐり、草を揉み潰しながら、敵戰車は傷ついた野象の如く荒れ狂ふのだつた。

左腕に負傷してゐた相馬上等兵は、戰車地雷は、砂地のためにめり込んでしまひ、不發に終るといふことを知つたので、持つてゐた圓匙の上に地雷を載せ、腹這ひながら敵戰車の近づくのを待つうちに、一臺の敵戰車が同上等兵の待機してゐる側を、すれ〳〵に通過して行く。「よしッ。」と思つた上等兵は、戰車地雷を載せた圓匙の柄を持つて、ぐつと前へ差し出し、無限軌道の下にすつぽりさし込んだ。と、次ぎの瞬間、グワン……耳を聾するばかりの大音響と共に、地雷をさし込まれた軌道は、完全に破壞されて天空に飛散つた。

「うまくやつだぞ。」と言ひながら、駈けつけたのは、附近に待機してゐた菊池上等兵だつた。

「うむ、萬歳だ……往かう。」相馬上等兵と、菊池上等兵は、忽ち其の戰車に飛乘り、砲塔をこぢ開けると、中から敵の乘員が、拳銃で應戰して來た。「此の野郎ッ。」と、忽ち刺し殺し、突き殺し、完全に戰車を叩き潰してしまつた。

「萬歳……。」二人は破壞した敵戰車の上で、感激の歡聲をあげたが、此の時左から二臺目の戰車が、五六十米遲れながら、攻擊班に猛射を浴せながら驀進して來た。攻擊班の勇士を、其の軌道下に蹂躙しようといふ、小癪な態勢だ。

「全員、あの戰車をやつけゝろ。」原田軍曹は腹這ひながら叫んだ。攻擊班員は、火焔瓶を握り直して息を殺した。敵敵車は迫つて來た。巨軀は眼前に現はれた。此の時原田軍曹の右手がさつとあがつた。と火焔瓶は敵車にあたつたが、碎けたのみで發火しなかつた。

「殘念……。」と叫んだ軍曹の聲の下から、第一組長の平田軍曹が、パツと身を躍らしたかと思ふと、左の軌道下に戰車地雷を突込んだ。見事に奏效、一大音響と共に、敵戰車は擱坐してしまつた。兩軍曹と近くに待機してゐた第二組長の中村上等兵は、いきなり起ち上り敵戰車に飛乘り、攻擊を加へようとした。その時擱坐した敵戰車から飛出した敵兵三名が、拳銃を亂射して迫つて來た。「小癪な。」「野郎ッ。」と口々に叫び、片ツ端から刺し殺し、硝煙の中に萬歳

を叫んだ。

然るに上田上等兵が攻撃した戰車は、まだ一方の軌道を利用して、ぐる〳〵廻轉しながら、猛射を浴せて來る。「畜生ッ、まだ射つてやがる。あいつを徹底的にやつゝけろ。」と叫んだが、その時は既に火焔瓶も戰車地雷もなかつた。急速度を以て回轉してゐる、敵の戰車の速度の緩むのを待ち、「よし、俺がやつけてやるッ。」と、菊池上等兵が飛出し、いきなり戰車に飛乘り、其の砲塔に手榴彈を叩きつけた。手榴彈は見事命中、轟然炸裂したが、分厚の戰車の鐵甲のこと、四散して何の效果もなかつた。

この時、友軍の陣地から、ダーン、ダーン、射ち出した砲彈が、狂ふ敵戰車を目がけて落達しはゞめた。それは肉迫攻擊班の勇敢其のものゝ攻擊を、傍觀してゐられなくなつた友軍が、掩護の巨彈を送つたのだつた。

斯くて敵戰車群を潰滅せしめ、敵の後方攪亂の企圖を叩き壞し、光輝ある軍旗を完全に死守し、全員相擁して泣いて喜んだ。

人情鬼大尉の突擊　八月十七日、國崎部隊の辻隊の陣地では、ドッと歡聲があがつた。それは、此の日補充員が到着したからだつた。

隊長辻紀一大尉（福岡縣京都郡今元村大字沓尾五五出身）は、豫ねて人情大尉を以て部下から畏敬されてゐただけに、多くの部下が、敵彈のために殪れたので、夜襲を以て敵を屠り、部下の仇を討たねばならぬ——と斯う思ひ、再三夜襲敢行を具申したが、補充完了するまではといふので許されなかつたが、今補充員は配備され、念願の夜襲も許されたのだつた。

翌十八日を猛襲の日と定め、其の夜は羽迫少尉以下五名が、將校斥候として敵陣深く潛入して、其の報告をもたらしたので、着々と準備を進めた。戰友の仇討が出來る——勇士の意氣は正に天を衝き、滿を持して翌日を待つた。

明くれば十八日、この日ホロンバイルの空は朝のうちは晴れてゐたが、天佑といはうか、正午過ぐる頃から雨雲に覆はれ、小雨さへも降り出した。此の分でゆけば、今夜こそ絶好の夜襲日和だと、勇士達は腕をさすつた。

やがて隊長を中心に早目の夕食を喫し、訣別の酒を酌み交し、日の暮れるのを待つた。兎角するうちに、草原に夜の帷が垂れる頃となつた。隊長は部下一同を集めた。

「我々は軍籍に身を置いた時から、生命は御國に捧げたものだ。これまで、既に數十名の戰友が、此の滿ソ國境を護る礎となつて、皆の見る通り、一本の假墓標の下に、務めを果して安ら

かに、靜かに眠つてゐる。辻隊は最後の一人となつても辻隊だ。現在生き殘つて戰ふ我々としては、この亡き戰友の墓前に、露助の首を一つ一つ供へなければならぬ。軍人は何を爲すにも、凡てが突擊に對する準備なのである。お前達が入隊した時、俺が士官學校に入學した時、共に突擊準備だつたのだ。飯を食ふのも突擊準備だ。これまで準備に準備をして來た突擊は、今目前に迫つてゐる。日頃磨き上げた腕前を發揮して、充分に戰つて呉れ。」と、諄々と說き來り、說き去る軍人精神、常に大尉の訓話は、單なる言葉のみでなく、大尉の魂から迸しる何ものかがあつて、親しみのうちに威嚴があつたが、今此の最後の此の訓諭には、更に一層の迫力と、そして言ひ知れぬ慈愛とがこもつてゐた。從來の部下は勿論、新たに補充されて來た兵も、言ひ知れぬ心の餘裕が出來て、「此の隊長の下に、吾々は笑つて死ぬ。」と、心に强く誓はしめたのだつた。

「トーチカを、心臟で陷す辻部隊。」と誰やらが言つた。「吾々は、魂でやる、肉彈でやつつける。」と心に叫んだ。

準備完了、いよ〳〵小雨を衝いての、隱密肉迫は開始された。不氣味な沈默のうちに、隊長辻大尉の持つた手旗が、闇の中に見えるばかりで、空を切る音が微かにはた〳〵と聞える。目

ざすは、敵が頑强に抵抗をつゞける、「赤山」「砂山」の陣地だ。距離は刻一刻に縮められ、秒一秒と肉迫した。

この時、シュウ〳〵、シュウ〳〵と、尾を曳いて飛んで來た曳光彈が、眼の前でパツ〳〵と炸裂した。我が警戒兵が、敵に發見されたのだ。「もうこれまでだ。」と大尉は思つた。同時に「突込めッ。」の聲は裂帛の如く、闇の中に響いた。

部下は鬨をつくり、闇を縫ふて突擊を敢行した。敵の銃火を潛り、炸裂する手榴彈を避け、突進するさまは、あだかも草原に起つた一大暴風の慨があつた。

「進め、進め。」と、部下を激勵する大尉は、いつも先頭をきつてゐた。右手に持つた二尺七寸の業物は、闇の中に閃めいた。敵は此の不意の夜襲に周章狼狽、其の中に大尉を眞先に、無二無三に斬り込んだ。突つ込んだ。斬りまくつた。突きまくつた。

斯くして、「赤山」の敵陣を屠り、忽ちこれを占領した。

「萬歲……萬歲……。」歡聲の聲も終らぬ間に、息をも吐かせず、更に第二陣「砂山」への突擊なのだ。

敵は周圍の高地高地から、今奪取された「赤山」を包圍して、銃砲彈の亂射を浴せる。其の

敵の悉くが、赤山を目標としてゐるのだから、大尉の部下は次々に殪れていつた。

「皆よくやつてくれた。生き殘つたものも、俺と一緒に死んで呉れ。あの砂山を遮二無二占領しなければ、犠牲者を多く出すばかりだ。」

大尉が爆煙の中から叫べば、部下も亦爆煙の中から、「隊長殿、砂山を早くやつつけませう。」と口々に叫んだ。

大尉が「續けッ。」と、血の滴る大刀を翳して進めば、部下は「戰友の恨みを晴せ。」「隊長殿におくれるな。」と、叫び交してそれに續いた。正に偉大なる一塊の肉彈と化した辻隊は、突風の如く「砂山」の敵陣に殺到した。

機甲のみを恃む敵は、此の突擊に面喰つた。「ウアッ。」といふ聲と共に、敵陣に躍り込んだ時、敵の中には呆氣にとられ、逃げることさへ出來ず、一縮みに縮み上つて、身を慄はせてゐる者すらあつた。

大尉は當るを幸ひ、斬つて斬つて斬りまくつてゐたが、壕の一隅に潜んでゐた敵のために、左肢關節を不意に突き刺された。「うぬッ、卑怯な眞似をしやがる。」と言ひざまに、壕内に躍り入つて、忽ち五名の敵を斬り倒し、再び壕から出ようとしたが、重傷のため身の自由がきか

なかつた。

「隊長殿、御負傷でありますか。」と言ひつゝ、鰕名衛生上等兵が駈けつけて、假繃帶を施さうとすると、大尉は其の手を拂ひのけ、「俺は何でもない。他に澤山の重傷者がゐるのだから、其の方を早く手當をしてやつてくれ。」といふ大尉の言葉に、鰕名上等兵は、感極つて泣きながら、他の傷者の方へ走り去つた。

其處へ駈けつけたのが、三上衛生兵だつた。

「隊長殿、他の負傷兵の手當は、全部終りました。」「さうか。」大尉は大きく頷づき、漸く己の傷の手當を受けた。「隊長殿、露助の首を斬つて持つて行きませうか。」と、一人の部下が言ふと、大尉は手を振つて、「いや、それまでせんでもいゝ。死ねば何れも同じ護國の英靈だ。」といつて笑つた。

頑强に抵抗してゐた敵も、この猛攻に遭つて、一堪りもなく潰走、僅かに三時間足らずで、完全に「赤山」「砂山」の二陣を奪取し、臺上には感激の日章旗がひるがへつた。此の戰鬪に於て、迫擊砲五門、機關銃十一、チェッコ機關銃七、小銃七十五といふ、多くの鹵獲品があつた。

大尉は部下の集結を終り、部下に扶けられながら、負傷した部下を、一人々々見廻り、慈父が其の子に對するが如く、勵ましと劬りの言葉をかけるのだつた。

「隊長殿、中野中尉殿が、臨終らしいんであります。」と、慌しく一人の兵が知らせて來た。

「さうか……。」と頷づいた大尉は、憂色を面にあらはし、中野中尉の傍に近寄つた。中野中尉は、重傷のために殆んど昏睡狀態に陷つてゐた。

「中野中尉、しつかりして呉れ。貴官がよく戰つて呉れた勳功は、ノモンハン事件の戰史を飾り、永久に我が部隊の名譽として、消ゆることがないぞ。」さう言ひながら、手をさしのべて、中尉の手をしつかと握つた。この時、それまで昏睡狀態にあつた中尉は、靜かに眼を開き、大尉の顏をじつと見てゐたが、やがて、

「天皇陛下萬歲……辻隊萬歲……。」

と叫ぶと、がつくり打ち伏してしまつた。

「有り難う……有り難う……。」大尉は再び中尉の手を握りしめた。はふり落ちる涙は、硝煙と砂塵にまみれ、今は蒼ざめた中尉の面を洗ふのだつた。

劍豪上等兵の撫で斬り

辻隊が小雨そぼ降る中を、「赤山」「砂山」の敵陣に突擊を敢行

した時だつた。退却しては逆襲して來る敵を、

「畜生ッ、戰友の恨を晴らすは此の時だ。エイッ、エイッ……逃げるか野郎、エイッ。」と、鋭い氣合の聲と共に、ズバリ〳〵と撫で斬りにする上等兵があつた。それは京都武專出で、四段練士の肩書をもつた、濱田重隆上等兵（北海道留萌郡留萌町字留萌村瀨越通り七四出身）だつた。

隊長は名に負ふ人情鬼隊長、部下は最後の一兵までもと、決意に燃えた猛者揃ひだ。「赤山」の敵を突きまくり、「砂山」に向つて肉迫した時、辻隊長の後に、影の如く續いたのは、血の滴る大刀を引提げた、此の濱田上等兵だつた。

「砂山」からは、敵が滅茶苦茶に手榴彈を投げる。それが降るやうだつた。

「手榴彈が何だッ。」と叫んで、「砂山」に眞先かけて駈け上つた。それと見て敵の三名が、彼に向つて迫つて來た。

「やい、露助、辻隊に濱田あることを知れッ。」と叫ぶなり、瞬くうちに、斬り倒してしまひ、血刀を揮ひながら、じつと闇を透して見ると、凡そ三十米の地點に、砲を圍んだ敵の一群がゐた。「よしッ。」と呟やき、腰を落して敵に迫つた。敵はそれと知つて、手榴彈を投げたが、躍

り込むなり、「エイッ……エイッ。」と例の鋭い氣合だ。と敵兵二名が、殆んど同時に、重なり合つて倒れた。他の者は、上等兵一人と知ると、忽ちおつとり圍んだ。「エイッ……エイッ。」彼は當るを幸ひ斬り倒したが、斬つても斬つても、敵は雁首の代りを持つて迫つた。此の時、敵がさつと散つた。と背後から、「おゝ、濱田か……。」といふ聲がした。振返つて見ると、其處には同じく、血の滴る大刀を引提げて、隊長辻大尉が立つてゐた。

隊長に聲をかけられた、彼の勇氣は百倍した。

「隊長殿、見てゐて下さい。」といふなり、敵の中に飛び込んで、斬つて〳〵斬りまくつた。大方が片手に刀を持つて斬るのだが、彼のは兩手で刀の柄を持ち、悠々たる態度で拜み斬りなのだ。やがて頑強の敵も遂に退却して、完全にこれを占領した時、彼は刀の血糊を拭ひながら、「面白かつた。全く今夜のやうに氣持のよかつた事は生れて初めてだ。もつと斬りたいなア、突擊の快味は、一度味はつたら忘られない。今夜といふ今夜は、思ふ存分斬つた。突擊なら毎晩でもいゝ、あつはゝゝゝ。」體を搖つて高笑ひした。

「あの位斬れば、いくら日本刀でも、刃がこぼれたらう。」と戰友がいふと、彼は、「こんなものさ。」といつて、刀を突き出して見せた。「うむ、それでよく斬れたね。」「刀の刃は缺けても、

腕だけは缺けんからな、あはゝゝゝ。」と笑つてゐた。

此の辻隊の劍豪濱田上等兵も、其の後再三再四の襲擊に際し、例によつて勇戰奮鬪を續けてゐたが、遂に敵彈のために壯烈の戰死を遂げ、隊長及び多くの戰友と共に、靖國の社に還つたのだつた。

死の彈藥搬送　○○部隊が、優勢の敵の十字火に遭ひ、前進澁滯に陷つた時、この友軍の難關を打開するには、一に機關銃隊が、敵の狙擊機關銃を沈默せしむることにあつた。が、しかし、其の機關銃隊の彈藥が盡きかけたのだ。

「殘念だなア、彈丸不足だ。」と射手が叫ぶ。

「あるだけ射つて、あとは肉彈だ。」と、悲壯な叫びだ。「よしッ、俺がとつて來る。」と言ふなり、飛出したのは、木村辰夫一等兵（鹿兒島縣加茂郡川上村出身）だつた。敵の狙擊彈は、急霰の如く降つてゐた。「イの火點制壓、殘彈なし。」最後の一連を掴み出した射手は、無念の吐息をついた。

第一分隊の此の機關銃の響きがぴたと止ると、敵の「イ」の火點の重機關銃は、再び猛烈に射つて來た。しかも敵は新手の射手と代つたらしく、漸く其の彈着も確實になつて來た。

「畜生ッ、敵の彈藥の豐富なのには、まつたく癪にさはる位だ。」勇士達は、彈藥缺乏に、齒咬をしてゐる時、「畜生ッ、畜生ッ。」と怒鳴る聲が後方に聞えた。

「あつ、木村が彈藥箱を擔いで來たッ。」「ばんざアい。」歡聲をあげた。彼の姿は、逞しい塑像のやうだつた。「さア遠慮なく射つて呉れ。」と、彼が彈藥箱をおろすと、「いよう、有難う。」最後の一連を摑んで、口惜しがつてゐた射手は叫んだ。

此の時彼は、悠々とズボンを脱ぎはじめた。

「おい、木村、何をするんだ。大便なら暫く我慢しろよ。此の激戰の最中に、悠々とやる奴があるか。」と、分隊長は驚いて制しながら、今ズボンを半ば脱いだ彼の臀部を見て、「あつ。」と叫んだ。彼の臀部からは、動くたびに、鮮血がピュッ〳〵と噴き出してゐたではないか。

「木村、やられてゐたのか。それならなぜ早く言はんか。」分隊長は駈け寄つて、假繃帶を施してやつたが、彼は平氣なもので、顏色一つ變へてはゐなかつた。「よし、これでいゝ、直ぐ退れ。退つて手當を受けろ。」「分隊長殿、退るのだけは許して下さい。分隊長殿、考へても見て下さい。臀をやられたくらゐで後退が出來ますか、頭をやられたのなら見當がつかないが、臀では立派に敵の姿も見えるんであります。」「しかし其の傷ではお前、退るよりほかはあるま

い。」「なに大丈夫であります。まだ木村は充分歩けるんであります。臀も片一方で、まだ片方が滿足ですから。」「臀だから退れといふんだ。致命傷なら退れとは言はん。」「木村が退つたら、彈藥は誰が運びますか。」

「後のことは何とでもなる。心配することはない。」「木村は彈藥手であります。木村が退れば、彈藥が途切れます。たとへ負傷してゐても、今は此の木村一人でも必要な時であります。分隊長殿が何と言はれても、此の木村は退りません。」「命令だ、退れ。」命令の一語を聞くと、彼は默つて、恨めし氣に分隊長の顏を見てゐたが、急に眼をそらした。泣いてゐるのだ。彼は顏を反けたまゝ、ズボンを穿いた。「分隊長殿、木村は退ります。」と叫んで、傷の痛みもないものゝやうに、一散に駈け出した。後を見送つた、分隊長の眼にも涙が光つてゐた。

彼の姿が、後方の稜線の蔭に隱れてから、五六分も經つたかと思ふと、彈藥箱を擔いで、跛足を曳き〳〵進んで來る姿が、斜面にぽつかり現はれた。

「あつ、木村が……。」と、分隊長も呆れて見てゐると、彼は敵彈を避けるために、彈藥箱をおろし、それを曳いたり、押したりして、低地々々を擇んで、匍ひながら來た。彼は後退すると言つて、實は彈藥をとりに行つたのだつた。「おうい、木村、彈丸は先刻お前が補給したの

が充分あるから、急ぐことはない。姿勢を低くして來いよ、頭を下げろ、頭を下げろ、頭が高いぞ。」分隊長は、涙がこみ上げて來て、これだけの注意をする言葉が、やつとのことだつた。

其の聲を聞いた彼は、ちよつと片手を上げた。

「心得た。」といふ合圖なのだ。後退しなかつた事を叱られもせず、情のこもつた、分隊長の聲を聞いて、安心したものか、晴々とした顏で、分隊長の方を見た。ところが、後僅かに三十米の距離にまで來た時、敵の一彈が命中した。彼はばつたり倒れてしまつた。彼の肩のあたりから、血潮が噴き出した。

「しまつたッ。」と叫んだ分隊長が、彼を助けるべく、駈け出さうとした瞬間、倒れてゐた彼は、再び起き上り彈藥箱を引つ擔ぐと、凄まじい勢で、タ、、、ッと走り出した。そして壕內に飛び込み、彈藥箱をおろすと、いきなり分隊長がひろげた兩手の中に倒れ込んだ。

「彈丸……彈丸……。」と言ふ、彼の口から血が流れ出した。「木村、しつかりしろ、木村、よくやつた。お前の其の氣魄は、日本軍人の龜鑑だ。木村、お前は俺がしつかり抱いてゐるぞ。分隊長が抱いてゐるぞ。」分隊長は彼を抱きしめ泣きながら言つた。戰友は彼の背をさすりながら、「木村、偉いぞ。」「お前の魂のこもつた此の彈丸で、きつとお前の仇は討つぞ。」と、彼

を讃え、彼を慰めるのだつた。

連絡兵の肉彈突擊　敗退した敵は、再び着々と增兵しつゝあつたが、十九日になると、戰車數十臺、步兵約三千の優勢を以て、バルシャガル附近に陣地を占領してゐた、我が須見部隊、小林隊の陣地に向つて、猛烈な砲火を浴せて迫つた。

これに對して、我方は寡兵とは云へ、肉彈突擊を繰返し、其の度毎に敵戰車を炎上、或は破壞させること數十臺、けれども鐵甲に對するに肉彈の戰鬪だ。それだけに壯烈の極みであり、損害も亦刻々に其の數を增すのだつた。殊に第一小隊は、全員殆んど負傷して、苦戰以上の苦戰に陷つた。それと知つて太田一男上等兵（山形市地藏町一一一出身）は、自ら小林隊長に志願して、隊長直接の傳令として、敵彈亂れ飛ぶ中を、敵狀監視、各分隊間、中隊長との連絡に任じてゐた。

十九、二十日の二日間は、逆襲の敵を擊退して、二十一日となつた。此の日敵は早朝から、益々兵力を增强して、數十臺の戰車を以て逆襲、敵ながら侮り難い猛攻を試みて來た。激戰から激戰、逆襲の敵は優勢、それを擊退する我方の兵力は、あまりにも少數だつた。加ふるに大半は戰死傷してゐたのだつた。

午後二時、小隊長は最後の戰法として、生き殘りの部下を率ゐて、突擊を敢行すべく決意し、「突擊。」の號令と共に、刀を翳して突き進めば、部下も亦銃劍を擬して從つた。勿論傷ついた者も、苦痛を忘れ、戰友の突擊を聞いて、起つて進み、匍匐して進むのだつた。

此の時、太田上等兵は、重傷で倒れた戰友の銃を執り、「敵が何だ。」と叫び、戰友を駈け拔け、追ひ拔き進んだ。と、此の時、一名の敵が飛び出して來た。

「野郎ッ。」と忽ち突き倒し、つゞいて二名、三名、片ッ端から突き伏せた。一方隊長はと見ると、これまた軍刀を揮つて、群る敵を薙ぎ倒す。爾餘の部下も、必死の奮戰だ。其の勢に氣を呑まれた敵は、崩れ立つて、一旦敗走したが、一息つく間もなく、新手の兵を加へ、戰車を伴ひ、戰車砲彈、機關銃彈の雨を降らせ、猛烈に逆襲を企てゝ來た。

彼方に此方に、右に、左に、壯烈な戰死を遂げた戰友の屍が横はり、敵の死屍は山と積み、重傷者の呻く聲、倒れた戰友を勵ます聲、敵を罵る聲、しかも傷つき倒れた者も、草に縋り、砂を掴みつゝも、敵に向つて行くのだつた。

「畜生ッ、戰友の仇だ。」と叫んだ太田上等兵は、敵彈雨を冒して、一臺の敵戰車に肉迫した。と見る間に、サツトと手があがつた。持つてゐた火焔瓶を叩きつけたのだ。次の瞬間、敵戰車

は黑煙をあげ、焔を吐いて燃え出した。

「占めた。」と呟いた彼は、更に第二の敵戰車に向つて迫つた。そして、今正に火焔瓶を叩きつけようとした時、敵彈が彼の近くでダーンと炸裂した。「殘念ッ。」と叫びざま、彼はばつたり倒れた。全身に砲彈の破片傷を受けたのだつた。

「敵をやつつけろ……。」といふ聲は、微かではあつたが、彼の魂から迸しる叫びだつただけに、言ひ知れぬ力がこもつてゐた。此の一言が、彼が此の亂戰の野に遺した、最後の言葉だつた。彼の魂は、遠く故國の靖國神社に還つたが、彼が炎上せしめた、敵戰車から立ち昇る黑煙は戰野の空を蔽ほてゐた。

緑の繃帶で顏面を包んで奮戰

記錄は戻つて十九日、蒙古特有の大驟雨が、ノロ高地一帶を洗つて、颯と一過した。と、間もなく夜の闇が濃くなつた。敵の砲兵陣地も沈默して、戰野とも思はれぬ靜けさだ。こゝは仁科部隊の陣地だ。

「全員集合。」の中隊命令は、傳令によつて、壕から壕へ傳へられた。「スワこそ敵の夜襲か。」と、張り切つた隊員は、隊長の前に集合した。其處は廣い凹地の上に、霧が閉ぢこめてゐた。

「馬鹿に皆緊張してゐる處を見ると、集合をかけたので、敵の夜襲とでも思つたらしいな。實

は今まで話す積りでゐたが、其の折がなかつたが、今夜は幸ひ良い機會だから、皆にちよつと話をしたいと思つて、集合をかけたのだつた。」と、口許に笑を湛えた隊長は語を切つた。

「正に弦月冲天、而も微風あつて自ら快ありだね。滿月の下、哈爾哈河突破までは一名だに損じてはならぬ。幸ひにして、今日まで戰鬪を重ぬること數回、未だ全員無事なのは、此の中隊のみだ。皆はこの中隊長の命令さへ守つて居れば、決して死なんぞ、いゝか。」自信に滿ちた隊長の言葉だ。

「お前達は勝手に戰死してはならぬ。遠い砲彈の破片などで死ぬな。同じ戰死をするなら、思ひ切つたことをやつて死ね。今若し敵三百が此處に突込んで來たとしたら、お前達はどうするか。」と、隊長は突然の質問で語を結んだ。

整列した部下達は、霧を透して、四邊の地形を見た。

「おい、お前はどうする。」隊長が突然指名したのは、眞木隊の三浦一藤上等兵だつた。

「ハイ、隊長殿の御命令を待つて、御命令通りにいたします。」と即座に答へた。

「然り、正に其の通りだ。」隊長は滿足さうに言つて、「俺が直ちに伏せと言へば、敵が斬り込んで來ようと來まいと、皆伏せるのだ。其の時の俺の命令は違はぬぞ。安心して伏せろ。俺は

若い時から、幾多の戰鬪に遭遇してゐる。露助の一個師團や二個師團が何だ。これだけの兵力があれば大丈夫だ。」とつけ加へた。

此の隊長の強い信念に、部下悉くが、心に忠誠を誓ふのだつた。折から薄ら明るい月の光をたよりに、敵は再び砲擊を開始した。

「よしツ、配備につけ。」部下は忽ち夫々の配備についた。間もなく其の夜も明けて二十日、ノロ高地一帶の空は、百機に餘る敵機に蔽はれ、猛烈な爆擊を受けた。盲爆ながら、決して安全とは言へない。哈爾哈河對岸の敵陣地からは、熾烈な砲彈を送つて來た。

此の獨立中隊は、俗に「ウリダ山」と呼んだ高地に近い、最前線に陣地を占領してゐたのだつたが、將兵の志氣は、前夜の隊長の訓示によつて、一層昂まり、旺盛なものがあつた。敵の重機關銃、戰車砲彈の猛射の中に暴されながら、惡戰何ものぞ、苦戰何のその、敢然と戰ひ、猛然と襲ひ、敵に打擊を與へながら夜に入つた。一日ぶつ通しの激戰だつたのだ。勿論其の間、喰ふことも、飲むことも出來なかつた。ただ乾パンを嚙りながら、一息ついた時、壕の中で眞木小隊だけの集合命令が傳へられた。

「お前達眞木小隊は、今夜の闇に乘じて、前方二粁の地點にある、〇〇の高地に進出すべし。

今日此の地の戦闘に於ても、壮烈を極めたものであつたが、二粁前方の高地占領についての惨烈辛苦は、言語に絶するものがあることは、想像に難くない所である。勿論部下を殺したくないことは、俺の本来とする所だが、上司よりの命で、必勝を確信する端緒であるから、勇躍其の目的を貫徹すべし。」

中隊長の聲は、平常と何等異る所はなかつた。落ちついた語調だつたが、この輝かしい命を受けた小隊長は、面を緊張せしめ、心を躍らせて復誦した。小隊員も亦、「待てば海路の日和あり。」と勇み立つた。

斯くてこの決死隊は、隊長はじめ多くの戦友に夜の闇の中に見送られ、露語に達者な眞木小隊長を先頭に、しとどに濡れた露草の上を匐ひながら前進した。其の行先にも左右にも、敵弾が闇の中に落下炸裂してゐた。日中散々の敗北をした敵が、腹癒の積りか、但しは嫌がらせか、それとも、威赫射撃か、間断なくつゞけてゐた。

夜は更けた。奇蹟的にも一名の傷者もなく、最初の目的地を占領すると同時に、疲れも忘れ陣地の構築にかゝつた。しかし、何時敵の夜襲を受けるやも知れぬ情勢にあつたので、小隊長は機先を制し、夜襲を敢行すべく決意し、隊員にこれを傳へた。

時は正に午後十時、折からの濃霧を幸ひに、小隊は夜襲態勢をとり、「ウリダ山」目がけて肅々として進んだ。敵陣は近づいた。此の時分隊長三浦上等兵は、巧みに分隊員を掌握しながら「突込めッ。」と叫んだ。同時にワアッと喊聲をあげ、凄じい勢ひで、敵の陣地に突入した。敵は無數の手榴弾を投げて抵抗した。其の一弾が、三浦上等兵の唇をかすめ、眼鏡を飛ばしてしまつた。

「己れ、眼鏡を飛ばしたなッ。」と叫び、敵の中へ突込むと、そこには内務班長が、多くの敵を相手にして、上になり下になつての格闘最中だつた。

「班長殿ッ。」と聲をかけると、三名の敵を組敷いてゐた班長が、「三浦か。」とちよつと振返つたまゝ、敵をグい〳〵締めつけてゐた。

そこへ他の敵が、三浦上等兵に立向つて來た。「此奴等。」といひながら、片ッ端から突き倒した。と班長が、「三浦、どうした。」と聲をかけた。「ハイ、片ッ端からやつつけてゐます。班長殿は……。」と聞き返した。「俺は今二人やつつけて、残りの一人をやつつける處だ。」と答へた。闇の中の格闘なのだ。其の間も敵の手榴弾は、パッ〳〵と火花を散して炸裂する。此の時三浦上等兵が、「あつ。」と叫んだ。敵が闇の中から突き出した銃劍で、頬から頸部を突か

れたのだ。危く倒れようとしたが踏み堪へ、「此の野郎、やつたな。」といふなり、猛然と襲ひかゝり、其の敵を忽ち突き殺した。彼は顏面に二ケ所まで重傷を負ひながら、奮戰力鬪、遂に敵を潰走せしめ、この夜襲戰に於て、隨一の戰功を樹てたのだつた。

翌朝彼は部隊本部に後送されたが、來て見ると、其處に後送されてゐたものは、彼よりも重傷のものばかりだつた。それを見ると、彼は軍醫の留めるのも肯かず、支隊長から與へられた、綠の繃帶で顏面を包み、再び小隊に還り、重傷を顧みず火線に立つて戰ひつゞけた。その氣魄に、中隊全員の志氣は彌增しに昂まつた。

越えて二十三日、「七四五高地」に於ける、優勢の機甲部隊を有する敵の大軍との間に一大旋風の如き激戰が捲き起された時、彼は部下を指揮しながら、擲彈筒をとり、必死の猛射を浴せ、敵に大なる打擊を與へてゐたが、身邊に落下炸裂した、敵砲彈破片のために胸に致命傷を蒙り、

「天皇陛下萬歲……。」と叫び、壯烈の戰死を遂げたのだつた。

三度捲起つた一大戰風　第一次に亞ぐに第二次ノモンハン事件で、徹底的に敗戰の苦杯を舐めたソ蒙軍は、一應沈默したかに見え、八月十七日以來は、敗殘の敵の小部隊、或は戰車

が、我が方の警備線を冒し、或ひは逆襲を企てるに過ぎなかつたが、實は其の間敵は增援部隊の到着を待つてゐたのだつた。

第一次ノモンハン事件以來、我が方の猛攻によつて損害を蒙むつたソ軍の機甲部隊も、兵力も、悉くサバイカル軍管區に屬する部隊であつたが、二回に亙る敗戰に、第一次以上の損害を蒙むつたので、其の補充を西部から前線に送り、性懲りもない第三回の攻勢を整へるための沈默だつたのである。

八月十七日以來、敵は、哈爾哈河對岸高地一帶に、火砲、戰車などを集結してゐたが、二十日の早朝から、俄然空軍支援の下に、一大攻勢に轉じ、越境を企てたのだつた。

卽ちノロ、フイ兩高地の正面から、約二十粁の戰線に亙り、哈爾哈河對岸の砲兵陣地の猛射掩護の下に、中型以上の戰車四百臺、其の中には火焰放射器を備へつけたもの數十を加へ、此の機械化部隊を主力とし、野砲、狙擊兵、步兵合して約二個師團、哈爾哈河を越え、滿洲領內十六粁に殺到したのだつた。

玆に於て、我が日滿協同軍は、二十三日三度び總攻擊を開始し、我が山形、酒井、須見、長谷部の各部隊の猛攻となり、事件は第三次に進展し、秋色訪れたホロンバイルの大草原は、三

廈修羅の巷と化し、空には越境の敵機を邀へ撃つ我が荒鷲群の羽ばたき、地上には彼我の巨砲吼へ猛り、敵戰車を追ふて微塵に屠る我が鐵牛部隊、火焔瓶、戰車地雷を以て肉迫する肉彈勇士の雄叫び、數萬の鐵鈑を打つが如き機銃の響き、彈道、彈幕、草原の空を壓し、爆煙、砂塵は天日を覆ふ、一大激戰は展開されたのだつた。

殊に二十四日以後は、いよ〳〵熾烈となり、バルシヤガル高地、ノロ高地附近の激戰は凄絶そのもので、敵砲彈は文字通り雨と降り、これに酬ゐるに我が必中彈を以てし、殪るゝ者も、進む者も、萬歳を叫び、喊聲をあげ、優勢の敵を壓したが、舞臺は廣漠たる大草原のこと、時には敵に包圍され、後方との連絡全く絶え、孤立無援、苦戰に陷り全員戰死の悲壯の決意の下に、長くも東天を拜して　天皇陛下萬歳を叫び、御勅諭を奉誦して、敵中に死の突擊を敢行する隊もあり、或ひは敵戰車群を突破して、第一線部隊の苦戰を傳へ、糧秣及び彈藥補給を訴ふる死の傳令、或ひはまた、敵彈のために砲を碎かれ、全彈射ち盡し、群る敵戰車群中に突入した砲兵隊あり、或は猛牛を以て敵の戰車に體當りを以て迫り、鐵鋼鈑を鮮血に彩どつて、高らかに萬歳を叫んで殪れる者、壯烈、慘烈、大和魂は此の草原に華と咲き誇つたのだつた。

單身敵戰車に肉迫　ノモンハン、フイ高地附近の、我が第一線警備陣に向つて、歩兵約

五百、戰車百臺を以て、一齊に逆襲を企てゝ來た。時は八月二十日、殊に同高地正面の敵は、戰車約六十臺、歩兵約四百を以て、我が國崎部隊の陣地に、戰車砲、重火器の掃射を加へ、猛然と迫つた。

我方も亦これに對し、勇猛果敢の反擊を加へ、戰鬪は益々熾烈を極め、彼我の銃砲火は彼方に此方に炸裂して、爆煙は朦々と天日を覆ひ、三尺を隔てた戰友の顏さへもが、時には定かに判らない。叫喚、怒號、凄絶極まる戰鬪は、何時果つべくもなく續けられた。

「敵戰車だッ。」と誰やらが、けたゝましく叫んだ。見れば敵戰車數臺が、突如陣地を目ざして驀進して來たのだ。陣地に侵入されゝば、味方の損害は想像以上のものがあることは、火を視るよりも明かだ。危險は刻一刻に迫つた。

「よしッ、俺がやつゝけてやる。」と叫んで、火焔瓶をひつさげ、奮然と躍り出したのは、吉野善治上等兵（千葉縣山武郡東金町押堀出身）だつた。

敵彈雨と降る中を、彼はじり〳〵と、歩一歩、敵の戰車に肉迫した。上官も戰友も、敵戰車に近づいた彼の姿から眼も離さず、「どうか無事で成功してくれるよう。」と、各自氏神様に念じながら、一同息を殺してゐた。

「エイツ。」鋭い聲と共に、彼は火焔瓶を先頭の敵戰車に叩きつけた。「やつたツ。」と戰友は異口同音に叫んだ。敵の戰車は、忽ち火を發して、炎々と焔に包まれて燃えあがつた。——萬歲——我が陣地に起つた歡聲の嵐だ。ところが、敵戰車は火に包まれながらも、斷末魔の喘ぎか、亂射を浴せかけた。

「小癪な眞似をしやがる。」と叫んだ彼は、手榴彈を砲塔目がけて叩きつけ、遂にこれを完全に擱坐せしめた。この時敵戰車の搭乘兵は、戰車から飛び出して逃げようとした。

「逃がすものか。」と、彼は忽ち躍りかゝつて刺し殺した。彼の此の勇敢な行爲に、怯氣ついた殘餘の戰車は、稜線の彼方へ敗退した。

明くれば二十一日、敵は曉かけて猛烈な砲擊を開始し、其の掩護の下に、再び戰車を伴つた歩兵部隊が、我が方の陣前五十米にまで逆襲して來た。此の日は分隊長が負傷したために、吉野上等兵は分隊長に代り、部下を激勵して、敵に猛射を浴せ、忽ちこれを擊退したが、一隊の敵は、勇敢にも踏みとゞまり、マキシム銃を亂射して、頑强に抵抗をつゞけた。「えいツ、面倒だ。」と叫ぶなり、彼は手榴彈を引つ掴み、敵の猛火を冒し、敵の側面に肉迫して、全身の力をこめ、群がる敵の中へ投げ込んだ。と、轟然爆發して、數名の敵がバタ〳〵と殪れた。

彼の此の勇敢な行爲に、敵は戰意を挫かれ、あわてふためき逃げ出した。彼は其の敵に追ひ縋りざま、突き伏せ突き倒し、遂に敵のマキシム銃を鹵獲して、——萬歲ツ——と叫んだ時、飛來した敵彈は、彼の頭部を貫いた。

「あツ……。」と叫んで、堂と倒れた彼は、ホロンバイルの華と散つたのだつた。

上官の遺骸に折り重つて壯烈の戰死

八月二十日は、我が戰線の到る處に、優勢の敵が、機甲部隊を恃みに、大擧して逆襲を企てゝ來たので、これを反擊する激戰が展開された。

此の日國崎部隊第三〇隊の前面にも、戰車數臺を加へた敵が、猛烈に迫つて來た。

「最後の御奉公の時が來た。」と、〇隊長以下、全員悲壯の決意の下に、志氣はいよ〳〵昂まつた。中にも高木益太郎見習士官（北海道雨龍郡沼田村字幌新内太刀別昭和鑛業所用地出身）の率ゐる、〇〇砲第一小隊第二分隊の勇士は、腕を敲いた。大地を蹴つた。いづれもこれまでの激戰に、敵戰車十數臺を破摧擱坐させて來た猛者ばかりだ。敵の重火器を數知れず叩きのめして粉碎した、正に一騎當千の士なのだ。

「敵の戰車が何だ。敵砲彈が何だ。我が〇隊の〇〇砲の偉力を、十二分に發揮する時が來たぞ。」と、豪膽で而も沈着な、高木見習士官の指揮の下に、忽ち敵の戰車數臺と、山砲二門も、

物の見事に破壞して、敵の度膽を拔いたのだつた。けれども、敵は優勢だ。我が方を寡兵と侮つて、擊退されても、擊退されても、執拗に逆襲を繰返して來る。砲擊戰は時と共に熾烈となり、硝煙天を覆ひ、陽の光さへものぞめない程だつた。

斯くして、激戰は夕刻に至るまで、殆んどぶつ通しに連續されたが、日沒と共に、敵はぴたりと射擊を中止してしまつたが、翌二十一日には、再び猛攻に轉じて來た。

地軸をゆるがす砲彈の炸裂、轟々千里の平原に響く戰車の音、砲煙の中から聞ゆる怒號、叫喚、慘烈といはうか、形容の言葉だにない程、戰ひは混戰に陷つた。

「隊長殿は戰死されたぞ。」爆煙の中から、轟々たる砲火の響の中から叫ぶ聲が聞えた。

折から、敵砲彈は、第二分隊の砲側に落下炸裂した。「やつたな。」と叫んだのは、高木見習士官の聲だ。砲彈破片のために傷ついたのだ。

「分隊長殿ッ。」と部下が呼ぶと、「大丈夫だ。つゞけッ。」と言ひつゝ、傷ついた分隊長は、軍刀の鞘を拂つた。それを右手に、左に拳銃を掴み、群る敵の中へ躍り込んだ。正に鬼神の姿だ。彼は敵を斬つた。射つた。そのうちに、限りある彈丸は盡きた。刀は幾多の血を舐めたが、身も亦數ケ所の傷を受けてゐたので、精根盡きて倒れたが、死力を盡して草を、砂を血に染め

ながら、戰死してゐる○長の許まで匍つて行つた。

「隊長殿、やれるだけやりましたが、殘念であります。靖國神社へお供します。」と言ひつゝ、悠々と鮮血に染つた軍衣の胸を掻きひろげた。

「天皇陛下萬歲……。」と唱へ、見事腹一文字に掻き切り、日本武士道の最後の道を擇び、○隊長の死體の上に伏してしまつた。

點火した爆藥を抱いて敵戰車へ　八月二十一日、我が○○部隊陣地の左側背に迫つて來た、數十臺の敵戰車、裝甲車群が、大平原を壓した光景は、未だ如何なる戰史にも見出せないものだつた。

○○隊指揮下にあつた○○隊は、直ちに戰車肉迫攻擊班を組織して、手繰艇引いて待ち受けた。ところが、四時三十分頃になると、「ニゲソリモト」松の木附近に於て、敵戰車二十臺が、小癪にも四方から包圍の態勢を以て攻擊を開始し、遠卷きから包圍を縮少して、戰車砲を猛烈に射ち込んで來た。

勇士は息を殺し、滿を持して機の熟するのを待つた。やがて二臺の敵戰車が、陣前二十米附近まで迫り、我物顏に横行して、亂射を浴せて來た。

「よし、來たッ。」と叫んだのは、肉迫攻撃班長山本軍曹だつた。正に肉迫攻撃の好機が到來したのだ。「往くぞッ。」と言ひつゝ、火焔瓶に點火し、それを携へ、匐匍しながら敵戰車に向つて前進した。

それと見た渡邊信昌一等兵は、自ら爆藥手となり、火焔瓶手に協力、爆藥に點火すると、秒一秒燃えてゆく爆藥を抱いて、これまた壕の外へ躍り出した。と、二十臺の敵戰車は、此の兩名を目がけて、熾んに集中火を浴せたが、脇目も振らず突進した。わけても渡邊一等兵は、今正に爆發しようとする爆藥を抱き、硝煙と砂塵の中を縫ひながら、一臺の敵戰車目がけて肉迫した。

此の恐るべき、爆藥を抱いての肉彈突擊、即ち陸の人間魚雷を發見した敵戰車は、急反轉して逃走じた。其の逃足の速いのを見て、山本軍曹と共に、逞しい顏を見合せて笑つた。

更に四時五十分頃、再び敵戰車三十數臺が、狙擊兵約三百の後續部隊を從へて攻擊前進して來た。折柄の夕陽を浴びて、平原の怒濤の如く、押し寄せて來る敵戰車群は、敵ながらも實に堂々たる威容だつた。一同は壕に隱れて待機した。眼深に冠つた鐵帽の下では、怒りに燃える眼が、烱々と輝いてゐた。

――お國のために笑つて死ぬ――それが愛國心の至上なのだ。それが各自の胸に火と燃えてゐた。敵戰車は傍若無人にも近づいた。

此の時、さツと壕から身を躍らせて飛び出し、猿の匐ふ如く、一臺の戰車に肉迫したのは、渡邊一等兵だつた。

「渡邊がまた往つたぞ。」と、戰友は壕の中から、固唾を呑んで見てゐるうちに、敵戰車に近迫した一等兵は、携へた爆藥を叩きつけた。轟然たる爆音、濛々たる爆煙、其の中に包まれて、敵戰車は見事に擱坐してしまつた。此の死角に飛込んだ彼は、爆發の破片が飛ぶのと、颯と一過した風を頭上に感じたのみだつた。

「萬歳……。」彼は驚き呆れる敵戰車群を尻目に、またゴソ〳〵と壕に這ひ戻り、再び爆藥に點火して、ブス〳〵燃えるのを携へ、他の敵戰車に肉迫して破摧した。斯くすること三回、四回、見る見るうちに數臺の敵戰車を叩き潰したが、我に數十倍する優勢の敵だ。射てども迫り、燒けども近づき、完全に周圍を包圍して、戰車砲彈、機關銃彈、小銃彈を交へ、亂射亂擊を浴せながら、愈々包圍圈を縮少して來た。敵は多くの機械力と、豐富の彈藥とを擁して迫るのだが、我方には肉彈以外、何の攻擊資材もなくなつた。

「忌々しいなア。機械力が足りない。弾藥が不足だ。肉弾でやるより外はない。」と叫び、壕から躍り出した渡邊一等兵は、銃劍を擬し、弾丸の如く、敵の中へ突つ込んで行つたが、彼の遲しい姿は、何時まで經つても、再び見ることが出來なかつた。言ふ迄もなく、敵の中に躍り込んで、華々しく戰ひ、敵中で壯烈の戰死を遂げたのだつた。

折から地平の彼方に沈む夕陽は、彼の至誠を象徴するかの如く、眞紅の色に映えてゐた。

單身手榴彈を以て狙擊兵を擊退

二十一日、バルシヤガル七三一高地附近の、我が須見部隊小林隊の陣地に、機甲部隊を伴つた新手の敵が、盛り返し、押し返し逆襲を企てゝ來たが、我が機關銃分隊の寡兵に向つて、二百餘の敵狙擊兵が、猛烈に射擊して迫つて來たのは、侮り難い勢ひだつた。分隊の勇士は、銃身も裂けよとばかり猛射を加へて反擊した。

「生意氣な狙擊兵だ。」と叫び、奮然起ち上つたのは、堂前時義上等兵（佐賀縣杵島郡大町出身）だつたが、彼は幼年時代から、葉隱論語で、武士道を訓へられた勇士だつた。

彼は六個の手榴彈を携へ、前方の壕に進んで身を潛めた。彼は其處まで敵をおびき寄せ、一擧に擊滅すべく待機したのだつた。

それとも知らぬ敵は、刻一刻に近迫した。

「分隊長殿、射つていゝんでありますか。」射手は腕が鳴つて堪らなかつたのだ。

「待て、充分に引きつけてから射てッ。」分隊長は、逸る部下を制した。敵は益々近づいた。既に二十米、此の時分隊長は、「射てッ。」と號令した。と、忽ち我が機關銃は、猛然と火を吐き出した。敵はバタ〳〵と倒れてゆく。しかし敵は遮二無二押し進んで、今堂前上等兵が潛んでゐる直前まで來た。此の時ガバと身を起した彼は、全身の力をこめて、一發一發、續けざまに、六個の手榴彈を叩き込んだ。それが次々に炸裂して、敵は將棋倒しに殪れた。敵はあわてて、奇聲と共に、數十個の手榴彈を投げて抵抗した。

「おうい、手榴彈だ、手榴彈だ。」彼は前方から叫んだ。「よしッ。」と叫んで、手榴彈を携へた分隊長が突擊する。玆に猛烈な手榴彈戰が彼我の間に展開された。

「手榴彈だッ。」と、戰友の手から手榴彈を受取つては投げ、取つては叩きつけする彼の正確な手腕は、炸裂のたびに、必ず敵四五名づゝがバタ〳〵倒れるのだつた。流石に頑强に抵抗してゐた敵も、夥しい彈藥を遺棄したまゝ敗走した。

これを見た敵戰車は、友軍の敗退を救はうとてか、直ちに戰車砲を猛射し始めた。と、其のうちの一彈が、堂前上等兵の直前で、ガーンと炸裂した。その破片は、彼の顏面及び胸部を貫

通した。この致命傷に、彼はばつたり倒れたが、再び起つべく身を藻掻いたが駄目だつた。

「みんな、後は頼んだぞ。」と、草原の草を血に染めて伏せてしまつた。

敵戰車上で壯烈の戰死　同じしく二十一日、○○部隊の○○隊も、朝から數倍する敵の逆襲を何回となく受けたが、其の度毎に反擊を加へて潰走せしめた。所が午後三時頃になると敵の十五榴彈が、一層熾烈に陣地附近に落下して來た。陣前數米に近迫した敵戰車からは、盛んに火を吐いて戰車砲彈を射ち込んで來た。

今しも舊○○隊位置の方から、敵の戰車砲彈が落下しはじめた。「肉迫攻擊だッ。」と叫んだ隊長吉田見習士官が、刀を揮つて躍り出すと、豫ねて準備しておいた、火焔瓶、携帶地雷など、肉迫攻擊火器を引つさげて、米戸伍長、宰津田、西村各上等兵、佐々木一等兵の勇士達が續いた。

先頭きつた吉田見習士官は、敵戰車數米の地點に肉迫した時、敵の戰車砲彈のために、「無念。」の一語を殘して殪れ、他の勇士たちも、一人殪れ、二人殪れした。

此の時、「野郎ッ。」と叫びながら、敢然敵戰車に肉迫したのは、佐々木義平一等兵（島根縣美濃郡北仙道村大字山析出身）だつた。

彼は敵戰車に肉迫するや否や、持つてゐた携帶地雷を、敵戰車の履帶の下に突込んだ。と忽ち轟然爆發して、敵戰車の履帶はふつ飛んでしまつた。敵戰車は死物狂ひになつての亂射亂擊だ。「まだのたうち廻るか。」と言ふなり、彼はハンマを掴み、敵戰車にとび乘り、力まかせに天蓋を毆つて破壞、搭乘の敵兵を叩きのめす積りだつたが、戰車内の敵が狙つた拳銃彈が、左の頰から頸部を貫通した。

今正に打ち下さうとしたハンマを振り上げた儘、「殘念ッ。」と叫んで、戰車に倒れかゝつたが、やをら身を起し、「敵戰車上で死ぬのは本望だ。」と叫んだ。敵戰車の鋼鈑は、見る〳〵うちに血で染められた。

「見ろ、敵戰車を、俺の血で塗つてやつた。

從容として、敵戰車上で眼を閉ぢた。　天皇陛下萬歳……。」

重傷三度まで前進　同じく此の日の戰鬪で、敵陣前一千米に陣地を占領した時、第三分隊の右翼に位置してゐた、山崎竹夫一等兵（北海道余市町大字富澤町五四田身）が、前方を見てゐると、約二十米の前方臺上に、怪しい人影を認めた。

「誰か……誰か。」と、三回まで誰何したが、譯の判らぬ言葉で返答したので、さては敵だと

銃剣を振りかざし突つ込んだ。敵はあわてゝ兵器を棄てゝ逃げた。「態ア見やがれ。」と言ひながら、彼は尙ほも前進した。敵は前方の陣地から、一齊に射ち出した。戰車砲彈、迫擊砲彈は所嫌はず飛んで來た。一等兵は其の中を突き進み、いま敵前三十米に迫つた時、敵が投げた手榴彈は、一等兵の身邊で炸裂した。

此の時彼は、「畜生ッ。」と叫んで倒れた。破片のために、胸部を貫かれたのだつた。彼は銃を杖に、起ち上らうとした時、再び敵彈は、彼の右胸部を貫いた。

「おい、確かりしろッ。」と勵ましつゝ、一人の戰友が駈けつけて、手當を施さうとした。彼は其の手を拂ひのけた。

「俺に構はず敵を擊退して呉れ、俺はいゝ、俺はいゝ……。」といふのを、戰友は無理に假繃帶を施してゐた。と此の時、頭上で敵の手榴彈が炸裂して、其の破片で下顎に爆創を受けた。胸に二回、今また下顎部に重傷を負ひ、さしもに剛氣の彼も、起ち上らうとしても駄目だつた。

「駄目か……。」血を吐きながら言つた。そして、「天皇陛下萬歳。」と、三度唱へて壯烈の戰死を遂げた。

兩脚に重傷を負ひながら傷者を救護す

此の日此の戰鬪は、時の移るにつれて、愈々熾烈となり、九時十五分頃には、正に酣となり、次々に負傷者が續出した。

此の時、野上清吉衞生曹長（北海道利尻郡蒡脇村大字石崎字オサツナイ出身）は、敵の十字砲火の中を駈け廻り、傷者の救護に、手當に、死力を盡してゐたが、十時頃三名の負傷者を出したので、これに應急手當を施すべく駈け寄つた。

敵彈は文字通り、雨の如く降り注いでゐた。其の一彈が、曹長の右大腿部を貫通したが、

「やつたな。」と言つたまゝで、己れの傷の手當はしようともせず、他の傷者の手當に懸命だつた。

「確かりしろ、傷は淺いぞ。」と、或る一等兵が傷ついたのを勵ましながら抱へ起し、素早く假繃帶を始めた。その時一等兵は、曹長が砂に突いてゐる膝のあたりから滴る血が、あたりの草を染めてゆくのを認めた。

「曹長殿、私よりも曹長殿の傷の方が……。」

「なに、俺の傷は大したことはない。」事もなげに言つて、一等兵の手當を終つた後、己の傷の手當をしたが、出血多量のため、遂にばつたり倒れ、昏睡狀態に陷らうとしたが、「俺は衞生部員だ。此の激戰で、此の負傷者が續出してゐる際に、肝腎の俺がこのくらゐの傷で倒れて

なるものか。」と、己を叱咤激勵して、眠りかける魂を呼び覺し、數分の後には再び起ち上つたが、右脚は全然自由が利かない。其の右脚を曳きずりながら、敵彈の中に、傷者の聲を求め手當を施すのだつた。

十時頃、敵は猛烈な手榴彈戰を以て挑んで來た。我方の寡兵を侮つて、小癪な振舞だつた。ところが、其の一彈が、今傷者を求め、匍匐してゆく、曹長の附近で炸裂した。瞬間曹長は、悲痛の叫び聲をあげた。左下腿部を盲貫されたのだつた。この時、「小隊長殿がやられた。」と誰かゞ叫んだ。

「なに、小隊長殿が……どこだ、どこだ。」と、曹長は左右の脚に重傷を負つてゐるにも拘らず、田中小隊長を求め、其の傷の手當を施したほか、他の二名の傷者の手當を終つた時、再び昏倒してしまつた。

翌日彼は後送されたが、途中破風症を併發して、九月十一日午前五時三十分、軍醫の手厚い看護を受けながら、永久への眼を閉ぢたのだつた。

敵彈冒して衛生兵の連絡　同じ日、日の丸高地に陣地を占領してゐた○○隊も亦、敵戰車群の包圍を受け、戰車砲彈、機銃彈の亂射を注がれ、苦戰から苦戰へと陷ぢた。

當時七三一高地にあつた部隊本部から、其の苦戰の狀況が、手にとるやうに見える。悲報は刻々に齎らされた。

生田部隊長は、小野寺哲也上等兵を招き、傷者救護のため、日の丸高地に急行するよう命じた。彼は下士官候補教育修了後、八月一日から、此の部隊に假配屬されてゐた衛生兵だつた。

命をうけた彼が、日の丸高地に到着して見ると、彼處に此處に、破片創のために全身紅に染つて倒れてゐる狀は、慘また慘、彼は直ちに夫等の傷者の救急處置に全力を盡した。

此の頃から、敵の攻擊は愈々猛烈を極め、我方を小勢と侮つて、敵戰車はじり〳〵と包圍圈を縮めて來た。一息に蹂躪しようといふ態勢だつた。○隊は玆に全く孤立の狀態に置かれ、敵砲彈の落下炸裂は益々烈しく、戰死傷者は漸次其の數を增した。

第三中隊長は、後方の○隊長に、此の狀況を報告して、急援を得て高地を確保しようと考へ、連絡兵を出したが、陣地を出たかと思ふと、敵彈のために殪れる。次の連絡兵も亦、二三十歩も進んだかと思へば射たれる。斯くすること二回、三回、悉くが倒れてしまつた。

「小野寺上等兵、お前が往けッ。」最後の輝しい白羽の矢は、彼に立てられたのだつた。命を受けた上等兵は、隊長の命の下から、復誦すると同時に、日の丸高地を後に、敵彈降り注ぐ中

に躍り出した。

「無事で往つて呉れ。彼が倒れたら、もう最後だ。」と、隊長は心に念じながら、彼の後姿を見送つた。

彼が進む所、往けば往くほど、敵彈は烈しく降り注いだ。破片はヒユン〳〵と、眞赤に灼熱して飛び散る。見送つてゐた隊長はじめ戰友は、其のたびに手に汗を握るのだつた。と、敵の一彈が、彼の行先でダーンと炸烈した。同時に彼は爆煙に包まれて見えなくなつた。

「しまつたッ。」思はず隊長は叫んだ。眼を覆ふた次の瞬間、眼を開けて見れば、さつと舞ひ上つた砂煙と、爆煙との渦卷が薄れてゆく彼方に、彼が走つてゆく姿が見えた。

「よかつた。」と胸を撫でおろした。

敵砲彈は、もう相當の後方に進んでゐるのに、却つて烈しく落下する。彼は十歩進んでは伏せ、五歩歩いては這ひ、或は爆巣に身を避け、或は尺にも足らぬ草に身をひそめして、難なく七三一高地の、部隊本部に辿り着いた。

斯くして部隊長に第三中隊の危急を報告、重大任務を果した。

「よくやつて來た。」彼の手を固く握つた、部隊長の眼頭は熱くなつてゐた。

鬼神も哭け此の壯烈　二十二日の正午過ぎ、岡本部隊小銃隊の、バルシヤガル高地陣地の後方二百米の地點に、元春田隊の〇〇砲隊が、砲口を列べて、敵の重火器に猛射を浴せ、片ツ端から覆滅させてゐる最中、突如敵の戰車群が、この小銃部隊の眞正面に現はれた。

これを逸早く發見した砲隊は、これに一發必中彈の洗禮だ。敵戰車はあわてゝ後退、凹地凹地に其の姿を隱し　其處から執拗に砲擊を續けてゐたが、やがて其の一臺が、側方に姿を現はしたと見る間に、我に向つて驀進して來た。そして百米にまで近迫すると、其處の凹地に潜み砲口のみを覗かせ、猛射を浴せて來た。

此の時、最左翼にあつた池松伍長を先頭に、櫻井利恒上等兵（横濱市中區永樂町出身）餌取友吉上等兵（北海道中川郡西定寄字鹽幌出身）の兩上等兵は、豫ねてから名砲手として知られてゐた、山木壽夫上等兵（廣島縣安藝郡坂村出身）がぶつ放した一彈で、見事擱坐させた戰車に兩側から飛びついた。それと見た敵は、拳銃を亂射して抵抗したが、三名は怯まず、敵が今天蓋をぴたりと閉ぢようとする間一髪、餌取上等兵が指をさし込んだ。勿論指を犠牲にしてかかつたことなのだ。それに櫻井上等兵も力を合せ、遂に天蓋をこじ開けた。

「占めたぞ。」と言ひつゝ、二挺の機關銃を、ダダダダと射ち込んだ。三名は敵戰車上に仁王

立となり、萬歳々々と叫んだ。友軍の陣地からも、同じく萬歳を送つた。

此の大膽不敵の行爲に、肝を冷した殘餘の敵戰車群は、破壞された六臺を棄てゝ遁走した。

翌日も亦翌日も、激戰は連續して二十九日となつたが、激戰の連續で、二日前から飲まず喰はずだつた。勇士達の顏は、汗に叩きつけた埃と、硝煙に燻つて、どす黑く汚れてゐたが、志氣は益々旺盛だつた。

中にも新本範夫衞生一等兵（廣島縣安藝郡江田島村出身）は、何時もにこ〳〵笑ひながら、傷者の救護に奔命してゐた。彼は廣島の廣陵中學を卒業後、關西大學の專門部を出た知識人だつた。勿論此の日も、敵の戰車群は逆襲して來た。それより前、陣前五十米にまで近迫して、猛烈に射ち込んで來る、敵のマキシム重機關銃のために、我の蒙むる損害が甚大だつたので、先づこれを制壓すべく、防戰に決死的努力を傾倒してゐる時、敵戰車の襲來は、正に苦戰の加重だつた。而も〇〇砲隊には、僅かな小銃と、二挺の機關銃があるのみ、其の機關銃も、二銃は前日敵から彈藥もろ共鹵獲したものだつた。

「敵戰車三臺、右方へ迂回中……。」右翼の砂の瘤に出て、觀測に任じてゐた、觀測手の六信敏雄上等兵（廣島縣高田郡横田村出身）が、突然肝高い聲で叫んだ。中間で新本一等兵がそれ

を聞くと、「敵戰車三臺、右方へ迂回中。」と、これを取次いで叫んだ。彼は其の時負傷者に假繃帶を施してゐたので、繃帶を施しながら叫んだのだつた。

一方六信上等兵は、自分の報告の聲が聞えなかつたと思つてか、砂の瘤から一散に駈け降りて來た。それと見て、敵彈は同上等兵に集中され、其の身邊に熾んに落下した。しかし、足を止める閑はない。停れば却つて危險なのだ。そのうち、「敵戰車三臺、右方へ迂回中……。」と再び叫んだ彼は、ばつたり倒れた。

「やられたッ。」と言つて、新本衞生兵が、駈け出した時、倒れてゐた彼はまた「敵戰車三臺、右方へ迂回中。」と叫んだ。

「しつかりしろッ。」と聲をかけ、新本衞生兵が引き起して見ると、彼は胸をやられてゐたので、傷口を調べてゐると、彼は落ち着いた態度で、繃帶を取り出した。

「新本か……危い、こゝは危い。心配することはない。早く還れ、危い。」と言つた彼は、むつくり起き上つて、再び觀測所の方へ還らうとした。

「いかん、いま動いたらいかん。」新本衞生兵は、敵彈道の方向へ追ひかけ、彼を抱き止め、血止めのガーゼを摘み出した途端、正面から飛んで來た敵彈が、今度は新本衞生兵の胸部と頭

部に命中した。同時に、「しまつたッ。」と叫んで打ち倒れた。それと見て、駈けつけたのは仲信軍曹だつた。

「六信も新本も、しつかりしろ。」と勵ました。

「分……分隊長殿、新本が……。」と新本衛生兵の身の上を氣遣つてゐるのだつた。

「分隊長殿、早く、注……注射を、上等兵殿が危險であります。」といふ、新本衛生兵も亦己れの致命傷も忘れ、六信上等兵の身を案じてゐたのだつた。

「新本、大丈夫だ。お前こそしつかりせ。」分隊長は、彼の耳元に口を寄せて言つた。彼は其の聲に、ぎくりと一つ頷いたかと思ふと、前にがつくり伏してしまつた。

六信上等兵はと見れば、斷末魔の力を右手の食指にこめ、砂の上に、「天皇陛下萬歳。」と認め、これまた壯烈の戰死を遂げたのだつた。

此の時、六信上等兵が、死を以て報告した敵戰車三臺が、右翼の第一分隊の正面から突如現はれた。名砲手山本上等兵が、「戰友の仇。」と魂をこめ、射ち出した第一彈は、忽ち先頭の一臺を屠つた。二彈二臺目、三彈三臺目に命中、戰車砲をへシ曲げられ、或は砲塔を破壞されたが、機關銃を亂射しながら、左右に別れて迫つて來た。

これと同時に、待機してゐた敵歩兵二百も、つゞいて逆襲して來た。この優勢の敵に對し、我〇〇砲を守るものは僅かに小銃手五名、しかも砲彈は既に三發となつた。其のうちの一發を敵歩兵の眞只中に射ち込んだ。敵兵がバタ〳〵と倒れた。こんどは、砲口をぐつと左の戰車に向けた。危險と見て、部隊本部から、單身此の陣地に來てゐた部隊長代理の西村大尉は、思はず彼に、「山本、なぜ敵歩兵なんか射つたのだ。彈丸はあるのか。」と聲をかけた。

「彈丸は三發しかなかつたんでありますが、二臺の戰車をやつつけるのに、三發では一發餘るんであります。一發餘ると思ふと自信が鈍りますから、一發は歩兵に喰はしてやつたんであります。大丈夫であります。屹度一臺一發づゝでやつつけます。」この豪膽な返答には、平常豪膽大尉として知られてゐた西村大尉も、舌を卷いて驚いた。

「よしッ、判つた。一發必中の精神をこめて射てッ。」

彼は彈丸をこめて待つた。大尉を始め、息を殺し、山本上等兵を凝視てゐた。二百五十米、二百米、敵戰車は近づいた。彼はまだ射たうとしない。引金に手をかけたまゝだ。皆の視線は其の手に吸ひつけられた。

と、此の時だつた。「上等兵殿、彈丸だ、彈丸だ。」と叫びながら、轉がり込んで、彈藥箱を

置いたのは、川島久藏一等兵（秋田縣平鹿郡植田村出身）だつた。

「來たか、有り難う。」と、山本上等兵が叫んだ時、砲は火を吐いた。彼は引金を引いたのだ。右方の敵戰車の砲塔が、完全に破壞して飛散つた。同時にパッと焰を噴き出した。「次だ。」上等兵は叫ぶ。川島一等兵も協力して、砲口を左方へ向けた。狙ひは定つた。砲は再び火を吐いた。見事左方の敵戰車に命中した。神技に等しい、驚くべき技能だ。

「萬歲、偉いッ。」思はず西村大尉が叫んだ。

此の必中彈に、氣勢をそがれた敵戰車は、停止したまゝだつた。それに次々と急所を狙つて射つ、川島一等兵が彈藥を運んで來る。敵のマキシム機關銃が、川島一等兵を目がけて集中したが、彼は一向平氣だつた。

敵火は二重三重になつて來た。彼がゐる後方のなだらかな砂丘に、一列二列と敵火のために溝が出來る。機關銃の釣射ちだ。此の時、「殘彈六發……。」と彼が叫ぶと、山本一等兵は、傍の壕の中へ飛込んだ。殘彈六發は、萬一に備へるべく射ち方を中止したのだつた。

「川島休憩だ。一息入れよう。」

「今一息だ。ちよつと彈藥をとつて來ます。」

「無茶を言ふな、この敵彈の中を往かれるか。まア待て、此處へ來い、一服やらう。」山本上等兵は、煙草に火をつけ、「お前もやれ。」といつて差し出した。

「有り難う……すひをさめかな。」と川島一等兵は、煙を大きく吸ひ込むと、目を細くして笑つて見せた。

「ふゝゝゝゝ何時だつて、お互ひに煙草を吸ふ時は、さう思ふんだがなア。」山本上等兵も笑つて言つた。

兩名は、敵彈降る中で、悠々煙草一服だ。

「誰か彈藥補給に行けッ。」西村大尉の大聲だ。再び敵が勢ひを盛り返したのだ。

「川島ッ。」自分で自分の姓を呼んだ彼は、急いで煙草の火を揉み消し、吸ひさしをポケットに押し込み、壕から飛び出した。今笑つて見せた山本上等兵は、煙草を口から離し、込み上げて來る涙を、じつとこらへた。彼は先刻から、「俺が先か、川島が先か。」と覺悟してゐたが、川島一等兵も亦、同じやうに考へてゐたのだ。然し今まで奇蹟的に、二人とも助かつたが、今度といふ今度は、どちらかが最後のやうな氣がしてならなかつたからだ。「煙草の吸ひをさめ、笑ひ顏の見をさめだつたのかな、それにしても、川島は生かしておきたい。馬鹿ッ、泣く奴が

あるか、泣かんぞ、戰場ぢやないか。」と、自分で自分を叱つて見ても、眼頭が熱くなつて來るのだつた。

「川島、俺が死んだら、お前が射て、いゝか、賴むぞ。」彼はまた獨り呟いた。

間もなく、彈藥箱を擔ぎ、裸の一發を片脇に抱へた川島一等兵が、後方の丘をさつと駈け下りて來る姿が見えた。

「あいつも死んでゐなかつた。俺も死ななかつた。よしッ。」山本上等兵は、壕から飛出し、砲側に片膝ついて、砲手の姿勢をとつた時、「上等兵殿、彈丸だ、彈丸だ。」と叫ぶ、川島一等兵の、悲痛の聲が聞えた。上等兵がふと振返つた瞬間、顏中血だらけになつた川島一等兵が、ばつたり倒れた。

「あつ……。」と叫んで眼を閉ぢたが、再び眼を開けた時は、彼は擔いで來た彈藥箱の側で、身を藻掻きながら、抱へて來た裸の彈丸を、兩手で差し上げてゐた。

山本上等兵は、矢庭に壕から飛出し、彼の側へ駈け寄り、急いで壕の中へ抱へるやうに曳きずり込んだ。

「川島、しつかりしろ、彈丸を放せ。」といつたが、彼は一發の彈丸を、しつかと持つたまゝ、

容易に放さうとしなかつた。

「川島、有り難う。俺だ、山本だ。」耳に口をあてゝ呼ぶと、それが通じたか、

「上等兵殿、た……彈丸……。」と言ひながら、持つてゐた彈丸を手から放し、安心したものか、がつくりのめりかけたのを、山本上等兵は、腕の中へ抱へ込んだ。

「川島、よくやつて呉れた。俺が敵に必中彈を喰はすことが出來たのも、川島、みんなお前のお蔭だつた。お前のやうな、勇敢な彈藥手がゐなかつたら、砲も俺の腕も、何の役には立たなかつたのだ。敵戰車をやつつけたのも、敵歩兵をぶつ飛したのも、お前の彈藥補給があつたからだ。なア川島、矢つ張り先刻の煙草は吸ひをさめになつたんだね。川島、砲手と彈藥手の一貫した氣持は、お互ひでなくちや判らんからね。……川島……川島……。」

彼は男泣きに泣いた。西村豪膽大尉も、戰友も共に泣いた。彼のポケットの中には、まだ吸口の乾かぬ、吸ひさしの煙草がはいつたまゝだつた。

通信班軍曹の肉彈突擊　ホルステン河西方高地で、八月二十二日敵の機械化部隊が猛威を揮つたために、我が方は苦戰のどん底に陷つた。當時通信班は、渡邊○隊長の指揮する部隊と、前夜から猛烈な夜襲を敢行してゐた、川村部隊長の指揮する部隊とに、二個分隊づゝを以

て、有線連絡をとつてゐたのだが、曉かけての敵の砲撃と、激しい戰鬪のために、電話線は無殘に切斷され、部隊本部との連絡は全く絶たれてしまつた。

戰況は刻々に迫つた。部隊長が川村部隊長に、重要命令を傳へようとしても、肝腎の電話は用を爲さない。而も川村部隊との連絡は、特に重要なために、途中二個所に電話器を設置して、保線連絡に努めたのだが、敵砲彈のために、ズタ〳〵に切斷されてしまつたのだつた。

「電話不通……。」「電話線切斷……。」この悲痛の叫び聲に、保線手は、敵彈を冒し、其の任務に死刀を盡したが、敵戰車は我方の陣地深く侵入して、其の保線手にさへ射擊を加へるのだつた。戰況は愈々急迫したため、保線を兼ねた傳令兵を派遣するに決した。

此の時、「高松をやつて下さい。」と進み出たのは、高松常正軍曹（北海道古宇郡泊村大字盃村出身）だつた。見れば彼は既に輕裝して、脊には電話器を負ひ、志村一等兵を伴つて、出發の準備までも完了してゐるのだつた。

「高松、お前が行つて呉れるか。」通信班長の眼には、感激の涙が光つた。言ふ迄もなく、敵の彈幕を冒し、群る敵戰車群の中を征く、それは九死に一生を得られるかどうか、正に死の保線をかねた傳令だつたからである。

やがて、彼は志村一等兵を連れ、この死の任務についた。一卷から二卷、二卷から三卷と、兩名の決死の保線は、次々と完成されて行き、今一息といふ五卷目にかゝつた時、兩名はハツとして面を上げた。それは突如前進して來る、敵戰車の無限軌道の轟々たる響を耳にしたからだつた。と此の時既に、敵戰車の銃口からは、ダダダダツと火を吐いた。兩名の身邊には、無數の敵彈が飛んで來た。

「いかん……。」兩名はパツと身を伏せたが、砂漠の草は、兩名の體を忍ばすには餘りにも短かかつた。敵の急襲火は、伏せてゐるのも危險となつた。兩名は保線といふ重大任務がある。未だそれを完成してゐないのだ。敵彈を右に除け、左に避けてゐたが、敵彈は兩名の動く方向へ集中して來る。降つて來る。そのうちに、高松軍曹が、「うむ……。」と呻つて腹部を押へた。

「軍曹殿、やられましたか、しつかりして下さい。」と、志村一等兵が、側へ寄らうとした時、一等兵も亦貫通銃創を受けて倒れた。「軍曹殿ツ……。」と、痛手を堪へ、軍曹の側へ這ひ寄つた。

「軍曹殿ツ。」軍曹の體に縋りついた彼の顏は、悲痛其のものだつた。

「志村、お前もやられたのか、任務中殘念だなア。」といふ、軍曹の顏も亦、悲痛だつた。

「軍曹殿、最期であります。あの敵戰車に飛びついて死にませう。」「待てッ、お前は報告のために還れ。」

「軍曹殿は……。」「俺は駄目だ。この傷では駄目だから殘る。」

「では志村も軍曹殿と一緒に殘ります。」「いかん、それでは誰が報告をするか。還れといふに……。」「でも、軍曹殿一人を置いて、志村一人還れません。」「馬鹿ッ、今はそんなことを言つてゐる場合ではない。命令だ、還れ。」といふなり、志村一等兵が躊躇してゐる間に、用意して携行した手榴彈を右に、火焔瓶を左に引つさげ、「志村、必ず還れ、還つて報告せッ。」と叫ぶなり、近迫した敵戰車に飛びついて行つた。其の凄まじい迫力、駈けてゆく姿、それは腹部に致命的重傷を負ふてゐる者とは思へなかつた。

「アッ、軍曹殿ッ。」と、志村一等兵が面を上げた時は、軍曹は既に敵戰車に肉迫してゐた。敵戰車は、火を吐きながら、軍曹を目がけてのしかゝつて來た。

「野郎ッ。」と叫んだ軍曹は、手榴彈を叩きつけ、「今度はこれだ。」と、火焔瓶に點火するが否や、敵戰車に叩きつけようとした瞬間、左方百米の高地に現はれた敵が、一齊に軍曹目がけて猛射を浴せて來た。狙ふ敵は優勢、狙はれるものは軍曹一人だ。頭部に、胸部に、全身に數

彈を浴び、壯烈無比の戰死を遂げた。

命令とあれば止むなく、此の軍曹の肉彈突擊をあとに、重傷の身を喘ぎ喘ぎ、漸く部隊に歸還して報告を齎した。この報を得た部隊は、「高松軍曹の仇を討てッ。」と、時を移さず、忽ち此處に殺到して、敵を驅逐したが、彼は作業半に壯烈の死を遂げたが、其の剛勇に志氣を昂めた通信班の努力によつて、やがて川村部隊との電話連絡が完成した。

「高松、連絡が出來た。これもお前のお蔭だ。」と、通信班長は、收容されて來た、彼の亡骸に向いて、感謝の言葉を捧げた。

部下を殺したお詫びは戰死で

其の日は、岡本部隊藤田隊は、優勢の敵陣地前、二百米にまで進擊した。此の時國守隊の擲彈投手山根高雄上等兵（廣島縣三原市本町出身）が射ちかくる彈丸は、敵の機關銃を片ツ端から叩き壞して行つた。敵にとつても、我が必中の擲彈筒から與へられる損害が大きいために、敵の掩護砲火は、これに向つて集中された。

我方はまた、「前進だ〳〵。損害を尠くするためには、一意たゞ前進あるのみ。」と、敵彈幕の中を、ひた押しに進んだ。死傷者は續出した。友を呼び、敵を罵り、無念を叫び、友を勵まし、次々に殪れて行く。生き殘るものは、進んでは伏せ、伏せては進み、一歩々々敵に肉迫し